



2026

筑波大学大学院 人間総合科学学術院 人間総合科学研究群

フロンティア**医科学**

学位プログラム

公衆衛生学

学位プログラム

修 士 課 程

目次

CONTENTS



■第一部：フロンティア医科学学位プログラム

1	フロンティア医科学学位プログラムについて／About the Program	1
2	フロンティア医科学学位プログラムの概要／Outline	2
3	修了生より／Voice from Graduated Students	4
4	カリキュラム一覧／Curriculum	6
5	研究グループ紹介／Research Groups	10
6	医科学特別演習（修士論文研究）／Dissertation in Medical Sciences	23

■第二部：公衆衛生学学位プログラム

1	公衆衛生学学位プログラムについて／About the Program	24
2	公衆衛生学学位プログラムの概要／Outline	25
3	修了生より／Voice from Graduated Students	26
4	カリキュラム一覧／Curriculum	28
5	研究グループ紹介／Research Groups	29
6	公衆衛生学特別演習（修士論文研究）／Dissertation in Public Health Sciences	33

■第三部：共通項目

7	国際交流／International Exchange	34
8	インターンシップ／Internship	36
9	就職支援活動（キャリアパス）／Career Path Program	38
10	卒業生の進路／Career Options	40
11	入学試験まで／Before Admission Examination	41
12	入学試験／Admission Examination	43
13	奨学金・TA制度／Scholarship	44
14	学生生活／Students' Life	45
15	情報発信／Official Twitter and Facebook	46
16	アクセス／Access	47

フロンティア医科学学位プログラム について

About the Program

フロンティア医科学は、基礎医学、臨床医学、医学物理学、橋渡し研究、さらにはレギュラトリーサイエンスに至るまで、幅広い学術領域を横断する学際的分野です。生命科学・医療技術の急速な進展とともに、医科学を取り巻く環境は大きく変化しており、複雑化・高度化する医療課題に対して、分野横断的な視点と高度な専門性を併せ持つ人材の育成がこれまで以上に求められています。

本学のフロンティア医科学学位プログラムは、その前身である「医科学研究科」が1979年に我が国で初めて設置された医科学修士課程としての理念と実績を継承しつつ、時代の要請に応える形で発展してきました。2020年度の大学院教育改革により、明確な人材育成目標のもとに再編され、現在では「医科学」「医学物理学」「橋渡し研究・レギュラトリーサイエンス」、さらに2026年度からは「感染症危機管理学」を加えた4つの教育・研究分野から構成されています。

本プログラムでは、医科学の基盤となる知識と研究手法を体系的に修得するとともに、社会課題の解決につながる実践的な研究力を養うことを重視しています。研究者や高度専門職業人として、医療・健康・生命科学分野の発展に貢献できる人材の育成を目的とし、国内外の多様な研究機関との連携や、インターンシップ、国際交流プログラムなど、実践的かつ国際的な学修環境を整えています。

本学位プログラムには、医学・生命科学のみならず、工学、薬学、理学など多様なバックグラウンドを持つ学生が集い、互いに刺激を受けながら学んでいます。200名を超える教員が分野横断的に連携し、学生一人ひとりの個性と可能性を最大限に引き出す教育・研究体制を整えています。

本プログラムでの学びを通して、皆さんが専門性と国際的視野を兼ね備えた医科学の担い手として成長し、安心で健康な社会の実現に貢献されることを心より期待しています。



フロンティア医科学
学位プログラムリーダー
松坂 賢

Master's Program in Medical Sciences is an interdisciplinary field that integrates a wide range of disciplines, including basic and clinical medicine, medical physics, translational research, and regulatory science. As medical science and healthcare continue to advance rapidly, the academic foundations supporting these fields have expanded and diversified, forming a vast and highly integrated body of knowledge. At the same time, the aging of society and increasing complexity of health challenges have heightened the demand for professionals equipped with broad scientific perspectives and advanced expertise capable of contributing to a safe, healthy, and sustainable society.

The Master's Program in Medical Sciences Degree Program traces its origins to the Graduate School of Medical Science, which was established in 1979 as Japan's first master's program dedicated to medical sciences for students from diverse academic backgrounds. Building upon this long-standing tradition, the program has continuously evolved to meet societal needs. In 2020, as part of the university-wide graduate education reform, the program was reorganized to clearly define its educational mission and now comprises four specialized tracks: Medical Science, Medical Physics, Translational and Regulatory Science, and, newly added in 2026, Infectious Disease Control for Health Security.

The program provides a comprehensive education that integrates fundamental biomedical science with applied and translational research, aiming to cultivate professionals capable of contributing to innovation in medicine, healthcare, and related industries. Through interdisciplinary coursework, research training, and close collaboration with external institutions, students acquire both advanced expertise and practical skills applicable to real-world challenges.

In addition, the program offers a rich international learning environment, including opportunities for overseas study and internships, as well as collaborative research with partner institutions around the world. Leveraging the unique academic environment of Tsukuba Science City, students are encouraged to broaden their perspectives and engage in cutting-edge research across institutional and disciplinary boundaries.

Supported by a faculty of more than 200 members spanning all areas of medical science, the program is committed to fostering the next generation of researchers, educators, and professionals who will lead the future of healthcare and life sciences. We sincerely hope that through this program, students will develop both deep expertise and a global outlook, and go on to make meaningful contributions to society through innovation and leadership in medical science.

フロンティア医科学学位プログラムの概要

Outline



フロンティア医科学は、基礎医学・臨床医学・医学物理学・橋渡し研究・レギュラトリーサイエンスなどを横断する学際的分野です。本学位プログラムは、「医科学」「医学物理学」「橋渡し研究・レギュラトリーサイエンス」「感染症危機管理学」の4つの教育・研究分野から構成され、医科学の包括的な基盤教育を基に、社会的ニーズに応える実践的かつ幅広い教育・研究を展開しています。研究者・大学教員をはじめとする高度専門職業人として、安心して健康な社会の実現と持続に貢献できる人材の育成を目指しています。

The Master's Program in Medical Sciences is an interdisciplinary field that integrates a broad range of disciplines, including basic and clinical medicine, medical physics, translational research, and regulatory science. The program comprises four specialized tracks: Medical Science, Medical Physics, Translational and Regulatory Science, and Infectious Disease Control for Health Security. Built on a comprehensive foundation in medical science, the program provides practical and broad-based education and research aligned with societal needs. Its goal is to cultivate researchers, university faculty members, and highly skilled professionals who contribute to the realization and sustainability of a safe and healthy society.

■ 医科学 (Medical Science)

近年の、医学や医療技術の発展には目覚ましいものがあり、新たな進歩が常に求められています。医科学プログラムでは、日進月歩の医学に貢献できる人材を養成するため、主に実験科学を基盤として広く医科学分野を学修するようにカリキュラムが組まれています。基礎医学や臨床医学に跨る包括的な医科学の基盤的知識をカリキュラムに従って学習し、専門領域の深い学識を養った上で、修士論文研究を通して、専門領域における諸問題について、包括的な視点でそれを解明し、解決できる能力を身につけます。

Medical Science program was established to provide opportunities for students who had received undergraduate education other than in medicine to obtain knowledge of medicine and medical sciences, and to develop the Skills necessary for its application. Graduates of this program are expected to contribute to the progress of research in the fields of basic medical sciences and clinical medicine.

■ 医学物理学 (Medical Physics)

医学物理学プログラムは、文部科学省の大型プロジェクト「がんプロフェッショナル養成プラン（平成19年度～平成23年度）/がんプロフェッショナル養成基盤推進プラン（平成24年度～平成28年度）/多様な新ニーズに対応するがん専門医療人材（がんプロフェッショナル）養成プラン（平成29年度～）」の中で、群馬大学、茨城県立医療大学、群馬県立県民健康科学大学と連携して教育を進めています。「臨床および研究の両分野で、理工学と医学の架け橋となる人材の養成」をキャッチフレーズに、「がん医療を診断と治療という2つの技術的側面から支えるプロフェッショナルの養成」、「医学物理分野における先端的な研究開発を行う人材の養成」を柱にした大学院教育を掲げて教育に取り組んでいます。また、筑波大学は陽子線を医学利用するための施設を有しており、今後日本で広まっていくことが予想される陽子線治療における人材の養成も教育目標の1つです。平成28年度からは、「課題解決型高度医療人材養成プログラム（文部科学省）」の中で、将来起こりうる放射線リスク対策として放射線災害のあらゆる状況を想定した“全時相”をキーワードとし、放射線災害の全時相に対応できる人材養成を目指した教育プログラム（RaMSEP）も進めております。修士修了後、さらに高度な知識や技術を身につけたい方のために、博士課程に加え、医学物理士レジデントのプログラムも用意しています。

There are two main goals in education:

- 1) Training of the professional medical staffs capable of supporting cancer therapy from the view of both medical diagnosis and treatment,
- 2) Training of the research staffs capable of researching and developing medical physics frontier.

We train medical physicists, quality control specialists in medicine, and specialists developing medical equipments and technologies.

■ 橋渡し研究・レギュラトリーサイエンス (Critical Path Research/Regulatory Science)

基礎研究シーズを実用化するためには、候補化合物のスクリーニング、最適化、非臨床試験などの応用研究と橋渡し研究、臨床試験（治験）を実施する必要があります。これらの研究・試験を実施するにあたっては、多額なコスト、マンパワーがかかること、また、各種の薬事的、倫理的な規制に対応することが必要であり、超えることが難しい「死の谷」があるとされています。橋渡し研究・レギュラトリーサイエンスのカリキュラムでは、「死の谷」を超えるための橋渡し研究・臨床研究の支援人材（プロジェクトマネージャー、臨床研究コーディネーター（CRC）、モニターなど）を、実際に臨床研究・橋渡し研究のオンザジョブトレーニング（OJT）を実施し養成します。製薬企業・医療機器企業などの開発部門、開発業務受託機関（CRO）、医療機関の臨床研究支援組織などでの活躍が期待されます。また、本カリキュラムでは、医薬品や医療機器などの開発において、根拠に基づいた確かな予測、評価、判断を行い、科学技術の成果を人と社会の調和の上で最も望ましい姿に調整するための科学であるレギュラトリーサイエンスも学ぶことから、医薬品・医療機器などの承認審査官の道も考えられます。さらに、「死の谷」を超えるにあたり、海外（特にアメリカ）ではベンチャー企業が大きな役割を果たしています。そのシステムを日本にも取り入れるために、アントレプレナーシップ（起業家育成）教育にも取り組んでいます。

The Critical Path Research/Regulatory Science Curriculum fosters students to work in the research and development of new pharmaceuticals or medical equipment as technicians, clinical research coordinators, or administrators.

■ 感染症危機管理学 (Infectious Disease Control for Health Security)

近年、新興・再興感染症が相次ぎ、感染症の脅威は世界規模で深刻化しています。治療薬・ワクチンの開発から病原体サーベイランス、情報発信に至るまで、解決すべき課題は複雑化しており、学際的視点と社会実装力を兼ね備えた人材の育成が急務となっています。本プログラムは、筑波大学と関連する国立研究所が連携する協働大学院として設置され、基礎医学から臨床医学、社会医学・公衆衛生までを横断的に学ぶことを通じて、国際的に感染症対策を牽引できる高度専門職業人の育成をめざします。

In recent years, infectious diseases have emerged one after another, intensifying the global threat. As challenges, including the development of therapeutics and vaccines, pathogen surveillance, and information dissemination, become increasingly complex, there is an urgent need to cultivate professionals capable of implementing interdisciplinary solutions in society. This program, established through a collaboration between the University of Tsukuba and National Research Institutes related to infectious diseases, offers a cross-disciplinary curriculum spanning basic medicine, clinical medicine, and social medicine/public health to foster highly specialized experts in infectious disease control for health security.

各プログラム教育の特色についてはフロンティア医科学学位プログラムホームページをご覧ください。

修了生より

Voice from Graduated Students



佐々木 麻綾 (2024年修了)

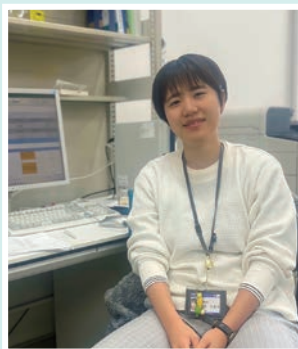
私は筑波大学医療科学類を卒業後に当プログラムへ進学し、薬剤耐性菌問題への関心から細菌学の研究を行っていました。研究を進めるなかで「身近な公衆衛生課題の解決に資する研究がしたい」という思いが芽生え、修了後は公衆衛生行政の現場である地方衛生研究所に入職しました。現在は動物由来感染症の行政検査に携わる傍ら、衛生動物に関する研究にも取り組んでいます。

当プログラムの魅力は、主体的に研究を進める力を養うことができる点だと思います。学生時代には、研究費の申請から実験の計画、成果発表に至るまで、自ら考えて研究を進めていく経験を重ねることができました。思うように進まず苦勞したことも多くありましたが、研究員として研究テーマの設定から成果発表まで全てを自ら進めることが求められるようになった今、当時の試行錯誤が現在の私を支える確かな基盤になっていることを日々実感しています。また、指導教員の先生方や仲間との議論が、自分の視野を広げる大きな助けになったことは言うまでもありません。

皆様も当プログラムで、時に困難に直面しながらも主体的に挑戦を重ねることで、将来の道を力強く進んでいく力を培われることを願っています。

松澤 亮輔 (2024年修了)

私は筑波大学生物学類からフロンティア医科学学位プログラムに入学しました。就職希望の修士課程学生は、1年次の夏には就職活動を始めることが一般的ですが、私はどうにもそのスケジュール感に馴染めませんでした。そんな中、指導教員とのディスカッションや研究室での生活を通して、「ここを1-2年で去るのは惜しい。ここでもっと研究を続けたい」と感じるようになり、博士課程(医学学位プログラム)への進学を決意しました。最大の不安は生活費でしたが、JST-SPRING(次世代研究者挑戦的研究プログラム)に採択されていた先輩などのアドバイスのおかげで、私も採択していただくことができました。博士課程では、修士課程の頃と比べて「自分の研究をいかにして"科学史の大きな文脈の中に位置づける"か」という視点をより意識できるようになったと感じています(勿論、まだまだ道半ばです)。フロンティア医科学学位プログラムへの入学を考えていらっしゃる皆さんには、まずは修士課程の2年間を使って論文執筆と議論に腰を据えて取り組んでいただき、そこで「もっと深めたい」と感じたら、ぜひ博士進学も選択肢に加えていただければと思います。



中田 久美子 (2024年修了)

私は筑波大学の生物資源学類を卒業後、本プログラム(橋渡し・臨床研究学研究室)に進学し、現在は他大学の臨床試験を支援する組織(ARO)に勤務しています。本プログラムには多様なバックグラウンドを持つ学生が在籍し、研究テーマも広範囲にわたります。研究の進捗や成果を報告する機会が多く設けられており、他の学生の発表を通じて多くのことを学び、刺激を受けました。また、「必要な情報を収集し、周囲と連携して実施体制を構築すること」や「専門知識や研究内容・成果を的確かつ分かりやすく説明すること」など、多くのスキルを丁寧にご指導いただき、試行錯誤を重ねながら修士研究に取り組みました。社会人となった今、2年間で得た知識と経験が大きな支えとなっています。修了生の一人として、多くの方がこの場所でご自身の将来の礎となる充実した日々を過ごされることを願っています。

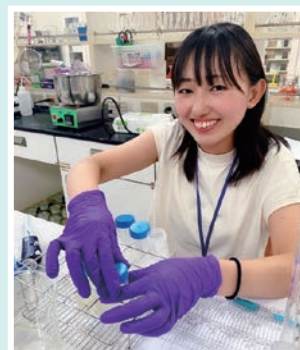
岡村 ケエクシャー (2024年修了)

私はパキスタンで学部を修了した後、感染症の脅威や公衆衛生の課題に向き合う強い意志を胸に、フロンティア医科学学位プログラムに進学しました。修士課程ではウイルス感染が引き起こす細菌性肺炎に関する研究を行い、現在は医学学位プログラム(博士課程)でその研究をさらに深めています。パキスタンでの経験から、限られた環境でも問題解決に取り組む力を培い、日本の高度な研究環境に触れることで視野が大きく広がりました。修士課程の2年間で得たプレゼンテーションやデータ解析のスキル、実験計画の技術は、研究の道を一歩一歩切り拓く原動力となっています。このプログラムは、私にとって『挑戦と成長の舞台』であり、同じ志を抱く方々にもこの環境で新しい可能性を見つけてほしいと強く願っています。



宮川 礼奈 (2021年修了)

私は他大学卒業後、フロンティア医科学専攻に入学しました。基礎研究の成果がどのように臨床に応用されていくのか、その過程を学びたいと思い、「橋渡し・臨床研究学研究室」を選びました。修士論文研究では、納豆を用いた「橋渡し研究」に取り組みました。研究を通して、基礎研究の成果を実用化するには、乗り越えるべき壁が多く、実用化の難しさを実感しました。卒業後は、製薬会社で臨床開発職として勤務します。社会人生活において、2年間で研究を通して学んだことは大いに役立つのではないかと感じています。また、フロンティア医科学専攻は、講義が豊富であり、幅広い選択肢の中から学びたい科目を選択し、受講することができるため、学びたいことを思い切り学べる環境であると思います。



鈴木 颯 (2019年修了)

私は他大学を卒業後、フロンティア医科学学位プログラムに進学しました。2年間の中で特に印象に残っているのは、国際プログラムでの経験です。短期留学生のサポートに参加した際、初日は相手の英語がほとんど聞き取れず不安もありましたが、実験や食事、観光を共にするうちに次第に慣れ、最終日には自分でも驚くほどスムーズに会話できるようになりました。また、ベトナムで開催された研究ワークショップではティーチングアシスタントを務め、異文化の価値観に触れることで多様性への理解が深まりました。

現在、私は大学で教員として勤務しておりますが、学生時代に培った国際的なコミュニケーション力は、人前で英語を使って話す場面に自然と対応できる大きな支えになっています。国際化が進む今、このプログラムで得られる学びは、どんな進路を選んでも必ず役立つものだと感じます。フロンティア医科学学位プログラムには、研究力はもちろん、国際的な視野やコミュニケーション力を大きく伸ばせる機会が数多くあります。これから入学を考えている皆さんにも、ぜひ未知の環境に積極的に挑戦し、自分の可能性を広げてほしいと思います。

武井 健太 (2017年修了)

私はこれまで、筑波大学の医療科学類を卒業→フロンティア医科学専攻で修士課程を修了→製薬企業での研究職→試験受託機関での研究職というキャリアを歩んできました。様々な場所で研究を行ってきた過去を振り返ると、フロンティア医科学は「伝える力」と「時間管理スキル」を学べた場所であったように思います。

社会人になると、同じ研究所の職員、共同研究を行う外部の先生方、研究に疎い他部署の方々など、聞き手の背景が様々異なる中で、相手の知識レベルに合わせて自分の研究内容や考え方をうまく伝える能力が求められます。また、期日を守るため、日々のスケジュールを立てて効率的に仕事を進める能力が必要となります。フロンティア医科学では、多様なバックグラウンドをもつ学生や最先端の研究を行う先生方と議論する機会が多くあったこと、限られた時間の中で研究成果を出す必要があったためスケジュールリングが習慣化されていたことにより、これらの能力を磨くことができました。

これから入学を検討されている方には、ぜひ自らの考えを積極的に周囲に発信してコミュニケーションをとり、時間を有効活用して意義ある大学院生活を送っていただきたいと思います。



富田 哲也 (2016年修了)

私は診療放射線技師免許を取得後、千葉大学医学部附属病院に入職し、社会人大学院生として当専攻（現学位プログラム）の医学物理学コースで学びました。社会人として働きながら進学した理由は、医学物理士としての教養と研究するスキルを身に付けたかったからです。フロンティア医科学の医学物理学コースは、医学物理士認定機構から認定を受けている数少ない医学物理士養成の専門コースの一つであり、充実した教育プログラムが構築されています。社会人でも効率的に学べるように配慮されていることも魅力的であり、当時、千葉市に在住していた私でも研究に時間を割くことができました。医学物理学研究室に在籍する教員は、がん治療の先端技術として注目されている陽子線治療、ホウ素中性子捕捉療法（BNCT）及び機械学習を用いた補助技術の分野、さらには、画像診断や放射線防護分野を牽引する先生方です。その中の一人が、現在、フロンティア医科学学位プログラムのリーダーに就任されている磯辺智範先生であり、ご指導いただいた「痛すぎる愛のムチ」は今でも忘れることができません。

修士課程修了後は、当大学の博士課程に進学し、博士（医学）を取得しました。現在とは言いまして、医学物理学研究室が併設された恵まれた研究環境に味を占め、筑波大学附属病院放射線部で副診療放射線技師長として放射線診療に従事しています。もし進学を躊躇している方がいたら、充実した教育プログラムと日本屈指の研究環境が整っているフロンティア医科学学位プログラムで大きな一歩を踏み出してみたいかがでしょうか。

フロンティア医科学学位プログラムホームページではさらに多くの修了生の声が聞けます。

カリキュラム一覧

Curriculum

フロンティア医科学学位プログラムにおける教育は標準在学年数2年で修了し、医科学・医学物理学・橋渡し研究・感染症危機管理学の全般についての広い視野と基本的学識を習得させることを教育の基本目標としています。しかし、短期間に医科学の広い領域のすべてを履修することは困難なので、問題指向・問題解決型の教育を通じて、基本的研究能力と実践力・応用力をかん養することを重視しています。学生は単に教室で学習だけでなく、修士論文研究やインターンシップなどを通じて、当面する専門領域における問題点を明らかにし、自ら解決する能力を身に付けることを目標としています。詳細はフロンティア医科学学位プログラムホームページをご覧ください (<http://www.md.tsukuba.ac.jp/FrontierSite/>)。

大学院共通科目

◎：必修科目 ○：履修推奨科目 無印：選択科目

ナンバリングコード	科目名	英語開講	単位	履修年次	モジュール	フロンティア医科学学位プログラム			
						医科学	医学物理学	橋渡し研究	感染症危機管理学
0A00104	生命倫理学		1	1・2	春C		○		
0A00103	研究倫理		1	1・2	春BC				

学術院共通専門基盤科目

◎：必修科目 ○：履修推奨科目 無印：選択科目

ナンバリングコード	科目名	英語開講	単位	履修年次	モジュール	フロンティア医科学学位プログラム			
						医科学	医学物理学	橋渡し研究	感染症危機管理学
0AS0507	社会医学概論	○	2	1	春AB			○	
0AS0501	医科学セミナーⅠ(ブレインサイエンス)		1	1・2	通年				
0AS0508	医学物理学のすゝめ		1	1・2	春B		○		
0AS0510	“巨人の肩に立つ” —生命医科学の歴史と未来—		1	1・2	春BC				
0AS0512	研究マネジメント基礎		2	1	春C	○		○	
0AS0514	原子力安全管理のすゝめ		1	1	秋B		○		

上記はフロンティア医科学学位プログラムが提供している科目です。人間総合科学学術院では、この他にも、人間総合科学全般に係る学際的要素と汎用の高い科目を準備しています。 <https://www.md.tsukuba.ac.jp/FrontierSite/data/curriculum/note01.pdf>

基礎科目

◎：必修科目 ○：履修推奨科目 無印：選択科目

ナンバリングコード	科目名	英語開講	単位	履修年次	モジュール	フロンティア医科学学位プログラム			
						医科学	医学物理学	橋渡し研究	感染症危機管理学
0ATGA11	人体構造学概論		2	1	春AB		○		
0ATGA13	臨床医学概論		2	1	秋AB			○	
0ATGA14	医科学特講		1	1・2	夏季休業中				
0ATGA15	医情報処理学特論		1	1	春AB				
0ATGA16	医学英語Ⅰ	○	1	1	春AB	○			
0ATGA17	医学英語Ⅱ	○	1	1	秋AB	○			
0ATGA19	医科学特別演習	○	8	2	通年	◎	◎	◎	◎
0ATGA21	インターンシップⅠ		1	1・2	通年	◎	◎	◎	◎
0ATGA22	インターンシップⅡ		1	1・2	通年				
0ATGA23	基礎医科学演習	○	3	1	通年		○		
0ATGA32	医科学セミナーⅡ(生化学・分子生物学)		1	1・2	通年				
0ATGA25	医科学セミナーⅤ(キャリアパス)		1	1・2	通年	○		○	
0ATGA35	医科学セミナーⅦ(臨床研究セミナー)		1	1・2	通年			○	
0ATGA27	人体生理学特論	○	1	1	春A				
0ATGA28	生化学特論	○	1	1	春AB				
0ATGA29	国際実践医科学研究特論Ⅰ	○	1	1・2	通年				
0ATGA30	国際実践医科学研究特論Ⅱ	○	2	1・2	通年				
0ATGA31	国際実践医科学研究特論Ⅲ	○	3	1・2	通年				
*OATHA12	医生物統計学概論 注：公衆衛生学関連科目	○	1	1	春AB			○	

*0ATGA19医科学特別演習は2年次4月に履修登録

*0ATGA19医科学特別演習の単位取得には「0ATGC46Scientific Ethics」または「大学院共通科目0A00103研究倫理」の履修が必要。

*OATHA12医生物統計学概論は公衆衛生学関連科目です。

専門基礎科目

◎：必修科目 ○：履修推奨科目 無印：選択科目

ナンバリング コード	科目名	英語開講	単位	履修年次	モジュール	フロンティア医科学学位プログラム			
						医科学	医学物理学	橋渡し研究	感染症危機 管理学
OATGC32	人体病理学概論	○	2	1	春AB				
OATGC33	実験動物科学特論・同実習	○	2	1	春AB				
OATGC34	内科学概論		2	1	秋AB				
OATGC35	外科学概論		1	1	秋AB				
OATGC36	ライフサイエンスにおける病態生化学		2	1	秋AB				
OATGC37	臨床検査総論		1	1・2	秋AB				
OATGC38	English Discussion & Presentation on Medical Sciences I	○	2	1・2	春AB				
OATGC39	English Discussion & Presentation on Medical Sciences II	○	2	1・2	秋AB				
OATGC41	神経科学特論	○	1	1・2	春A				
OATGC46	Scientific Ethics	○	1	1・2	春AB				

専門科目

◎：必修科目 ○：履修推奨科目 無印：選択科目

ナンバリング コード	科目名	英語開講	単位	履修年次	モジュール	フロンティア医科学学位プログラム			
						医科学	医学物理学	橋渡し研究	感染症危機 管理学
OATGE49	腫瘍学	○	2	1	秋AB				
OATGE51	薬理学	○	1	1	春AB				
OATGE52	ゲノム医学概論	○	2	1・2	秋AB				
OATGE54	放射線医科学特論		2	1	秋AB				
OATGE55	精神医学概論		1	1	秋AB				
OATGE57	臨床薬理学特論		1	1	秋AB			○	
OATGE58	橋渡し研究概論	○	2	1	秋AB			○	
OATGE61	ヒトの感染と免疫	○	2	1	春AB				
OATGE62	Stem cell therapy	○	1	1	春AB				
OATGE63	医薬品・医療機器レギュラトリーサイエンス		1	1	秋C			○	
OATGE64	適性技術教育	○	3	1・2	通年				
OATGE65	医学物理学詳論 I A		2	1	春AB		○		
OATGE66	医学物理学詳論 I B		2	1	秋AB		○		
OATGE67	医学物理学詳論 II		2	1	秋AB		○		
OATGE68	医学物理学詳論 III		2	1	秋ABC		○		
OATGE69	医学物理学詳論 IV		2	1	秋ABC		○		
OATGE71	医学物理学詳論 V		2	1	秋ABC		○		
OATGE75	医学物理学詳論 VI		2	1	秋ABC		○		
OATGE72	医学物理学問題解決型演習		1	1	春ABC		○		
OATGE73	医学物理学問題解決型実習		1	1	秋ABC		○		
OBTX114	創業フロンティア科学	○	1	1・2	秋AB				
*OATHE24	医療経済学 注：公衆衛生学関連科目	○	1	1・2	秋C			○	
OATGE76	感染症学詳論	○	2	1	秋BC				○
OATGE77	感染症インターンシップ		2	1・2	通年				○
OATGE78	感染症学問題解決型実習		3	1	通年				○
OATGE79	感染症学問題解決型演習		2	1	通年				○
OATGE80	リスクコミュニケーション概論		1	1	秋BC				

*OATHE24医療経済学は公衆衛生学関連科目です。

Curriculum

The basic goal of the Master's Program in Medical Sciences is to impart a broad view of and basic knowledge about medical science, medical physics, critical path research and infectious disease control for health security. However, it is difficult to take in all the wide field of medical science in the short period of the master's program. Therefore, we emphasize that students themselves learn basic research capabilities and practical applied skills through our problem-oriented and problem-solving type of education. We hope that students not only learn in the classroom, but also clarify the problems in their specialized area and gain the ability to solve them on their own through their master's thesis research and internships. For more information, please visit the Master's Program in Medical Sciences homepage. (<http://www.md.tsukuba.ac.jp/FrontierSite/en/index.html>)

Graduate General Education

◎: Compulsory Subject ○: Subject recommended Unmarked: Elective Subject

Numbering Code	Course Name	Conducted in English	Credit	Student Year	Modules	Master's Program in Medical Science			
						Medical Science	Medical Physics	Critical Path Research	Infectious Disease Control for Health Security
0A00104	Bioethics in medical research and practice		1	1・2	Spring C		○		
*0A00103	Introduction to Academic Integrity		1	1・2	Spring AB				

Common Subjects

◎: Compulsory Subject ○: Subject recommended Unmarked: Elective Subject

Numbering Code	Course Name	Conducted in English	Credit	Student Year	Modules	Master's Program in Medical Science			
						Medical Science	Medical Physics	Critical Path Research	Infectious Disease Control for Health Security
0AS0507	Introduction to Social Medicine	○	2	1	Spring AB			○	
0AS0501	Medical Science Seminar I: Brain Science Seminar		1	1・2	All year				
0AS0508	An Encouragement of Medical Physics		1	1・2	Spring B		○		
0AS0510	History and Future of Biomedical Sciences: Standing on the Shoulders of Giants		1	1・2	Spring BC				
0AS0512	Lecture and Seminar on Research Management (Basic)		2	1	Spring C	○		○	
0AS0514	An Encouragement of Nuclear Safety Management		1	1	Fall B		○		

The courses listed above are offered by the Frontier Medical Science Degree Program. In addition, the Graduate School of Comprehensive Human Sciences provides a wide range of interdisciplinary and versatile courses related to the field of comprehensive human sciences. <https://www.md.tsukuba.ac.jp/FrontierSite/en/curriculum/list.html>

General Foundation Subjects

◎: Compulsory Subject ○: Subject recommended Unmarked: Elective Subject

Numbering Code	Course Name	Conducted in English	Credit	Student Year	Modules	Master's Program in Medical Science			
						Medical Science	Medical Physics	Critical Path Research	Infectious Disease Control for Health Security
0ATGA11	Human Anatomy : Lecture		2	1	Spring AB		○		
0ATGA13	Clinical Medicine		2	1	Fall AB			○	
0ATGA14	Topics in Medical Sciences		1	1・2	Sum Vac				
0ATGA15	Applied Medical Information Technology : Lecture		1	1	Spring AB				
0ATGA16	English in Medical Science and Technology I	○	1	1	Spring AB	○			
0ATGA17	English in Medical Science and Technology II	○	1	1	Fall AB	○			
*0ATGA19	Dissertation in Medical Sciences	○	8	2	All year	◎	◎	◎	◎
0ATGA21	Internship I		1	1・2	All year	◎	◎	◎	◎
0ATGA22	Internship II		1	1・2	All year				
0ATGA23	Seminar on Basic Medical Sciences	○	3	1	All year		○		
0ATGA32	Medical Science Seminar II: Biochemistry and Molecular Biology		1	1・2	All year				
0ATGA25	Medical Science Seminar V: Career Path		1	1・2	All year	○		○	
0ATGA35	Medical Science Seminar VII: Seminar of Clinical Study		1	1・2	All year			○	
0ATGA27	Lecture in Human Physiology	○	1	1	Spring A				
0ATGA28	Topics in Biochemistry	○	1	1	Spring AB				
0ATGA29	International Medical Sciences Exchange Program I	○	1	1・2	All year				
0ATGA30	International Medical Sciences Exchange Program II	○	2	1・2	All year				
0ATGA31	International Medical Sciences Exchange Program III	○	3	1・2	All year				
*0ATHA12	Biostatistics, Basic Note: Subject for Public Health	○	1	1	Spring AB			○	

*Please register for "Dissertation in Medical Sciences (0ATGA19)" in April in your second year.

*Students have to take either "Introduction to Academic Integrity(0A00103)" or "Scientific Ethics(0ATGC46)" as a prerequisite for "Dissertation in Medical Sciences (0ATGA19)".

**0ATHA12 Biostatistics, Basic" is a Public Health related course.

Foundation Subjects for Major

⊙: Compulsory Subject ○: Subject recommended Unmarked: Elective Subject

Numbering Code	Course Name	Conducted in English	Credit	Student Year	Modules	Master's Program in Medical Science			
						Medical Science	Medical Physics	Critical Path Research	Infectious Disease Control for Health Security
OATGC32	Introduction to Human Pathology	○	2	1	Spring AB				
OATGC33	Laboratory Animal Science and Animal Experimentation	○	2	1	Spring AB				
OATGC34	Outline of Internal Medicine		2	1	Fall AB				
OATGC35	Outline of Surgical Disorders		1	1	Fall AB				
OATGC36	Innovative Clinical Biochemistry in Life Science		2	1	Fall AB				
OATGC37	Laboratory Medicine		1	1 · 2	Fall AB				
OATGC38	English Discussion & Presentation on Medical Sciences I	○	2	1 · 2	Spring AB				
OATGC39	English Discussion & Presentation on Medical Sciences II	○	2	1 · 2	Fall AB				
OATGC41	Prominent Discoveries in Neuroscience	○	1	1 · 2	Spring A				
OATGC46	Scientific Ethics	○	1	1 · 2	Spring AB				

Major Subjects

⊙: Compulsory Subject ○: Subject recommended Unmarked: Elective Subject

Numbering Code	Course Name	Conducted in English	Credit	Student Year	Modules	Master's Program in Medical Science			
						Medical Science	Medical Physics	Critical Path Research	Infectious Disease Control for Health Security
OATGE49	Oncology	○	2	1	Fall AB				
OATGE51	Pharmacology	○	1	1	Spring AB				
OATGE52	Genome Medicine	○	2	1 · 2	Fall AB				
OATGE54	Radiological Science		2	1	Fall AB				
OATGE55	Psychiatry		1	1	Fall AB				
OATGE57	Pharmaceutical Science		1	1	Fall AB			○	
OATGE58	Critical Path Research Management	○	2	1	Fall AB			○	
OATGE61	Human Infection and Immunology	○	2	1	Spring AB				
OATGE62	Stem cell therapy	○	1	1	Spring AB				
OATGE63	Regulatory Science of Medical Products		1	1	Fall C			○	
OATGE64	Appropriate technology	○	3	1 · 2	All year				
OATGE65	Medical Physics IA: Lecture		2	1	Spring AB		○		
OATGE66	Medical Physics IB : Lecture		2	1	Fall AB		○		
OATGE67	Medical Physics II : Lecture		2	1	Fall AB		○		
OATGE68	Medical Physics III : Lecture		2	1	Fall ABC		○		
OATGE69	Medical Physics IV : Lecture		2	1	Fall ABC		○		
OATGE71	Medical Physics V : Lecture		2	1	Fall ABC		○		
OATGE75	Medical Physics VI : Lecture		2	1	Fall ABC		○		
OATGE72	Medical Physics Seminar		1	1	Spring ABC		○		
OATGE73	Medical Physics Practice		1	1	Fall ABC		○		
OBTX114	Frontier Science in Drug Discovery	○	1	1 · 2	Fall AB				
*OATHE24	Health Economics Note: Subject for Public Health	○	1	1 · 2	Fall C			○	
OATGE76	Advanced Course in Infectious Disease Control	○	2	1	Fall BC				○
OATGE77	Internship in Infectious Disease Control		2	1 · 2	All year				○
OATGE78	Problem-Based Practical Course in Infectious Disease Control		3	1	All year				○
OATGE79	Problem-Based Seminar in Infectious Disease Control		2	1	All year				○
OATGE80	Introduction to Risk Communication		1	1	Fall BC				

**OATHE24 Health Economics" is a Public Health related course.

5 研究グループ紹介

Research Groups

フロンティア医科学学位プログラムには、医科学、医学物理学、橋渡し研究、感染症危機管理学の幅広い領域にわたる研究グループがあり、活発な研究活動が行われています。

In the Master's Program in Medical Sciences, there are research group in broad range of fields-basic and clinical medicine, where a lively research activities are conducted.

解剖学・発生学 (高橋 智)

Anatomy and Embryology (TAKAHASHI Satoru)

satoruta@md.tsukuba.ac.jp

<http://www.md.tsukuba.ac.jp/basic-med/anatomy/embryology/index.html>



- ・膵臓β細胞の発生・分化の分子機構の解明とその応用
- ・マクロファージの分化・機能発現における Large Maf 転写因子群の機能解明
- ・糖転移酵素遺伝子改変マウスを利用した生体における糖鎖機能の解明
- ・新イメージング技術の開発による疾患解析と創薬
- ・疾患モデルマウスの病態および遺伝子機能の解明

- ・ Elucidation of molecular mechanism of pancreatic beta-cell development and its application.
- ・ Functional analysis of large Maf transcription factor family, MafB and c-Maf in macrophage development and functions.
- ・ Elucidating biological roles of carbohydrates using glycosyltransferase conditional KO mice.
- ・ Study of diseases and drug discovery by development of novel imaging system.
- ・ Elucidation of etiology and gene function in disease model mice.

解剖学・神経科学 (武井 陽介)

Anatomy and Neuroscience (TAKEI Yosuke)

ytakei@md.tsukuba.ac.jp

<http://www.kansei.tsukuba.ac.jp/~takeilab>



統合失調症や自閉症などの精神神経疾患には病態の理解に基づく根本的治療法がなく、多くの患者さんが症状と社会不適応に悩んでいます。これらの疾患の背景にはニューロンの機能や形態の異常が存在し、それは遺伝要因と環境要因の複合的な影響によってもたらされます。私たちは精神神経疾患の病態を分子レベルで解明し、治療や予防へと繋げることを目標に、以下のテーマに注目して研究を行っています。

- (1) ニューロンの細胞内輸送機構
- (2) ニューロンの細胞内輸送の破綻と精神神経疾患
- (3) 免疫異常と脳の発達・機能異常
- (4) 精神神経疾患のマウスモデル研究

Our goal is to elucidate the pathogenesis and pathophysiology of schizophrenia and autism. In these illnesses, neuronal morphology and function are affected by a combination of genetic and environmental factors. A better understanding of the molecular mechanisms underlying these illnesses is important as it will lead to the future development of novel methods of treatment and prevention. Our current research is focusing on the following four areas:

- (1) Mechanisms of intracellular transport in neurons.
- (2) Mental illnesses based on the disruption of intracellular transport machinery.
- (3) Neuronal abnormalities caused by immunological abnormalities.
- (4) Analysis of mouse model of mental illnesses.

診断病理学 (松原 大祐)

Diagnostic Pathology (MATSUBARA Daisuke)

matubad-ky@umin.ac.jp

<https://www.md.tsukuba.ac.jp/diagpatho/home/>



- ① 手術検体、細胞株 (肺癌細胞株 41 株、小細胞癌細胞株 14 株、食道癌細胞株 10 株) を用いた解析を行い、癌の分子標的を、分子マーカー、形態の両面から探る。
- ② 肺癌切除検体を用いたVisium解析、全ゲノム解析、シングルセル解析などを行う。
- ③ 肺癌にみられる異常な分化 (脱分化、神経内分泌分化、EMT、胃腸上皮分化など) の分子機構の解明。
- ④ 癌細胞株を用いた薬剤感受性、抵抗性獲得機序の研究。

- (1) Analysis using surgical specimens and cell lines (41 lung adenocarcinoma cell lines, 14 small cell carcinoma cell lines, and 10 esophageal carcinoma cell lines) to explore molecular targets of cancer in terms of both molecular markers and morphology.
- (2) Visium analysis, whole genome analysis, single cell analysis, etc. using resected lung cancer specimens.
- (3) Elucidation of molecular mechanisms of abnormal differentiation (dedifferentiation, neuroendocrine differentiation, EMT, gastrointestinal epithelial differentiation, etc.) seen in lung cancer.
- (4) Research on the mechanisms of drug sensitivity and resistance acquisition using cancer cell lines.

認知行動神経科学 (山田 洋)

Cognitive and Behavioral Neuroscience (YAMADA Hiroshi)

h-yamada@md.tsukuba.ac.jp

<https://www.md.tsukuba.ac.jp/basic-med/cog-neurosci/index2.html>



ヒトを含む動物は、物のよし悪しの判断を繰り返し生活を送っています。我々の研究グループでは、この価値判断の脳の仕組みを調べるために次の研究を進めています。

- ① ヒト価値判断の霊長類動物モデルを用いた脳機能
- ② 前頭葉や大脳基底核から構成される神経回路が価値判断を引き起こす仕組み
- ③ 意欲が行動を調節する仕組み

Humans and Animals have their daily lives repeatedly making decisions whether something is good or bad. Our research group is conducting the following research to investigate the brain mechanisms behind this value-based decision makings.

- ① Developing primate model for human cognitive function, and neural mechanisms for economic decision makings are examined
- ② Examination of neural circuitry underlying economic decision makings
- ③ Examining how the motivation and willingness to act are emerged in the brain

システム生理学 (國松 淳)

Systems Physiology (KUNIMATSU Jun)

jkunimatsu@md.tsukuba.ac.jp

<https://www.md.tsukuba.ac.jp/basic-med/sys-physiol/>



私たちを取り巻く環境は時々刻々と複雑に変化しますが、生物はそれに合わせて適切に行動することができます。このような、進化の中で生物が獲得した適応行動の発現機構については、まだ明らかになっていないことが多くあります。我々の研究グループでは、これら適応行動の神経メカニズムを、感覚入力から行動発現に至るシステムとして理解し、精神・神経疾患など適応行動の機能が働かない病態を解明することで医学へ貢献しています。現在は特に、①呼吸が認知機能に与える影響、②社会性の基盤となる神経回路、③随意呼吸の制御機構について研究を行っています。

研究方法としては、行動課題を用いたヒトとサル(マカクザル)の比較や、サルの脳の活動をミリ秒レベルの解像度で記録したり、神経回路選択的に活動操作したりすることによって神経ネットワークによる情報処理機構を詳細に調べています。

We flexibly adjust our behavior to adapt to the dynamically changing environment in a complex manner. The neuronal mechanisms underlying these adaptive behaviors, acquired through evolution, remain unclear. Our laboratory aims to understand the neural mechanisms of these adaptive behaviors at the system level from sensory input to behavioral execution and contribute to the medical field by elucidating pathological conditions such as psychiatric and neurological diseases in which adaptive behaviors are impaired. Therefore, we examine human and monkey behaviors by using cognitive tasks and analyzing neuronal activity during the task at the millisecond time resolution in monkey. Currently, our focus is on the following themes: (1) The effects of breathing on cognitive functions. (2) Neural circuits underlying social behavior. (3) Neural mechanisms of voluntary breathing.

生化学・分子細胞生物学 (入江 賢児)

Biochemistry, Molecular Cell Biology (IRIE Kenji)

kirie@md.tsukuba.ac.jp

<https://www.md.tsukuba.ac.jp/basic-med/molcellbiol/index.html>



細胞に、温度・pHなどの環境変化や栄養源飢餓などのストレスが生じると、それらに対応する細胞応答が起こることで、細胞の恒常性が維持される。私たちの研究室では、単細胞真核生物である出芽酵母 (*Saccharomyces cerevisiae*) を用いて、「遺伝子発現の転写後制御」と「細胞内シグナル伝達系」の観点から、細胞の恒常性維持の分子メカニズムの研究を行っています。具体的には、(1) 酵母と動物細胞におけるRNA結合タンパク質による遺伝子発現の転写後調節機構、(2) RNA局在と局所的翻訳の制御機構、(3) 小胞体ストレス応答の制御機構、(4) 小胞輸送による前胞子膜形成の分子機構について、研究を行っています。

Our laboratory uses a budding yeast, *Saccharomyces cerevisiae*, as a model organism, and is focusing on understanding the molecular mechanisms and the physiological functions of the following processes.

- (1) Post-transcriptional regulation of gene expression by RNA-binding proteins.
- (2) Molecular mechanism of mRNA localization and local translation regulating cell polarity, asymmetric cell division, and cell-fate.
- (3) Regulation of the endoplasmic reticulum stress response by protein kinases.
- (4) Prospore membrane formation by vesicle docking.

遺伝子制御学 (西村 健)

Laboratory of Gene Regulation (NISHIMURA Ken)

ken-nishimura@md.tsukuba.ac.jp

<https://www.md.tsukuba.ac.jp/basic-med/biochem/gen/>



当研究グループは、細胞の発生・分化のメカニズムを遺伝子発現の観点から明らかにするため、転写因子やクロマチン構造に関する研究を行っています。iPS細胞誘導系や、脂肪細胞あるいは軟骨細胞を分化誘導する系を利用して、細胞のリプログラミングや分化に関わる転写因子のネットワークやエピジェネティックな遺伝子発現調節機構を明らかにし、医学応用に必要な知的基盤を、生化学、分子生物学および細胞生物学的手法を用いて解析しています。また、分子レベルの解析に加えて、独自の遺伝子導入系 (SeVdpベクター) を用いて、安全な分化組織を効率良く誘導する方法の構築も進めており、それらの再生医療等への実用化を目指しています。

Our research group aims to elucidate the mechanisms of cell development and differentiation from the perspective of gene expression by studying transcription factors and chromatin structure. Using systems for iPS cell generation as well as adipogenic and chondrogenic differentiation, we investigate the networks of transcription factors and the mechanisms of epigenetic regulation of gene expression involved in cell reprogramming and differentiation through biochemical, molecular biological, and cell biological approaches, in order to establish the scientific foundation necessary for medical applications. In addition to the molecular-level analyses, we are also developing methods for efficiently and safely inducing differentiated tissues using our original gene delivery system (SeVdp vector), with the aim of applying these methods to regenerative medicine.

神経生理学 (小金澤 禎史)

Neurophysiology (KOGANEZAWA Tadachika)

t-kogane@md.tsukuba.ac.jp

<https://www.md.tsukuba.ac.jp/physiology/t-kogane/index.html>



脳による血液循環および呼吸運動の微細なコントロールは生体の恒常性維持にとって重要な役割を果たしています。それゆえ、これらのシステムが正常に働かない場合には、重大な疾患をもたらすこととなります。しかしながらその実態については、未だに多くが不明なままです。当研究室では、そのブラックボックスを明らかにするために、げっ歯類の *in vivo* 標本および *in situ* 標本 (経血管灌流標本) を用いて、主に電気生理学的手法を用いた循環調節中枢および呼吸中枢の詳細な解析を行っています。現在、特に、①中枢神経系による呼吸運動調節機構の解明、②自律神経系による血液循環調節機構の解明、③それらの破綻によってもたらされる疾患の解析を行っ

ています。

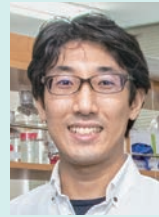
Cardiovascular and respiratory regulations by the central nervous system play crucial roles in human homeostasis. The disorder of these regulatory systems causes severe problems in a living body. Despite this, many unknown mechanisms remain in the cardiovascular and respiratory centers. To investigate these mechanisms, we electrophysiologically approach the mechanisms of cardiovascular and respiratory regulations by the central nervous system using *in vivo* and *in situ* (arterially perfused preparation) preparations of rodents. At present, we are studying I) mechanisms to regulate respiratory movements by the central nervous system, II) mechanisms to regulate blood circulation by the autonomic nervous system, and III) mechanisms of the cardiovascular and respiratory diseases induced by disorders of neural regulation.

RNA 生化学 (七野 悠一)

RNA Biochemistry (SHICHINO Yuichi)

yuichi.shichino@gwe.md.tsukuba.ac.jp

https://www.md.tsukuba.ac.jp/basic-med/rna_biochem/



私達の研究室ではセントラルドグマの中央に位置する分子であるRNAに着目し、様々な遺伝子発現の制御機構の理解を目指しています。例えば、mRNAを元にタンパク質を合成する翻訳反応は、いつ、どこで、どのように行われているのでしょうか?最近の研究から、mRNAは細胞内の様々な場所に輸送され、その行き先で局所的に翻訳されることが判明しています。また、RNAやタンパク質が凝集してできる膜のない構造体も多く発見され、翻訳の関係性も示唆されています。このような細胞の片隅で行われる反応が、様々な生命現象や疾患にもつながっていく様子を、次世代シーケンサーを使ったゲノムワイド解析を駆使して一緒に紐解いてみませんか。

We focus on RNA, the molecule at the center of the central dogma, and aim to elucidate diverse molecular mechanisms of gene expression control. For example, when, where, and how is translation carried out to synthesize proteins from mRNA? Recent studies show that mRNAs travel to various subcellular locations and are locally translated at their destinations. Moreover, numerous membraneless condensates consisting of RNA and proteins have been discovered, suggesting the links between these structures and translation. Using genome-wide approaches, especially next-generation sequencing, we seek to uncover how these biochemical reactions in the cells' corner connect to broader biological processes and diseases. We welcome motivated students who would like to work with us.

分子発生物学 (小林 麻己)

Molecular and Developmental Biology (KOBAYASHI Makoto)

makobayash@md.tsukuba.ac.jp

<https://www.md.tsukuba.ac.jp/MDBiology/mdbiol.index.html>



私たちは、健康増進や疾患の診断・予防・治療に役立つ知見の発見を目指し、モデル動物ゼブラフィッシュを使って生命現象のしくみを研究しています。主なテーマは、1) ストレス応答機構と健康への応用、2) 発生・再生・学習記憶に関わるエピジェネティクス、3) 食品成分によるアンチエイジング効果、4) ヒト疾患研究・創薬に役立つ非哺乳類モデルの開発です。修士課程では、この中から研究テーマを選びます。実験は、遺伝子改変系統の作製・維持、表現型・遺伝子発現解析、薬剤処理、行動解析、イメージングなど、ゼブラフィッシュ分子遺伝学を基本として行います。

We aim to uncover biological mechanisms that contribute to health promotion and the diagnosis, prevention, and treatment of diseases, using the zebrafish as a model organism. Our main research themes include:

1. stress response mechanisms and their applications to health
2. epigenetic regulation in development, regeneration, and learning/memory
3. anti-aging effects of dietary components
4. the development of non-mammalian models for human disease research and drug discovery.

Master's students select their research topic from these areas. Experimental approaches include generating and maintaining gene knockout/knock-in lines, phenotypic and gene expression analyses, drug treatments, behavioral assays, and various imaging techniques, all based on zebrafish molecular genetics.

細胞情報制御学 (大林 典彦)

Cellular and Physiological Biology (OHBAASHI Norihiko)

nohbayashi@md.tsukuba.ac.jp

<https://facultyopinions.com/prime/thefaculty/member/499999771097543679>



細胞内に無数に存在している細胞内小器官(オルガネラ)は、それぞれが独自の機能を持ちます。しかし、個々のオルガネラは決して独立した存在ではなく、膜で包まれた小胞の輸送(小胞輸送)を介して頻りに情報交換を行っています。小胞輸送機構が損なわれるとヒトは様々な病気を発症するため、その分子メカニズムの解明は生物学・医学における重要な研究課題の一つとなっています。私達の研究室では、RabやArfといった小胞輸送の交通整理を担うタンパク質に着目し、可視化が容易なメラニン含有オルガネラ(メラソーム)の発生・輸送研究を中心に小胞輸送機構の解明に取り組んでいます。

Individual intracellular organelles exist by no means independent and frequently exchange information through the transport of membrane-wrapped vesicles, which is called the membrane trafficking system. Since humans develop various diseases when the membrane trafficking system is impaired, its molecular mechanism elucidation is an essential research issue in biology and medical sciences. Our laboratory focuses on proteins such as Rab and Arf small GTPases responsible for the membrane traffic control and is working to elucidate their functions, primarily focusing on the melanosome transport in mammalian melanocytes.

分子ウイルス学 (川口 敦史)

Molecular Virology (KAWAGUCHI Atsushi)

ats-kawaguchi@md.tsukuba.ac.jp

<http://www.md.tsukuba.ac.jp/basic-med/infectionbiology/virology/>



新興感染症は、野生動物や家畜で流行している病原体が、適応変異や環境・社会条件の変化によって、新たにヒトへの感染能を獲得し、公衆衛生上の問題となったものです。我々は、鳥インフルエンザウイルスやSARS-CoV-2などの新興感染症を対象に、病原性や種特異性を決定するウイルス-宿主相互作用の分子メカニズムを解明することをめざしています。また、遺伝子改変マウスを用いた感染動物モデルを開発することにより、ウイルス感染に対する自然免疫応答機構の研究も進めています。

Emerging infectious diseases are caused by pathogens that circulate in wild and domestic animals, becoming newly infectious and problematic to humans due to adaptive mutations or changes in environmental and societal conditions. Our research aims to elucidate the molecular mechanisms of virus-host interactions that determine the pathogenicity and species specificity of emerging infectious diseases, including avian influenza virus and SARS-CoV-2. We are also focusing on the molecular mechanisms of innate immune responses to elucidate the viral pathogenicity by developing the animal models with genetically modified mice.

RNA Modification and Repair (HO Kiong)

kiongho@md.tsukuba.ac.jp

http://www.md.tsukuba.ac.jp/basic-med/kiongho/Ho_Lab/Welcome.html



A primary research interest is to understand the gene expression in protozoan parasites that responsible for major public health concerns, such as Malaria and sleeping sickness disease, with a goal in identifying parasite-specific processes that can be exploited as targets for novel therapeutic interventions. Analysis of mRNA cap formation in these parasite suggest that capping enzyme is an attractive target for anti-protozoan drug development because the mechanism of cap formation is completely different between the parasite and the human host. Second research area aim to understand how damages in the RNAs are recognized and repaired in the cells. One of the few facts that have been established is that RNA

ligase - an enzyme that joins the two ends of RNA together - is a key component of this repair process. Understanding of the function and mechanism behind cellular responses to RNA damage may also provide useful therapeutic targets, as breakage in the RNA accumulate in cancer cells and during stress condition.

分子神経生物学 (榎 正幸)

Molecular Neurobiology (MASU Masayuki)

mmasu@md.tsukuba.ac.jp

<http://www.md.tsukuba.ac.jp/duo/molneurobiol/>



私たちは、神経回路を作り出す分子メカニズムを明らかにする事を目的として研究を行っています。脳機能は、胎児期につくられる神経回路の上に成り立っていますが、どの様にして複雑な神経ネットワークが形成されるかについては未だ良く分かっていません。私たちは、神経細胞の分化、神経軸索のガイダンス、特異的なシナプス形成から神経機能獲得に至るプロセスを制御する分子・遺伝子の機能解析を進めています。主に遺伝子改変マウスを用いて、分子生物学、生化学、神経発生学、神経解剖学、各種イメージング手法を駆使し、神経系の成り立ちと働きを支える分子の機能を明らかにしようとしています。

Our main research focus is to study the molecular mechanisms that regulate the neural circuit formation and higher brain functions. Our brain activities are totally based on the complex neuronal networks that are formed during development, but how they are formed remains unknown. Using the integrative approaches including molecular biology, biochemistry, neuroanatomy, and developmental biology, we have been investigating how the complex brain network is formed in the developing brain and how the mature brain functions are acquired and regulated. We are particularly interested in the molecules that play a role in neural differentiation, cell migration, axon guidance, and synaptogenesis.

微生物学 (森川 一也)

Microbiology (MORIKAWA Kazuya)

morikawa.kazuya.ga@u.tsukuba.ac.jp

<http://www.md.tsukuba.ac.jp/basic-med/infectionbiology/microbiology/>



感染症を成立させたり、宿主との共生を維持したりするために細菌が持っている生存戦略を明らかにするためのテーマに取り組んでいる。例えば我々はマイナーな亜集団に発現する遺伝子群(esp: expression in minor subpopulation)を見出している。一部は遺伝子の水平伝達による抗生物質耐性化を担うことを明らかにしたが、多くのesp遺伝子群の機能は不明である。これらの機能を明らかにすることで集団不均一性に基づく未知の細菌特性を理解しようとしている。その他スクレオイド(核様体)や細胞膜の動態の役割を解明しようとしていたり、抗病原性薬の探索などにも取り組んでいる。

We aim to clarify the bacterial survival strategies in the context of the establishment of infectious diseases or symbiotic status. For example, we have found a group of genes named "esp (expression in minor subpopulation)" that are expressed in a minor subpopulation. We clarified some are responsible for horizontal gene transfer and acquisition of antibiotics resistance genes. However, the function of many esp genes remains unknown. By clarifying these functions, we hope to understand unknown bacterial properties based on population heterogeneity. In addition, we are trying to elucidate role of dynamics of nucleoids and cell membranes, and are also working on the search for anti-virulence drugs.

免疫制御医学 (渋谷 和子)

Immunology (SHIBUYA Kazuko)

kazukos@md.tsukuba.ac.jp

<http://immuno-tsukuba.com/index.html>



高等動物であるヒトは病原微生物に対する生体防御機構としてきわめて精緻に統合された免疫システムを築き上げてきました。しかし、インフルエンザや結核などを例にとるまでもなく、感染症は現代にいたってもなお人類にとっての最大の脅威です。一方で、免疫システムの異常は、自己免疫疾患、アレルギーなどの難治性疾患の本質的病因ともなっています。また癌や移植臓器拒絶なども免疫システムに直接関わっている課題です。これらの病態や疾患の克服をめざした人為的免疫制御法の開発は、免疫システムの基本原理を明らかにしていくことから始まります。本研究室では、アレルギー、自己免疫病、がん、感染症などの難治性疾患の発症メカニズムに関与する新しい免疫受容体分子を世界に先駆けて発見してきました。これらの革新的な知見をもとに、難治性疾患に対する分子標的療法の基盤開発に挑戦します。

The immune system is crucial to human survival. In the absence of a working immune system, even minor infections can take hold and prove fatal. We are under constant threat of infectious diseases that are hard to cure. The immune system is also involved in the pathogenesis of autoimmune diseases, allergy, cancer, and transplantation. It is therefore important to understand and regulate the immune system.

In our laboratory, we identified for the first time over the world several novel immune receptors, which are involved in the development of allergy, cancer, infectious diseases or autoimmune diseases. Our goal is to develop therapies targeting novel molecules that we identified for these intractable diseases.

遺伝医学 (野口 恵美子)

Medical Genetics (NOGUCHI Emiko)

enoguchi@md.tsukuba.ac.jp

<http://tsukuba-medicalgenetics.org>



当研究室ではゲノム解析から得られたデータをもとに疾患に関連する遺伝子を探査し、病態の解明や個別化医療に役立てることを目的に研究をすすめています。疾患ゲノム解析では気管支喘息、アトピー性皮膚炎、花粉症、食物アレルギーを中心としたアレルギー疾患を主な対象としているが、さらにメンデル遺伝病の解析も次世代シーケンサーなどを使用して行っている。ヒトでの解析が中心であり、スタートであるが、疾患の理解や個別化医療の治療法の探索に細胞や動物を用いての研究も実施している。

Our research focus is the identification of novel genomic mutations associated with asthma/atopic dermatitis/allergic rhinitis/food allergy and to find novel disease pathway for the development of the allergic diseases by genome-wide association study, linkage and candidate gene analysis, and expression profiling using both human and animal tissues. We also work on the identification of mutations for rare Mendelian diseases by using next generation sequencers. The goal of our laboratory is to promote personalized medicine based on the individual genomic information.

ゲノム生物学 (村谷 匡史)

Genome Biology (MURATANI Masafumi)

muratani@md.tsukuba.ac.jp



私たちのグループでは、次世代シーケンサーを用いたデータ取得とインフォマティクス解析を、様々な研究分野や社会的ニーズに応用しながら、新たな学問領域のシーズを探査しています。また、このような研究活動を個々のメンバーのキャリアディベロップメントと一体化させることで、ゲノミクスのエキスパート人材の育成と社会実装を推進しています。主なテーマには、ヒト組織バイオバンク検体のゲノム・エピゲノム解析、国際宇宙ステーションでのモデル生物を使用した実験および宇宙飛行士を被験者とした研究、「つくばi-Laboratory」と共同で運営するゲノミクス解析サービス、ラボドroid「まほろ」を用いた実験作業の自動化があります。

We develop genomics technologies for limited sample analysis, and apply these methods for broad range of collaborative projects including mouse and human experiments in International Space Station, genome-epigenome analysis of biobanking clinical samples, and automation of laboratory processes by Labdroid "Mahoro". We also manage genomics analysis platform with Tsukuba i-Laboratory, which mainly provides RNAseq, ChIPseq Exome and gene panel analysis for internal and external users. Students are encouraged to participate in these projects based on their research interests to develop experience and network in research community. Through these activities, we train highly skilled creative scientists who can contribute to science and society.

実験動物学 (水野 聖哉)

Laboratory Animal Science (MIZUNO Seiya)

konezumi@md.tsukuba.ac.jp

<https://www.md.tsukuba.ac.jp/basic-med/lab-animal/>



実験動物はヒト疾患の解明のためのモデルとして、また、遺伝子機能を *in vivo* で評価する目的で、極めて多くの研究で利用されています。私たちは、この実験動物の可能性を更に発展させることを目的に研究を遂行しています。具体的には、①組織特異的な *in vivo* ゲノム編集技術の開発、②点変異やスプライシング異常などのより詳細な変異に起因する心疾患の原因解明、③精子と卵子の維持・成熟メカニズムの解明を行っています。「遺伝子改変動物の作製・解析」や「生殖細胞と受精卵の操作」に挑戦したい学生や生命科学・医学研究を遺伝子改変マウス作製でサポートする「支援」に興味がある学生を募集しています。

Laboratory animals are used in numerous studies as models for the elucidation of human diseases and for *in vivo* evaluation of gene function. Our research aims to further develop the potential of these laboratory animals. Specifically, we are (1) developing tissue-specific *in vivo* genome editing techniques, (2) elucidating the causes of cardiac diseases caused by more detailed mutations such as point mutations and splicing abnormalities, and (3) elucidating the mechanisms of sperm and oocyte maintenance and maturation. We are looking for students who want to challenge "creation and analysis of genetically modified animals" and "manipulation of germ cells and pre-implanted embryos" and students who are interested in "supporting" life science and medical research through the creation of genetically modified mice.

分子遺伝疫学 (川崎 綾)

Molecular and Genetic Epidemiology (KAWASAKI Aya)

a-kawasaki@md.tsukuba.ac.jp

<https://www.md.tsukuba.ac.jp/community-med/publiccmd/GE/>



免疫系には顕著なゲノム多様性が存在し、免疫応答の個人差の背景になっています。当研究室では、ヒトゲノム解析を中心とするアプローチにより、難治性自己免疫疾患である膠原病、特に全身性エリテマトーデス (SLE) と抗好中球細胞質抗体 (ANCA) 関連血管炎を主な対象に、疾患と関連するゲノム多様性の解析を行っています。具体的には、これらの疾患の発症しやすさや、間質性肺疾患などの重症合併症の発症しやすさなどと関連する遺伝子バリエーション (多型の探索と、その分子機構の解析を行っています。また、機能的多様性に富む免疫系多重遺伝子ファミリー (HLA、NK 受容体ファミリーなど) やゲノム暗黒領域をターゲットにした解析も進めています。

Our laboratory is interested in the search of human genome variations associated with susceptibility to systemic autoimmune diseases, or with their major complications such as interstitial lung disease. Major target diseases are systemic lupus erythematosus (SLE) and antineutrophil cytoplasmic antibody (ANCA)-associated vasculitis. Identification of disease-associated genomic variants will provide us with the clues to the pathogenesis of systemic autoimmune diseases, as well as with valuable information for the discovery of molecular targets for drugs and biomarkers. We are also focusing on the analysis of the genomic "dark" regions including HLA and NK receptor family genes to clarify their roles in diseases.

再生幹細胞生物学 (大根田 修)

Regenerative Medicine and Stem Cell Biology (OHNEDA Osamu)

oohneda@md.tsukuba.ac.jp

<http://www.md.tsukuba.ac.jp/stemcell/>



われわれのグループでは、がん・難治性疾患に対する細胞治療の研究開発を大きな研究目標に設定し、以下の研究を行っている。1) 多能性を有する胎生幹細胞を用いた効率の良い分化誘導法の研究開発、2) 様々なヒト組織由来幹細胞から細胞治療に有用な機能性細胞を単離・同定する研究、3) 癌細胞の特性を探るとともに癌に対する幹細胞治療法開発を行う研究、4) 幹細胞の分化・増殖に関連性の深い低酸素ストレス応答の分子機構を解明する研究、の4つに焦点を当て研究を進めている。ヒト幹細胞の性質を分子細胞レベルで解析し、加えて遺伝子改変マウスおよび動物疾患モデルを作製し、*in vivo* での幹細胞機能解析を行っている。

Our research group is focusing on developing useful therapy for cancers and intractable diseases using human stem cells. We isolate human stem cells and study their functional mechanisms *in vitro* and by using animal models of human diseases and gene knockout or knockdown mice. Especially we are studying the following 4 themes: 1) to analyze the differentiation mechanism of human embryonic stem cells, 2) to isolate and study functional human tissue stem cells, 3) to isolate and characterize primary cancer cells to develop useful stem cell therapy, and 4) to study how hypoxic stress affects stem cell proliferation and differentiation.

幹細胞治療 (水谷 英二)

Stem Cell Therapy (MIZUTANI Eiji)

emizutani@md.tsukuba.ac.jp

<https://www.md.tsukuba.ac.jp/basic-med/sct/index.html>



私たちの研究室では、(1) 多能性幹細胞からの臓器作出技術の開発、(2) 染色体工学を用いたヒト疾患モデルマウスの作出と解析、(3) 哺乳類胚発生メカニズムの解明、(4) 新規発生工学技術の開発、などの研究を通して、生殖細胞から個体発生までの生命現象を分子生物学、発生学、発生工学などの様々な分野により理解し、利用することで、医療応用へ向けた技術開発と臓器再生など幹細胞治療システムの基盤構築を目指しています。さらに、国内外の企業、大学との共同研究による共創的な研究開発成果の社会実装も目指して研究を行っています。

We aim to develop technologies for medical applications and constructing a foundation for stem cell therapy systems, such as organ regeneration, by understanding and utilizing biological phenomena from the germ cell to the individual development in the fields of molecular biology, embryology, and developmental engineering through the following researches: (1) Development of technologies for organ generation from pluripotent stem cells, (2) Generation and analysis of mouse models of human diseases using chromosome engineering, (3) Elucidation of mechanisms of mammalian embryonic development, and (4) Development of novel technologies for developmental engineering. In addition, we will conduct joint research with domestic and international companies and universities with the aim of implementing the results of co-creative research and development in society.

再生医学 (藤田 諒)

Regenerative Medicine (FUJITA Ryo)

fujiryo@md.tsukuba.ac.jp
https://tmrc.md.tsukuba.ac.jp/laboratory/regenerative-medicine



私たちの研究グループは、「骨格筋がどのように作られ、成長し、再生するのか」を分子や細胞のしくみから探究しています。特に、筋線維タイプ（速筋・遅筋など）の形成や制御に注目し、その鍵を握る大 Maf 群転写因子の働きを明らかにしようとしています。また、骨格筋幹細胞とその周囲の環境（ニッチ）が筋の再生や加齢、遺伝性筋疾患でどのように変化するかも研究しています。こうした研究を通じて、筋肉の健康維持やサルコペニアの予防、骨格筋再生医療への応用を目指しています。筋肉や運動、幹細胞、再生、老化のキーワードに興味があり、エネルギーに挑戦したい学生さんを歓迎します。

Our group studies how skeletal muscle mass, fiber type, and regenerative capacity are regulated at the molecular and cellular levels. We investigate how muscle stem cells and their niche maintain muscle homeostasis and how these processes change during aging and in muscular dystrophy. We also explore the molecular mechanisms controlling muscle growth and fiber-type specification, focusing on the role of large Maf transcription factors in defining fast-twitch fiber identity and on how genetic variations influence muscle performance and disease susceptibility. Through these studies, we aim to develop new strategies to preserve or restore muscle health, contributing to the prevention and treatment of sarcopenia and muscle disorders.

法医学 (高橋 遼一郎)

Legal Medicine (TAKAHASHI Yoichiro)

ytakahashi@md.tsukuba.ac.jp
https://www.md.tsukuba.ac.jp/community-med/legal-medicine/



医学分野において日々新たに創出される知見やテクノロジーを法医学実務に導入する方法を研究し、法医学実務を主とした業務の改善・改良を続け、犯罪捜査や公衆衛生の向上に貢献することを目的としています。特に、①遺伝子解析技術の法医学実務への応用、②分子生物学的手法を用いた新たな死後診断法の開発に力を入れつつ、③各種毒物に対する検査・検出方法の改善や④医事法学・法医学史の研究を進めています。法医学実務の改善による社会貢献を一つの到達点としつつ、法医学を発信源として医学全体の発展に貢献できるような研究・発見を目指しています。

Our research aims to contribute to the criminal investigation and public health by advancing forensic practice including forensic autopsies. To this end, we develop innovative technologies or tools in conjunction with the latest molecular biological knowledge. In particular, our research focuses on (1) the introduction of genetic and epigenetic analysis into forensic practice and (2) the development of postmortem diagnostic methods based on molecular biological techniques. We also continue our researches on (3) the invention of detection devices for various toxicants and (4) the medical jurisprudence and the history of forensic medicine. While contributing to society by improving the forensic practice, we also strive to contribute to the development of medical science, using forensic medicine as a source of information.

血管マトリクス生物学 (柳沢 裕美)

Vascular Matrix Biology (YANAGISAWA Hiromi)

hkyanagisawa@tara.tsukuba.ac.jp
http://saggymouse.tara.tsukuba.ac.jp



生命現象は細胞と細胞外環境との相互作用によって営まれます。私たちの研究室ではマトリクス生物学を基軸として、細胞外環境を構成する多様な因子（細胞外マトリクス、糖鎖修飾体、機械的応力など）と、細胞との相互作用が組織の恒常性維持にどのように関与しているか、またその破綻がどのように疾患や老化を起こすかを研究しています。扱うモデルはマウスですが、心血管に焦点を当てて、メカノトランスダクションの分子機序や血管壁の幹細胞の同定、細胞外環境との相互作用を研究しています。大動脈瘤や腎臓病などの治療法開発のための基盤研究も行っています。今後は、脳の構築や脳血管の発生に関わる細胞外マトリクスの探索なども行なっていきたいと思います。

Cells constantly receive cues from the extracellular environment. Our lab investigates how the components of extracellular environment, such as extracellular matrix (ECM), glyco-calyx or mechanical force affect cellular behavior and functions. We focus on vascular cells and adult tissue stem cells and study the impact of loss of interactions between these cells and microenvironment on homeostasis, aging and disease development. We also develop disease mouse models such as aortic aneurysms and chronic kidney disease and try to establish a basis for novel therapeutic strategies. Our new projects include identification of ECM involved in brain architecture and the patterning of brain vessels.

発生遺伝学 (丹羽 隆介)

Developmental genetics (NIWA Ryusuke)

ryusuke-niwa.fw@u.tsukuba.ac.jp
https://sites.google.com/site/niwashimadalab/



生命体は、環境の変化に対して、自身の状態を一定に保つ恒常性（ホメオスタシス）のメカニズムと、逆に自身を変えていく変容性（トランススタシス）のメカニズムを有しています。近年の研究の進展によって、ホメオスタシスとトランススタシスの制御に際して、個体を構成する様々な器官の間で神経やホルモンを介した複雑な情報伝達が行われていることが示唆されています。こうしたネットワークのことは「臓器円環」とも呼ばれ、このネットワーク構造の破綻が病気の発症とも密接に関連することが示唆されつつあります。私たちのグループは、器官間の相互作用とその意義の解明を目指し、キョウジョウバエを主材料とした研究を行っています。

Living organisms have two mechanisms: homeostasis, which maintains a constant organismal state, and transistasis, which changes the state of the organism in response to environmental changes. Recent studies suggest that the various organs of the body communicate complex information via neuronal and endocrine systems to control homeostasis and transistasis. The network, so-called "interorgan communication" is also closely associated with the development of disease. Our group is working on the fruit fly *Drosophila melanogaster* and its parasitoid wasp as the main model organisms to elucidate molecular, cellular, and systemic mechanisms of interorgan communication.

健康情報総合学 (大庭 良介)

Integrated Study on Health Information (OHNIWA Ryosuke)

ohniwa@md.tsukuba.ac.jp
https://www.md.tsukuba.ac.jp/basic-med/integrated-study/top_page_en.html



私たちの研究室では、生命科学・医学とその他学術分野との間の分野横断的な課題、特に既存分野からのアプローチでは解決できない課題に対して、専門分野に囚われず、総合的な視点と手法で取り組み、解決策や価値の提示を試みる取り組みをしています。研究テーマは学生からの持ち込みを歓迎しますが、その中でも、①医学研究者コミュニティの活動、知の創出活動を紐解く研究、②医学研究活動と科学技術の社会受容に関する研究、③医学サイエンスコミュニケーションに関する実践研究、④医学研究の方法論に関する哲学・思想・歴史的な研究、に関心のある学生を募集しています。

We address interdisciplinary challenges between medical-life sciences, and other academic fields, particularly issues that cannot be resolved through approaches from existing disciplines. We strive to tackle these challenges without being confined to specific fields, employing comprehensive perspectives and methodologies to attempt to provide solutions and value. While we welcome research themes proposed by students, we are particularly interested in recruiting students who are enthusiastic about the following areas: 1) Research that unravels the knowledge creation activities in the medical-life science research community, 2) Research on the social acceptance of medical-life science research activities and science and technology, 3) Practical research on science communication in medical-life science, and 4) Philosophical, ideological, and historical research on the methodologies of medical-life science research.

血管マトリクス生物学 (木村 健一)

Vascular Matrix Biology (KIMURA Kenichi)

kkimura@tara.tsukuba.ac.jp
https://www.saggymousehkytsukuba.com/



私たちは、組織幹細胞および血管内皮細胞の生体内における性質や微小環境を明らかにし、それらが恒常性の維持や疾患にどのように関与するかについてマウスモデルを用いて研究しています。具体的には、1) 大動脈解離モデルマウスを用いた大動脈解離発症の分子メカニズムの解明、2) 血管病態における血管内皮細胞の役割の解明、3) CD73 発現細胞による骨髄微小環境の解明を目指しています。これにより、生体内における細胞ダイナミクスを理解し、心血管疾患や骨疾患治療に対する治療法の基盤の創出につなげていきたいと考えています。

Our group investigate tissue stem cells and vascular endothelial cells to elucidate their properties and microenvironment in vivo. We develop several mouse models to study how the cells are involved in homeostasis and disease development. We focus on the following 3 themes; 1) elucidation of molecular mechanisms underlying aortic dissection, 2) elucidation of a role of vascular endothelial cells in vascular pathology, and 3) elucidation of the bone marrow microenvironment based on CD73 expression. We would like to understand cellular dynamics in vivo and establish the basis for therapeutic strategies for the treatment of cardiovascular and bone diseases.

国際統合睡眠医科学研究機構 (WPI-IIIS)
ラザルス/大石研究室 (ミハエル ラザルス)
International Institute for Integrative Sleep Medicine (WPI-IIIS)
Lazarus/Oishi Laboratory (Michael Lazarus)
lazarus.michael.ka@u.tsukuba.ac.jp
https://iiis-lazarus-oishi-lab.org/



当研究室では、脳が睡眠や覚醒意識を調節するための細胞・神経基盤の理解に取り組んでいます。動物の行動や脳波における特定の神経集団の機能を調べるため、神経活動操作（光遺伝学・化学遺伝学・光薬理学）や in vivo イメージング（ファイバーフォトメトリー）などを活用しています。また、一細胞遺伝子解析もしくは空間的遺伝子解析により細胞・分子レベルでの睡眠と免疫系のクロストークの理解を試みています。現在までに、なぜコーヒーで目が覚めるのか、なぜ退屈な時に眠くなるのか、どのようにレム睡眠不足がジャンクフードへの欲求を増加させるかなどについて、成果を出してきました。

The investigative focus of our laboratory is the cellular and synaptic basis by which the brain regulates sleep and wakeful consciousness. Our experiments seek to link the activity of defined sets of neurons with neurobehavioral and electroencephalographic outcomes in behaving animals by using innovative genetically or chemically engineered systems (optogenetics, chemogenetics or optopharmacology) in conjunction with in-vivo imaging (e.g. fiber photometry). We also employ single-cell or spatial gene expression profiling to understand how the sleep/immune system crosstalk is regulated at cellular and molecular levels. We made key contributions to our understanding of sleep/wake behaviors, for example, why coffee wakes us up, why we fall asleep when bored, or how REM sleep loss increases the desire for junk food.

国際統合睡眠医科学研究機構 (WPI-IIIS)
柳沢/船戸研究室 (柳沢 正史)
International Institute for Integrative Sleep Medicine (WPI-IIIS)
Yanagisawa/Funato Laboratory (YANAGISAWA Masashi)
yanagisawa.masa.fu@u.tsukuba.ac.jp
http://wpi-iiis.tsukuba.ac.jp/japanese/



私たちは人生のおおよそ三分の一を眠って過ごします。この“眠る”という現象は未だにきちんとメカニズムや役割を説明できない現象です。また、様々な原因でこの睡眠が乱される＝睡眠障害が起こることも現代社会で大きな問題になっています。覚醒制御を担う生理活性ペプチド“オレキシン”の発見を契機に睡眠研究は飛躍的に理解が進みましたが、なぜ睡眠が必要なのか、近過去の睡眠履歴を参照するホメオスタシス制御のメカニズムなど、睡眠に関する謎はまだ多く残っています。我々は睡眠の本質を探っていくため、表現型から遺伝子同定を目指すフォワードジェネティクスや in vivo imaging など、最新鋭の機器・手法を取り入れた生化学・生理学的アプローチによる研究を展開しています。

We spend nearly one-third of our lives asleep. The mechanism and function of sleep, however, remains unclear. Many factors such as mental illnesses, food, drugs, and emotions, can affect sleep/wake regulation. Disorder of sleep is not only by itself a major problem in modern society, but also an established risk factor for metabolic syndrome and other lifestyle diseases.

We discovered the neuropeptide “orexin” that regulates sleep. Over 10 years of orexin research have convinced us that we have to take boldly new approaches to gain fundamental insights on the mechanism of sleep/wake regulation. Our approaches include real-time visualization and manipulation of the activity of multiple neurons within the sleep/wake regulatory circuits in freely behaving mice. We also carry out a large-scale forward genetic screen in mice, looking for new genes directly responsible for sleep/wake regulation.

国際統合睡眠医科学研究機構 (WPI-IIIS)
史研究室 (史 蕭逸)
International Institute for Integrative Sleep Medicine (WPI-IIIS)
Shi Laboratory (Shoi Shi)
shi.shoi.gf@u.tsukuba.ac.jp
https://evoevokulala.jp/free/en



睡眠は生物に広く保存された生理現象です。このような遺伝的に保存された現象の機構・機能を理解し、その進化的な意義を問うためには、生物種間で比較することが必要不可欠です。特に、生物の進化を鑑みると、ある種の神経構造はその種固有の性質による制約を受けることは否定できません。つまり、ある現象に関して定量的に複数の生物種を比較することで、種固有の性質と生物に共通する性質を大別し、生物の共通性における構造的・機能的な最小単位を抽出することが可能になります。そこで私たちの研究室では、脊椎動物としてマウス、節足動物として社会性生物であるアリを対象とし、更に他の非モデル動物研究者との共同研究を通じて、睡眠に共通する分子的、神経科学的な最小単位を抽出することを目指しています。

Sleep is a physiological phenomenon that is widely conserved in organisms. To understand the mechanisms and functions of this genetically conserved phenomenon and to question its evolutionary significance, it is essential to make comparisons among species. In particular, from the perspective of the evolution of organisms, it is undeniable that the neural structures of a species are constrained by its unique properties. In other words, by quantitatively comparing multiple species, it is possible to broadly distinguish between species-specific properties and properties common to all organisms, and to extract the smallest structural and functional unit of commonality among organisms. Our laboratory aims to extract the molecular and neuroscientific minimum units common to sleep-wake cycles by using mice, ants, and other species with in collaboration with other non-model animal researchers.

国際統合睡眠医科学研究機構 (WPI-IIIS)
ラザルス/大石研究室 (大石 陽)
International Institute for Integrative Sleep Medicine (WPI-IIIS)
Lazarus/Oishi Laboratory (OISHI Yo)
oishi.yo.fu@u.tsukuba.ac.jp
https://iiis-lazarus-oishi-lab.org/



当グループでは、睡眠覚醒制御メカニズムの神経回路レベルの理解を目指しています。特に、最近見出した睡眠量が極端に少ないマウス（ショートスリーパーマウス）や、ウイルスベクターを用いた化学遺伝学等の神経活動操作技術を利用して、ショートスリープが作られる仕組みを研究しています。一方で、ショートスリープが脳や生体の機能に与える影響を明らかにし、睡眠や覚醒の役割の理解を目指します。また、別の研究では、抗アレルギー薬の副作用が眠気であることに着目し、眠気を生み出す神経メカニズムを調べています。研究内容に興味のある学生の参加を歓迎します。

Our group aims to understand the mechanisms of sleep-wake control at the neural circuit level. In particular, we study the mechanism of short-sleep production using recently discovered mice with extremely low sleep amount (short-sleeper mice) and recent techniques such as chemogenetics using viral vectors. On the other hand, we aim to understand the role of sleep and wakefulness by clarifying the effects of short-sleep on brain and biological functions. In another study, we investigate the neural mechanisms that produce sleepiness, focusing on the fact that sleepiness is a side effect of antiallergic drugs. We welcome students who are interested in our research.

国際統合睡眠医科学研究機構 (WPI-IIIS)
櫻井(武)/平野研究室 (平野 有沙)
International Institute for Integrative Sleep Medicine (WPI-IIIS)
T Sakurai/Hirano Laboratory (HIRANO Arisa)
hirano.arisa.gt@u.tsukuba.ac.jp
https://wpi-iiis.tsukuba.ac.jp/japanese/research/member/detail/平野-有沙/



生物は地球の自転周期にあわせて生活しており、概日時計と呼ばれる体内時計が24時間周期の生理リズム(概日リズム)を制御しています。体内時計の乱れが引き起こす概日リズム障害は睡眠障害をはじめメタボリックシンドロームや気分障害などの大きなリスクファクターとなります。私たちは、時計遺伝子の発現や時計細胞の活動をモニターしたり、特定の回路を操作することで時計中枢(視交叉上核)から生理リズムを生み出すメカニズム(出力系)の解明に取り組んでいます。さらに、時を刻むメカニズム(発振系)、外界環境に同調して時刻合わせをするメカニズム(入力系)の研究も進めています。出力系とあわせて概日時計の3要素を統合的に理解し、生理リズムを生み出す制御メカニズムの全貌に迫ります。

In almost organisms living on the earth, many biological processes exhibit the circadian rhythms with a period of ~24 hours. Well-coordinated rhythms by internal time-keeping system, circadian clock, is essential for physical and mental health. To understand the neural network controlling the circadian physiological rhythms, we utilize gene-modified animals, opto/chemo-genetics techniques and in vivo recording/imaging techniques. In addition to the output pathway from the clock, we are also interested in oscillatory mechanism of the clock within the SCN clock neurons (intracellular oscillator) and mechanism of entrainment of the clock to environmental cycle such as light-dark cycle (input pathway), which are considered as three main factors of the circadian clock. Our goal is to understanding of the whole picture of the circadian clock system.

国際統合睡眠医科学研究機構 (WPI-IIIS)
畚村/斎藤研究室 (畚村 憲樹)
International Institute for Integrative Sleep Medicine (WPI-IIIS)
Kutsumura/Saito Laboratory (KUTSUMURA Noriki)
kutsumura.noriki.gn@u.tsukuba.ac.jp
http://nagase.wpi-iiis.tsukuba.ac.jp



睡眠/覚醒に関与するタンパク質リジン酸化酵素に作用する生物活性分子の設計・合成・生理活性を有する含窒素複素環化合物の合成・創薬に有用な化学選択的反応に関する研究等が研究テーマです。有機合成化学を基盤とした創薬研究を行いたい方は是非見学に来てください。

Our research topics include design and synthesis of bioactive molecules acting on protein phosphatases involved in sleep/wake, synthesis of biologically active nitrogen-containing heterocyclic compounds, and research on chemoselective reactions useful for drug discovery. If you are interested in conducting drug discovery research based on synthetic organic chemistry, please come visit our laboratory.

国際統合睡眠医科学研究機構 (WPI-IIIS)
杵村/斉藤研究室 (斉藤 毅)
International Institute for Integrative Sleep Medicine (WPI-IIIS)
Kutumura/Saito Laboratory (SAITOH Tsuyoshi)

saito.tsuyoshi.gf@u.tsukuba.ac.jp
<https://wpi-iiis.tsukuba.ac.jp/japanese/research/member/detail/tsuyoshisaitoh/>



斉藤グループでは、睡眠覚醒や痛み、情動に関わる疾患を標的とした創薬研究を行っています。Gタンパク質共役型受容体 (GPCR) は、市販の医薬品の約30%が標的にしている医薬品開発の中心的存在です。私たちは、その中でもオレキシン受容体や痛みやオピオイド受容体を標的にして、ナルコレプシーや疼痛症の治療薬の開発を行っています。また、これまで開発されてきた医薬品が示す有害な副作用のメカニズム解明を通して、副作用のない医薬品の開発にも挑戦しています。創薬研究は、in silicoを活用した薬物設計、有機合成、細胞・動物での薬理評価、メカニズム解明を通じて行っており、化学、生物学、情報学など多様な背景を有する学生を歓迎します。

We are at the forefront of pioneering drug research targeting diseases related to sleep-wake cycles, pain, and emotions. G protein-coupled receptors (GPCRs) are pivotal in pharmaceutical development, with approximately 30% of marketed drugs targeting them. Our focus lies in targeting the orexin receptors and opioid receptors driving the development of treatments for narcolepsy and pain syndromes. By deciphering the mechanisms behind the adverse side effects presented by existing drugs, we are also ambitiously striving to create medications devoid of harmful side effects. Our drug discovery process integrates computer-assisted drug design, organic synthesis, pharmacological evaluation in cells and animals, and mechanism elucidation. We warmly welcome students from diverse backgrounds, including chemistry, biology, and informatics, to join our mission.

国際統合睡眠医科学研究機構 (WPI-IIIS)
戸田研究室 (戸田 浩史)
International Institute for Integrative Sleep Medicine (WPI-IIIS)
Honjoh Laboratory (TODA Hirofumi)

toda.hirofumi.gu@u.tsukuba.ac.jp
<https://wpi-iiis.tsukuba.ac.jp/japanese/research/member/detail/hirofumitoda/>



あらゆる動物が睡眠をとることが知られています。昆虫でも同様で、キイロショウジョウバエでも約20年前に睡眠様の行動が発見されて以来、キイロショウジョウバエが有する様々な分子遺伝学的なツールを駆使することで、睡眠に重要な遺伝子の同定が進んできました。我々のグループでも、このキイロショウジョウバエを用い、分子遺伝学・生化学・細胞学・神経科学などの分野横断的なアプローチを駆使して、睡眠の分子メカニズムを解き明かす活動をおこなっています。特に、昨今、私たちが発見した新規の睡眠誘引因子の解析を中心に、睡眠制御の分子メカニズムに迫る試みを日々進めています。

All animals do sleep. This is true for insects. Ever since sleep-like behavior was discovered in *Drosophila melanogaster* around 20 years ago, a battery of new genes important for sleep regulations have been identified by non-biased behavioral screen using *Drosophila*, which has full range of genetic tools. Our group uses *Drosophila melanogaster* as a valuable genetic model to study the molecular mechanisms of sleep via cross-disciplinary approaches such as molecular genetics, biochemistry, cell biology, and neuroscience. In particular, we are making efforts to explore the molecular mechanisms of sleep control, focusing on the analysis of new sleep-inducing factors that we have recently discovered.

国際統合睡眠医科学研究機構 (WPI-IIIS)
阿部研究室 (阿部 高志)
International Institute for Integrative Sleep Medicine (WPI-IIIS)
Abe Laboratory (Takashi Abe)

abe.takashi.gp@u.tsukuba.ac.jp
<https://www.u.tsukuba.ac.jp/~abe.takashi.gp/>



私たちの研究室では、ヒトの睡眠の機能を促進するための非侵襲的・非薬理学的手法の開発を目指しています。具体的には、聴覚刺激、嗅覚刺激、前庭刺激などの非侵襲的な刺激法によって、ヒトの睡眠中の特定のプロセスを効果的に促進する方法を研究しています。また、これらの刺激が翌日の人間の心や行動に与える影響を調べ、ヒト睡眠の機能の理解と操作に貢献したいと考えています。また、当研究室では、家庭でも使える睡眠モニタリング機器の開発も行っています。このようなデバイスと非侵襲的な手法とを組み合わせることで、睡眠の機能を、家庭でも促進し、生活の質を向上させることに貢献したいと考えています。

Our laboratory aims to develop non-invasive and non-pharmacological methods for promoting the functions of human sleep. We are investigating methods to effectively facilitate specific processes of human sleep by non-invasive stimulations using such as auditory stimulation, odor stimulation or vestibular stimulation. Then, we are also investigating the effects of these stimulations on the human mind and behavior on the next day, which can contribute to understanding and manipulating the roles of human sleep. Our laboratory has also been developing in-home sleep monitoring devices. By combining such devices with these non-invasive methods, our research will contribute to developing non-invasive sleep interventions in an in-home setting to facilitate sleep function, which improves the quality of life.

国際統合睡眠医科学研究機構 (WPI-IIIS)
本城研究室 (本城 咲季子)
International Institute for Integrative Sleep Medicine (WPI-IIIS)
Honjoh Laboratory (HONJOH Sakiko)

honjoh.sakiko.gf@u.tsukuba.ac.jp
<http://www.u.tsukuba.ac.jp/~honjoh.sakiko.gf/index.html>



我々は日々、睡眠と覚醒を繰り返します。覚醒時に我々は外界を認識し、内的な記憶や思考と外界からの情報を統合し、自らの思考をアップデートして行動を起こします。一方、睡眠時に私達の意識レベルは大きく低下し、外界を認識せず、意図的な動作を起こしません。このようなダイナミックな変化は脳で生み出されると考えられますが、我々の脳がなぜ眠る必要があるのか、未だ明らかではありません。我々は1) 睡眠の機能を分子・細胞レベルで理解する事、2) 長時間の覚醒により私達の認知機能が低下するメカニズムの解明を目指します。そのために、自由行動下の動物の神経活動の計測や、神経の性質の基盤となる遺伝子発現解析を行っています。

We repeat the wake-sleep cycle daily. During wake, we recognize the external environment, keep integrating internal thoughts, memories, and external sensory inputs, then act based on our updated minds. However, during deep sleep, we become unconscious and do not recognize the external environment. It is generally believed that such dynamic changes in our cognition and locomotion derive from the brain, however, the underlying neural mechanisms remain largely elusive. We aim to elucidate 1) the function of sleep 2) the mechanism underlying at molecular and cellular levels. To realize dynamics of neural activity during the wake-sleep cycle, we employ in vivo electrophysiology, opto/chemogenetics, and gene expression analyses.

国際統合睡眠医科学研究機構 (WPI-IIIS)
グリーン/フォクト研究室 (カスパー・フォクト)
International Institute for Integrative Sleep Medicine (WPI-IIIS)
Greene/Vogt Laboratory (Kaspar Vogt)

vogt.kaspar.fu@u.tsukuba.ac.jp
<https://wpi-iiis.tsukuba.ac.jp/japanese/research/member/detail/kaspervogt/>



脳の機能を回復させるためには、睡眠ステージの中でも特に深いとされる徐波睡眠が重要であると考えられています。徐波睡眠中には、皮質にある神経細胞群のオン (活動)・オフ (静止) が強く同調し、脳波 (EEG) に特徴的なパターンが現れます。このオンの状態における神経活動のパターンは覚醒時とよく似ていますが、実は重要な違いがあることが、最近の我々の研究からわかってきています。私たちのグループでは、徐波睡眠中の皮質神経細胞およびそれらが構成するネットワークを詳しく調べることで、特徴的な神経活動パターンにどのような機能がおり、どう制御されているのかを突き止めるようとしています。

Missing sleep for even a few hours is unpleasant and normal mental tasks, such as driving, become more and more difficult. Luckily, sleep, especially deep, slow wave sleep will restore the brain's ability to function. During slow wave sleep neurons in the cortex alternate between silent OFF states and active ON states in a highly synchronous manner - giving rise to characteristic waves in the electro-encephalogram (EEG). The activity during the ON states resembles waking, but we are now finding important differences between wake activity and the activity patterns observed in sleep. We want to characterize the activity of neurons and of neural networks during slow wave sleep to understand the function of this specific activity pattern and its regulation.

国際統合睡眠医科学研究機構 (WPI-IIIS)
櫻井 (勝) 研究室 (櫻井 勝康)
International Institute for Integrative Sleep Medicine (WPI-IIIS)
K Sakurai Laboratory (SAKURAI Katsuyasu)

sakurai.katsuyasu.gm@u.tsukuba.ac.jp
<https://wpi-iiis.tsukuba.ac.jp/japanese/research/member/detail/katsuyasusakurai/>



脳内における心身の内部状態と外部状況 (環境や刺激) との相互情報処理

我々ヒトを含めた生物は、刻々と変化する内的状態 (身体、生理、精神状況など) および外的状況 (環境) や刺激に対して、意識的、もしくは無意識的に適応することによって生存しています。例えば、満腹状態では意識されなかった食物に対して、空腹状態では注意、欲求が増します。私達の研究室では、脳内で相互に作用するであろう内的状態と外的状況・刺激に関わる情報が脳内でどのように処理されているのか、そのメカニズムに迫りたいと考えています。現在は、味 (味覚) や痛みの情報が脳内でどのように処理されるのかを多階層的 (遺伝子、細胞、神経回路、行動) に理解するような研究を立ち上げようとしています。

Mutual neural communication between internal state and external world/stimuli
For survival, all organisms, including humans, adjust their internal state, such as physiological and psychological, to adapt to the external world. The adaptation requires mutual communication between the internal state and the outer world. In our laboratory, we will understand how the internal state and external world information is processed, integrated for executing appropriate action, such as behavior and emotion in the brain. Currently, we are trying to understand the underlying neural mechanisms for taste or pain perception at the multi-levels (Gene, Cell, Circuit, and Behavior).

消化器内科学 (土屋 輝一郎)

Gastroenterology (TSUCHIYA Kiichiro)

kii.gast@md.tsukuba.ac.jp

https://tsukuba-igaku-gastro.com/



消化器内科では炎症性腸疾患 (IBD) と悪性腫瘍に関する病態解明及び新規治療薬の開発を行っています。IBD では炎症環境における腸管上皮幹細胞の形質転換機構を解析し、新規治療薬の標的因子を探索しています。悪性腫瘍に関しては、IBD に付随する大腸癌や膵臓癌の悪性形質獲得機構を解析しており、腸上皮化生と悪性度との関連を明らかとすることにより、新規悪性腫瘍治療薬の標的を探索しています。また、IBD や悪性腫瘍に対する臨床研究も展開しており、治療抵抗性のリスク因子や患者背景を明らかとすることにより難治性疾患医療の発展を目指しています。

In the Department of Gastroenterology, we are investigating the pathogenesis of inflammatory bowel disease (IBD) and malignant tumors and developing novel therapeutic agents. In IBD, we are analyzing the transformation mechanism of intestinal epithelial stem cells in inflammatory environments and searching factors targeting for novel therapeutic agents. For malignant tumors, we are analyzing the mechanism of malignant transformation of IBD-associated colorectal cancer and pancreatic cancers to clarify the relationship between intestinal metaplasia and malignant potential, and are searching for novel targets for malignant tumor therapeutics. We are also conducting clinical research on IBD and malignant tumors to elucidate the risk factors and background of patients of resistance to treatment in order to develop medical treatment for intractable diseases.

検査血液学 (小原 直)

Laboratory-Hematology (OBARA Naoshi)

n-obara@md.tsukuba.ac.jp

http://www.ketsunai.com/



造血不全疾患は難治性かつ稀少疾患が多く、病態の解明があまり進んでいません。若年者に発症することも多く、かつ治療が長期に必要なことから社会的な問題が大きく、病態の解明が望まれています。私たちは造血不全の中でも再生不良性貧血・発作性夜間ヘモグロビン尿症 (PNH) に注目して研究を行っています。

- ① PNHにおけるクローン性造血の拡大機構の解明
- ② PNHにおける補体制御機構の解明
- ③ 造血不全の病態解明
- ④ 造血器疾患の検査診断学に関する研究

Bone marrow failure diseases are often intractable and rare, which has delayed the elucidation of their pathogenesis. Since these diseases often occur in young people and require long-term treatment, there is a need to elucidate their pathophysiology. We focus on bone marrow failure diseases, especially aplastic anemia and paroxysmal nocturnal hematuria (PNH). The current main research themes are follows.

- (1) Elucidation of expansion mechanism of clonal hematopoiesis in PNH
- (2) Elucidation of regulatory mechanism of complement activation in PNH
- (3) Mechanism of bone marrow failure
- (4) Laboratory hematology for hematopoietic disorders

膠原病リウマチアレルギー内科学 (松本 功)

Department of Rheumatology (MASTUMOTO Isao)

ismatsu@md.tsukuba.ac.jp

https://tsukuba-rheumatology.jp



膠原病や関節リウマチ、アレルギーなどの自己免疫疾患の診断・治療は劇的な変化を遂げていますが、根本的な病因論が未だ十分でなく、病態に対しての根治的治療はありません。本研究室では、それらの疾患に対して、我々独自の疾患動物モデル、及び多様な各自己免疫疾患のヒト検体を統合的に検証することで、細胞・蛋白レベルの病態論から免疫システム自体を見直す研究を進め、病態本体制御へのアプローチを行っています。将来の自己免疫疾患の病態制御及び治療を可能にする、夢を持った研究者を歓迎いたします。

The diagnosis and treatment of autoimmune diseases are undergoing dramatic changes. However, the fundamental etiology is still inadequate, and there is no radical treatment for the pathology. In our laboratory, we are proceeding with research to review the immune system itself by comprehensively verifying our own animal models and heterogenous human specimens with autoimmunity, and develop the new approach for controlling disease itself. We welcome researchers who have strong motivation to control and cure autoimmune diseases in the future.

神経内科学 (齊木 臣二)

Neurology (SAIKI Shinji)

ssaiki@md.tsukuba.ac.jp

https://neurology.md.tsukuba.ac.jp/research/



我々は加齢が最大のリスクとされる神経変性疾患 (特にパーキンソン病、筋萎縮性側索硬化症) の①診断・治療に直結するバイオマーカーの開発研究、②オートファジーに着目した創薬研究の2つを柱としています。①の研究推進のため、各種神経変性疾患の生体サンプルのバンク化を進めると同時に、これまでの網羅的解析で絞り込んだ分子について、臨床応用を視野に入れた取り組みを進めています。また②については培養細胞を駆使したデータを、臨床サンプルで検証するスタイルで成果を挙げています。また神経免疫疾患・レム睡眠行動障害を対象にした介入型臨床研究にも取り組み始めており、数年後には臨床研究による学位取得も実現したいと考えています。

We have two main pillars of research: 1) the development of biomarkers related to the diagnosis and treatment of neurodegenerative diseases, especially Parkinson's disease and amyotrophic lateral sclerosis, which are considered to be the greatest risks associated with aging, and 2) drug discovery research focusing on autophagy. To advance the first research pillar, we are working on the establishment of a biological-sample bank from neurodegenerative diseases while also conducting studies aimed at clinical applications based on comprehensive molecular analyses. Regarding the second pillar, we have achieved results by validating data using cultured cells and clinical samples. Additionally, we have started intervention-based clinical research targeting neuroimmunological diseases and REM sleep behavior disorder, and we hope to set up research resources to obtain degrees through clinical research in the next few years.

先端血液腫瘍学 (坂田 麻実子)

Division of Advanced Hemato-Oncology (SAKATA-YANAGIMOTO Mamiko)

sakatama@md.tsukuba.ac.jp

http://www.ketsunai.com/student/



血液がんをテーマに、自由にサイエンスの絵を描くことを目指します。シングルセル解析やゲノムデータ解析といった「データサイエンス」を得意とし、臨床医学とのパートナーシップを武器に、「ヒトのがん (特に血液がん)」がどのようにして発症するのか、「ヒトの血液細胞」がどのように発生するのか、という本質的な課題に迫ります。「ヒトのがん」を対象とするデータサイエンス研究で発見した生物学的事象について、マウスモデル作製に取り組み、分子病態を本質的に検証します。将来的には基礎研究の成果を臨床に還元する「Bench to Bed」研究を目指します。

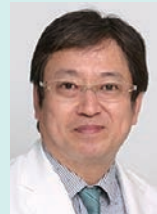
We investigate mechanisms of blood cancers by integrating both "data science" and "disease mouse models". The data science aspect of our approach uses access to some of the worlds most powerful Super Computing resources to analyze big data from clinical samples, across both single-cell and genomic data sets. This is done via our direct association with the clinical departments treating blood cancers. As biological events are discovered from within the data science research targeting human cancers, we strive to prove principles via disease mouse models. Through the continued and dedicated progress verifying the molecular pathology, our ultimate aim is to return meaningful and useable results from analysis in basic research, back to clinical practice and bedside treatment: "Bench to Bedside".

脳神経外科学 (石川 栄一)

Neurosurgery (ISHIKAWA Eiichi)

e-ishikawa@md.tsukuba.ac.jp

https://neurosurgery-tsukuba.com/



脳神経外科学には神経再生、脳腫瘍、血管障害、てんかんなど、魅力に富む様々な研究分野があります。本研究室では主に以下の研究領域の課題について研究しています。1) 歯髄幹細胞やiPS細胞から誘導した神経系細胞を用いた様々な再生医療の研究。2) 脳腫瘍に関連した免疫療法やDDS、光線力学的治療に関する研究。3) ロボットスーツHALに関する研究。4) 血管内脳波やてんかん外科に関連した研究。その他、脳卒中に関連した臨床研究や悪性脳腫瘍に対する中性子捕捉療法、脳イメージング (機能的画像解析など) に関する研究なども行っております。

Neurosurgery researchers cover a variety of fascinating research areas. We are mainly studying issues in the following research areas: 1) research on various regenerative medicine using nervous system cells derived from dental pulp stem cells and iPS cells; 2) research on immunotherapy, DDS, and photodynamic therapy related to brain tumors; 3) research on the robotic suit HAL; 4) research on intravascular EEG and epilepsy surgery; Other clinical research related to stroke and neutron capture therapy for malignant brain tumors. We also conduct research on brain imaging including functional MR imaging.

小児科学 (高田 英俊)

Pediatrics (TAKADA Hidetoshi)

TakadaH@md.tsukuba.ac.jp

<http://www.md.tsukuba.ac.jp/clinical-med/pediatrics/>



小児科では、小児がん、小児血液・免疫疾患、原発性免疫不全症、新生児・低出生体重児疾患、小児心疾患、小児消化器疾患、小児神経疾患、小児内分泌疾患など様々な疾患に対して研究を行っています。小児科疾患では遺伝性疾患の割合が高く、分子遺伝学的研究を推進しており、その治療を目指した遺伝子治療が重要なテーマです。最新の遺伝子治療ベクターを用いた研究を推進しています。また、iPS細胞を用いた再生医療研究だけでなく、iPS細胞を用いた病態研究を行っています。感染症に対しては、病原体の研究だけではなく、宿主側の要因を解析し、さらに予防接種の有効性に関する宿主側の要因についても研究を行っています。

Our research subjects include a variety of pediatric disorders such as cancer, hematologic and immunological disorders, primary immunodeficiency, disorders of neonates and low-birth weight infants, cardiac, gastrointestinal, neurological, and endocrine disorders. The causes of many pediatric disorders contain genetic factors. One of our major fields of study is the elucidation of the pathophysiology of pediatric diseases in terms of genetic and molecular science. We are also focusing on gene therapy by using state-of-the-art vectors. In addition, our study on regenerative medicine by using iPS cells has been playing a significant role to clarify the pathophysiology of human genetic disorders. In the field of infectious disorders, we are analyzing not only the nature of pathogens, but also the involvement of host defense system.

感染症内科学 (鈴木 広道)

Infectious Diseases (SUZUKI Hiromichi)

hsuzuki@md.tsukuba.ac.jp

<https://id-tsukuba.com/>



侵襲性感染症、薬剤耐性菌感染症および施設内感染症に関する疫学調査を行い、病原因子、予防策、治療・対処法を調べる。感染症疾患の臨床研究を行う。

- (1) Epidemiological investigation of serious infectious diseases and HIV infection.
- (2) Molecular investigation of pathogenic and drug-resistant factors of microorganisms.
- (3) Evaluation of precautions against transmissible infections diseases.
- (4) Clinical studies among patients with infectious diseases

心臓血管外科学 (平松 祐司)

General Thoracic Surgery (HIRAMATSU Yuji)

yuji3@md.tsukuba.ac.jp

<http://tsukuba-heart.com/>



生命に直結する循環機能の再建を旨とする本研究グループは、安全性・QOLの向上や低侵襲化に向かって、多くのアクティブな研究テーマを有しています。新生児の複雑心奇形から高齢者の大動脈疾患に至るまで、幅広い患者層・疾患群を研究フィールドとし、国内外の先端研究施設や関連産業と連携して、技術開発や疾患メカニズムの解明に取り組んでいます。臨床研究：弁機能再建手術シミュレーション技術の開発/肺動脈温存右室流出路再建法の追突/人工心臓中の凝固線溶異常メカニズムの解明/静脈還流障害と循環予後に関するリハビリテーション医学的研究 基礎研究：人工心臓におけるマイクロバブル発生機序と抑制法の探究/ノックアウトマウスを用いた梗塞心筋リモデリング制御法の探究/ビタミンK 低減化機能性食品の開発/脂肪組織由来幹細胞を用いた再生医学/放射光微小血管造影技術の開発/大動脈瘤形成に関与するシグナル伝達経路の解明/心臓疾患 3D シミュレーションモデルの開発

In surgical reconstruction of hemodynamic function, our group has many active research topics in improving safety, QOL and less invasiveness. Exploring a broad range of patients' age and pathologies, we collaborate with many research facilities and industries aiming development of novel technologies. Clinical research; Development of valve simulation technology/ Exploration of valve-sparing right ventricular outflow reconstruction/ Elucidation of hematological deterioration during cardiopulmonary bypass/ Study in rehabilitation medicine in reduced venous return. Basic research; Regulation of gaseous microemboli in cardiopulmonary bypass/ Study of ischemic myocardial remodeling using knockout mice/ Development of vitamin K-reduced functional food/ Regenerative medicine using stem cells/ Development of novel microangiography system using synchrotron radiation/ Elucidation of signal transduction in aneurysmal formation/ Production of 3D heart replicas.

精神医学 (新井 哲明)

Psychiatry (ARAI Tetsuaki)

4632tetsu@md.tsukuba.ac.jp

<http://www.tsukuba-psychiatry.com/>



精神医学の領域は広く、魅力に富む様々な研究分野がある。当グループでは、認知症を主とする老年精神医学、発達障害や摂食障害などの児童思春期精神医学、うつ病および統合失調症の生物学的精神医学、周産期メンタルヘルス、大学生のメンタルヘルス、自殺予防、災害精神支援等に関する研究活動を行っている。認知症では、若年性認知症の実態調査、血液・嗅覚・行動特徴等に解析によるバイオマーカーの開発、画像・病理解析によるBPSDの病態解明等の研究を行っている。児童思春期精神医学については筑波大学内の心理部門と小児科、また大学生のメンタルヘルスについてはウェルネス促進という目標を掲げて全学あげての取り組みを中心となって推進している。

The specialties of our group are: geriatric psychiatry including dementia and depression; child and adolescent psychiatry such as pervasive development disorder and eating disorders, disaster psychiatry, and mental health of perinatal psychiatric disorders and the university students. As to research of dementia, we investigated the field survey of presenile dementia, development of biomarkers to identify early dementia using analyses of the blood, olfaction, gait, voice, and clarifying of pathophysiology of behavioral and biological symptoms of dementia using brain imaging and pathological examination. Furthermore, we have conducted a series of studies regarding child psychiatry in cooperation with faculty of psychology and department of pediatrics. Finally we recently started a large study for the promotion of mental health of the university students.

呼吸器外科学 (佐藤 幸夫)

General Thoracic Surgery (SATO Yukio)

ysato@md.tsukuba.ac.jp

<http://www.md.tsukuba.ac.jp/clinical-med/respiratory/index.html>



肺癌の治療の主役は手術であり、最近では胸腔鏡を用いた低侵襲治療が主流となってきています。また新規抗がん剤・遺伝子治療も開発されてきており、今後予後・QOLの改善が期待されます。当科では日進月歩の肺がん診療に積極的に取り組み、開胸手術を凌駕するレベルの胸腔鏡手術を行い更にその精度を高めるべく改善を重ねています。また進行例には集学的治療および拡大手術も積極的に行っています。研修医の先生には、手術手技の修得のため、ドライラボ・ボタを用いたウェットラボなど、段階を踏んで確実に身に付けていけるプログラムを用意しています。臨床研究としては、肺癌の術前・術後の補助療法の研究、3DCT volumetry・肺血流シンチグラムを用いた術後肺機能予測、基礎研究としては肺癌の浸潤メカニズムの解明、肺癌の遺伝子治療、急性肺障害のメカニズムの解明等を行っております。

Lung cancer has become a major cause of death in most of countries. Surgical resection is the most effective for the treatment of lung cancer. Minimal invasive video assisted thoracic surgery (VATS) lobectomy appears to be a safe and effective procedure for treatment of lung cancer. We are making progress not only in reducing surgical stress but also in improving the quality of surgery by developing original devises and techniques. We are focusing also on the multimodal treatment of lung cancer, the prediction of lung function after lung resection using 3DCT volumetry, mechanism of invasion of lung cancer, and the mechanism of acute lung injury.

婦人周産期医学 (濱田 洋美)

Obstetrics and Gynecology (HAMADA Hiromi)

hhamada@md.tsukuba.ac.jp

<https://tsukuba-obgyn.org/>



私たちの研究室では、子宮体癌・卵巣癌・子宮頸癌を始めとした婦人科癌での様々な癌遺伝子・癌抑制遺伝子 (PTEN, PIK3CA, AKT, p53, p27など)の異常や蛋白発現の異常を解析し、手術・化学療法・放射線療法などの各治療法や各種抗がん剤への反応を比較することにより、個々の癌が有する異常に基づき、どのような治療法、またどのような抗がん剤を選択すべきなのか、個別化(オーダーメイド)治療を目指した研究を行っています。特に近年、PI3K/PTEN/AKTシグナル伝達経路上の分子を標的とした様々な治療薬の開発が盛んであり、個々の癌での遺伝子・蛋白異常に基づき、これらの薬剤への反応性に関する研究も行っています。

We are analyzing genetic aberrations and protein expression abnormalities of various oncogenes and tumor suppressor genes, i.e. PTEN, PIK3CA, AKT, p53, and p27 etc., in gynecologic malignancies including endometrial cancer, ovarian cancer, and cervical cancer. By comparing responses to treatment methods such as surgery, chemotherapy, and radiotherapy, and to various chemotherapeutic agents, we are aiming at personalizing therapies based on abnormalities in individual cancers. Recently numerous kinds of molecular therapeutics targeting the PI3K/PTEN/AKT signaling pathway are being actively developed. We are also conducting researches on responses of gynecologic cancers to those molecular targeted agents according to genetic and protein abnormalities in individual cancers.

腎泌尿器外科学 (西山 博之)

Urology (NISHIYAMA Hiroyuki)
nishiuro@md.tsukuba.ac.jp
http://tsukuba-urology.com



泌尿器科腫瘍研究グループでは、尿路性器癌の発癌過程の初期段階(前癌状態)が発生する分子機序の解明を行っています。特に精巣腫瘍および尿路上皮癌をモデルとして培養細胞および動物発癌モデル、腫瘍検体を用い、レドックスシグナルやsmall G-proteinの機能解析を行っています。また、分子遺伝学的手法を用いて尿路上皮癌の再発、多発の分子機序の解明にも取り組んでいます。この過程で、得られた知見を基に、細胞周期調節分子等を標的とした新規ペプチド療法の開発やBCG免疫療法を発展させたBCG菌の細胞膜成分をリポソームに搭載した新規免疫療法の開発にも取り組んでおり、将来的に臨床試験にまで発展させることを目標としております。

In our urologic tumor research group, the early stages of carcinogenic process in genitourinary cancer are analyzed. We use cultured cells, animal carcinogenic models, and clinical specimen as a model for testicular tumors or urothelial carcinoma and perform a functional analysis of redox signals and small G-protein. In addition, the recurrence of urothelial cancer is still in the process of being elucidated using molecular techniques. Based on the findings, we are now developing the novel immunotherapy with liposome containing a cell membrane of the BCG bacteria or peptide therapies that target for cell cycles. In the future, we will conduct the clinical trials.

小児外科学 (増本 幸二)

Pediatric Surgery (MASUMOTO Kouji)
kmasu@md.tsukuba.ac.jp



小児外科とは新生児を含む小児の一般外科です。特に、先天的な奇形や障害をもって生まれた子どもたちを外科的に治療し、未来に命をつなぐ役割を持っています。私たちは腹腔鏡手術や肝移植手術にも取り組んでいます。近年、外科治療に再生医療や幹細胞治療等の組み合わせが注目されています。また、難治性の小児固形悪性腫瘍の治療も我々の大きな課題です。小児外科研究室では、①再生医療を応用した小児外科疾患の治療として、先天性横隔膜ヘルニアに合併する低形成肺や横隔膜の再生、鎖肛における肛門筋の再生などを行っています。②小児固形悪性腫瘍に対して、細胞動態の特徴を遺伝子レベルで解明し、副作用を軽減した化学療法について培養細胞を用いて研究しています。

Pediatric surgery is a subspecialty of surgery for children and newborn babies with congenital and/or acquired abnormalities. A pediatric surgeon's responsibilities are to support a child's life by surgical intervention. In addition to general thoracic and abdominal procedure, pediatric surgeons participate in laparoscopic surgery and liver transplantation. We also address the treatment of solid malignant tumors.

In our institute, we do two main areas of research, which include regenerative medicine related to lung development and oncology related to solid malignant tumor.

1. Regenerative medicine 1) Congenital Diaphragmatic Hernia To investigate the progress of hypoplastic lungs, affected by umbilical stem cells / To investigate the regeneration of bioengineered diaphragms **2) Anorectal malformation** To investigate the regeneration of bioengineered anal muscle complex
2. Pediatric oncology To investigate gene aberrations related to carcinogenesis and to track the progression of malignant solid tumors

臨床薬理学 (本間 真人)

Pharmaceutical Sciences (HOMMA Masato)
masatoh@md.tsukuba.ac.jp
http://www.md.tsukuba.ac.jp/clinical-med/pharmsci/index.html



医薬品の適正使用を目指した薬物の体内動態解析: 薬物速度論解析/薬物代謝酵素および輸送タンパクの遺伝子多型解析/薬物代謝酵素および輸送タンパクを介した薬物相互作用・副作用の解析/漢方薬の薬物速度論的評価

研究テーマの具体例: チロシンキナーゼ阻害薬(ラバチニブ、エルロチニブ)、抗不整脈薬(フレカイニド、プロパフェノン)、トロンボエチン受容体作動薬(エルトロンボパグ)および免疫抑制薬(タクロリムス)の薬物速度論解析と治療薬物モニタリング/免疫抑制薬の薬理遺伝学的解析/甘草含有漢方薬による副作用の解析

Major Scientific Interests

Pharmacokinetic analysis for evaluating drug disposition
Pharmacogenetic study for assessing drug metabolizing enzymes and transporters
Drug interaction via drug metabolizing enzymes and drug transporters
Pharmacokinetic evaluation of Kampo medicine (herbal remedy)

Projects for Regular Students in Master's Programs

Pharmacokinetic analysis and therapeutic drug monitoring of anti-neoplastic agents, anti-arrhythmic agents, thrombopoietin receptor agonist and immunosuppressive agents
Pharmacogenetic analysis of immunosuppressive agent
Evaluation of adverse effect caused by Kampo-medicines containing licorice

耳鼻咽喉科・頭頸部外科 (田淵 経司)

Otolaryngology & Head and Neck Surgery (TABUCHI Keiji)
ktabuchi@md.tsukuba.ac.jp
http://www.md.tsukuba.ac.jp/clinical-med/otorhinolaryngology/index.html



耳鼻咽喉科は視覚以外のほとんどの感覚器を扱う感覚器の外科である。様々な感覚器の中で、特に当教室では聴覚の研究を主なテーマとしている。

聴覚障害をきたす要因にはさまざまなものがある。特に大きな要因として、虚血再灌流、耳毒性物質、強大音があり、それらは一部独自の、一部共通の経路を介して感覚細胞や神経細胞の障害を惹起する。その結果として起こる感音難聴は、未だ有効な治療法が確立されていない。

感音難聴の克服のため、各種の病態モデル動物を用いて、聴覚障害発生メカニズムの解明ならびに治療法の開発のためのトランスレーショナルリサーチに取り組んでいる。

Otorhinolaryngology is a specialist for sensory organs. The main thesis in our department is auditory organ. There are a lot of causes which damage the auditory organ, for example, ischemia-reperfusion injury, ototoxic substances and acoustic overstimulation. Those factors mainly injure the hair cells of Organ of Corti and the spiral ganglion cells, and cause sensori-neural hearing loss. Most of the cases of sensori-neural hearing loss are difficult to cure.

Translational research using various animal models is carrying forward to elucidate the mechanisms and to develop the therapeutic strategy for sensori-neural hearing loss.

リハビリテーション医学 (羽田 康司)

Rehabilitation Medicine (HADA Yasushi)
y-hada@md.tsukuba.ac.jp



リハビリテーション医学は、障害をターゲットにした医学であり、その目的は障害を持った方の生活を再建することです。そのためリハビリテーション医学・医療に関わる幅広い研究テーマが存在します。

現在の主な研究テーマは

1. ロボットスーツ HAL の臨床研究
2. 新しいリハビリテーション関連機器の開発および効果の実証(本学システム情報系、サイバニクス研究センターとの共同研究)
3. F波などを利用した脊髄興奮性の研究(臨床神経生理学)
4. 障害者スポーツ医学

Rehabilitation medicine is a medicine that targets disabilities, and its purpose is to rebuild the lives of people with disabilities. Therefore, there are a wide range of research themes related to rehabilitation medicine and medical care.

The current main research themes are

1. Clinical study of robot suit HAL
2. Development of new rehabilitation-related equipment and demonstration of its effects (joint research with the University's Division of Information Engineering and Cybernetics Research Center)
3. Study of spinal cord excitability using F waves (clinical neurophysiology)
4. Sports medicine for the disabled

地域医療教育学 (前野 哲博)

primary care and medical education (MAENO Tetsuhiro)
maenote@md.tsukuba.ac.jp
https://research.pcmcd.tsukuba.jp/



地域医療、総合診療をテーマとした研究を行っています。

地域医療については、地域の豊富なフィールドを活用し、総合診療医学に関する研究、プライマリ・ケア領域における臨床研究を行うとともに、地域医療の充実に関する研究(地域医療再生、地域における医療職支援、多職種連携、地域住民を対象としたヘルスプロモーション等を含む)を行っています。

医学教育については、臨床医学教育の充実に関する研究や、地域医療を実践できる人材を養成するシステムの開発、eラーニングなどのICT(情報通信技術)を活用した医学教育などをテーマとする研究活動を行っています。

1. Clinical research in primary care
2. Development of community-based medical system
3. Health promotion in the community
4. Clinical medical education

救急・集中治療医学 (井上 貴昭)

Emergency and Critical Care Medicine (INOUE Yoshiaki)

yinoue@md.tsukuba.ac.jp

http://www.md.tsukuba.ac.jp/clinical-med/e-ccm/index.html



我々は、「ER・ICU・Disasterを科学する」をテーマに、次世代にたく救急医学、集中治療医学、災害医学に関する基礎から臨床研究を行っています。特に多重症病態モデル動物を通じて各臓器不全の合併メカニズムとその予後の解明を行っています。人工呼吸器合併症、せん妄、認知障害、重症循環不全、凝固障害、急性腎不全、神経筋障害(ICUAW)など、ICUの現場でよく遭遇する合併症モデルを作成し、新しい分子への着目から臨床応用までの道を探る橋渡し研究を行っています。また、ICUの臨床現場から得られたアイデアを動物モデルを通じてそのメカニズムを探る逆橋渡し研究も行い、効率的・効果的に医療としての実用化につなげることを目標としています。更に、救急の現場におけるトリアージや、災害時のシステム構築に関するBCP策定、大規模臨床研究を計画・実施しています。

We have basic thema as "Make science of ER, ICU, Disaster" and make basic to clinical research for taking over to the next generation in the future. Especially, the mechanism to collapse to multiple organ failure and scientifically evaluation the prognosis through critical illness with model animals are on going research. We are also constructing the animal models of common complications in the ICU (Ex. ventilator associated pneumonia, delirium, cognition disorder, severe circulation failure, DIC, AKD, ICUAW etc), and try to apply them to clinical fields with the basic molecular medicine to clinical study as translational research. Also, we reversely translate the idea from clinical fields to animal models, and translate the knowledge to the real scene of the ER, ICU, and disaster. Additionally, triage at the ER, business continuity planning under the big disaster, and multi-institutional prospective study for organ failure are all ongoing research in our deaprtment.

脂質制御医学 (松坂 賢)

Lipid Medicine (MATSUZAKA Takashi)

t-matsuz@md.tsukuba.ac.jp

http://matsuzakalab-tsukuba.org/



脂肪酸はエネルギー源、生体膜の構成成分、シグナル分子としての機能を持ち、あらゆる生命現象に関与します。私たちがクローニングした脂肪酸伸長酵素Elovl6の研究から、脂肪酸の質(鎖長や二重結合の数・位置)の違いがエネルギー代謝をはじめとした様々な細胞機能に重要な役割を担っており、その制御が肥満や脂肪肝、糖尿病、動脈硬化といった生活習慣病の発症の抑制に重要であることが明らかとなりました。本研究室では、Elovl6を中心として、脂肪酸の質から生活習慣病、がん、高次脳機能など様々な疾患の病態を解明し、その制御による疾患の新しい予防法・治療法の開発を目指した研究を行っています。

As a major source of energy and as structural components of membranes, fatty acids are essential for our life. Through the cloning and the functional analysis of a mammalian fatty acid elongase Elovl6, we found the importance of the quality control of fatty acid (the length and pattern of saturation/desaturation of fatty acid) in metabolic diseases such as obesity, NAFLD and diabetes. Our group investigates the role of Elovl6 in lifestyle-related diseases, cancers and brain functions, and analyzes those molecular mechanisms. As well as unravelling the mysteries of the fatty acid diversity and biology, we are interested in the development of new approaches and therapeutics to treat various diseases based on the quality control of fatty acids.

応用医学物理学 (磯辺 智範)

Applied Medical Physics (ISOBE Tomonori)

tiso@md.tsukuba.ac.jp

https://ramsep.md.tsukuba.ac.jp/



私たちの研究室では、医学と物理学の融合による革新的な医療技術の開発を目指しています。研究テーマは学生の興味により柔軟な設定が可能です。①放射線治療、②医用画像解析、③人工知能の応用、④生体計測技術、⑤放射線防護・安全管理の高度化について積極的に取り組んでいます。これにより、がん治療の精度向上や診断の高精度化を実現し、患者の負担軽減や医療安全に貢献することを目指しています。基礎研究から臨床応用まで幅広い視点を持ち、国内外の研究機関や医療機関と連携しながら、最先端の研究を推進しています。物理学と医療に関心のある学生・研究者の参加を歓迎します。

Our laboratory aims to develop cutting-edge medical technologies through the fusion of medicine and physics. While research topics can be flexibly set according to students' interests, we actively engage in the following areas: (1) Radiation therapy, (2) Medical image analysis, (3) Applications of artificial intelligence, (4) Biometric measurement technologies, (5) Advancement and optimization of radiation protection and safety management. Through these efforts, we strive to enhance the accuracy of cancer treatment and improve the precision and speed of medical diagnosis, ultimately contributing to reducing the burden on patients and enhancing medical safety. Our research spans from fundamental studies to clinical applications, and we collaborate with leading research institutions and medical organizations worldwide to drive innovative research. We welcome students and researchers who are passionate about both physics and medicine.

スポーツ医学 (竹越 一博)

Sports Medicine (TAKEKOSHI Kazuhiro)

K-takemd@md.tsukuba.ac.jp

http://med.taiiku.tsukuba.ac.jp/



食習慣の欧米化による過栄養と慢性的運動不足に伴い肥満に関連した病気、糖尿病や高血圧、脂質異常(いわゆるメタボリックシンドローム)が急増しています。運動療法は、その発症とその進展を予防する点でコンセンサスが得られている治療法ですが、個人ごとに病態も異なりさらに効果に差異がありますので、適切な処方難しい面があります。昨今、極めて高性能な次世代シーケンサーの出現により、オーダーメイド医療実現が現実味を帯びたものと言われ始めています。そこで、運動療法(運動処方)においても、ゲノム情報に則した運動療法(運動処方)の可能性実現のための研究を推進したいと思います。つまり、どのような遺伝的多様性が様々な運動効果に関連するかを理解できれば、臨床現場で、個々の人にあった最適な運動選択と安全で有効な実施設計(オーダーメイド医療)が実現されると思います。臨床遺伝専門医としての診療経験や知識を役立てたいと思います。

High calorie intake because of Westernized food habits and chronic lack of exercise have increased the number of obese subjects and the morbidity rate of obesity-related diseases, such as metabolic syndrome, diabetes, hypertension, dyslipidemia in Japan. Although it is established that exercise is very helpful to prevent the onset and progression of the obesity-related diseases, appropriate subscription for exercise is difficult. In our research, we are planning several research projects to seek scientific evidence for personalized treatment for exercise through using genetic information. We believe that we can extend our new genetic approaches to develop new therapies for preventing obesity, diabetes, and cardiovascular disease.

医学物理学 (熊田 博明)

Medical Physics (KUMADA Hiroaki)

kumada.hiroaki.ff@u.tsukuba.ac.jp

https://www.pmr.tsukuba.ac.jp/research/



医学物理とは、先端的な物理学分野の技術、手法を医学、医療分野に応用、提供し、適切で安全な治療を行えるようにすることを目指す学問です。医療分野に応用する技術は、基礎的原理が既に提唱、確立している手法、手法を如何に実際の治療に応用できるのか、機器、装置、ソフトウェアに実装するのか、を考えます。筑波大学では、陽子線治療施設を有するとともに、ホウ素中性子捕捉療法(BNCT)用の治療装置・実証機の開発整備も行って、これらに関連する開発研究を行っています。研究テーマ：放射線治療の高精度化、各種放射線の高精度計測、評価に関する研究、及び、精密シミュレーション技術を用いた高精度線量評価技術の研究開発、など。

Medical physics is the scholarship of application of cutting-edge physical engineering technologies and methodologies to medical fields in particular radiotherapy to realize appropriate and safe treatment. Our group considers how to apply the techniques and methods whose fundamental principles have already been proposed and established to actual treatment, and whether to implement them in equipment and software. There are a proton therapy facility and a demonstration device for boron neutron capture therapy (BNCT) in University of Tsukuba, and thus, we are able to also conduct various research and developments relating to these advanced radiotherapies. Research themes: Realization of high-precision radiation therapy, research on high-precision measurement and evaluation of various types of radiation, research and development of high-accuracy dose evaluation technology that applies precision simulation technology, etc.

放射線腫瘍学 (櫻井 英幸)

Radiation Oncology (SAKURAI Hideyuki)

hsakurai@pmrc.tsukuba.ac.jp

http://www3.pmr.tsukuba.ac.jp/



放射線腫瘍科は、がんに対する総合的診療科です。腫瘍の総合的な臨床診断と放射線療法を中心とした集学的治療に関する研究を行い、治療成績の向上と患者の高いQOLを目指しています。エクス線治療、小線源治療、粒子線治療などほとんどの放射線治療装置を備え、先端的な治療法の開発研究が可能です。また、臨床での問題点を放射線生物学、医学物理学などの基礎的な手法を用いて解決するトランスレーショナルリサーチが可能です。現在の主な研究テーマは、1.放射線感受性の診断と抵抗性克服に関する研究 2. 医用画像を利用した治療計画法の開発 3. 粒子線治療を用いた新しい治療法の開発に関する研究

The department of radiation oncology makes a comprehensive study of cancer. We study a multidisciplinary approach of cancer patients to evaluate quality of life (QOL) and outcome of patients, and to maximize the probability of cure. The department of radiation oncology at the university of tsukuba has an exceptionally comprehensive radiation treatment program. Special radiation technologies available include: •Intensity modulated radiation therapy (IMRT) •High dose rate brachytherapy •Proton therapy So, we able to conduct advanced research. We also can do translational research with radiation biology and medical physics.

Research Subject, 1. Evaluation of radiation sensitivity and radiosensitization for treatment resistant tumors **2.** Development of radiation treatment planning using diagnostic imagings **3.** Development of new cancer treatment using proton therapy

放射線診断・IVR学 (中島 崇仁)

Diagnostic Imaging and Interventional Radiology (NAKAJIMA Takahito)

nakajima@md.tsukuba.ac.jp

<https://tsukuba-radiology.info/>



私たちの研究室では、画像診断に関する基礎的研究から臨床研究に至るまで幅広い研究を行っています。

基礎的研究は、光免疫療法や光イメージング・造影剤の研究で、新しい医療の発展に寄与しています。画像診断の分野では、ラジオミクスやAIによる画像の定量的解析の研究をしています。また、新しいIVR治療に関する基礎的・臨床的分野にも貢献しています。茨城県内外の医療の質を向上するために、ネットワークを介した画像転送技術やストレージに関する研究・画像を用いた大規模な地域コミュニティ形成に関する研究を行っています。

Our laboratory conducts a wide range of research in diagnostic imaging, from basic research to clinical research. Clinical Research: 1) quantitative analysis of images using radiomics and Artificial Intelligence, 2) basic and clinical fields of new IVR therapies, 3) teleradiology including a large-scale regional community. Basic research: photoimmunotherapy, molecular imaging, contrast agents

【連携大学院】バイオインフォマティクス (尾崎 遼)

Bioinformatics (OZAKI Haruka)

haruka.ozaki@md.tsukuba.ac.jp

<https://sites.google.com/view/ozakilab-jp>



私たちは、バイオインフォマティクスが人類にもっと多様な「眼」を提供できるという作業仮説に基づき、ヒトを含む様々な生物の仕組みや疾患や異常についての理解や解釈を大規模生命データから抽出することを目指し、新しいバイオインフォマティクス技術の開拓に取り組んでいます。さらに、AI生物学により、生命科学の研究現場に「AIやロボットが当たり前にある日常」をつくることを目指しています。開発・実装や生命科学研究での応用・検証を通じ、AIやロボットといった非人間によって初めてアプローチできる様々な可能性を実証し、さらには理論化・学問化を志向していきます。

We work based on the idea that bioinformatics can give humanity more diverse “ways of seeing.” Our goal is to develop new bioinformatics technologies that can extract understanding and interpretations of how living organisms work, as well as their diseases and abnormalities, from large-scale biological data. Furthermore, through AI biology, we aim to create an environment in life sciences research where AI and robotics are a commonplace part of everyday work. By developing, implementing, and validating these technologies in real life settings for life science research, we seek to demonstrate a range of new possibilities achievable only through non-human approaches like AI and robotics. Furthermore, we aspire to establish new theories and academic disciplines with these findings.

【連携大学院】臨床腫瘍学 (吉野 孝之)

Clinical Oncology (YOSHINO Takayuki)

tyoshino@east.ncc.go.jp

https://www.ncc.go.jp/jp/nccce/division/drug_diagnostic_development/index.html

<https://scrump-japan.ncc.go.jp/monstar-screen/>



私たちのグループでは、国内多施設共同研究 (SCRUM-MONSTAR, CIRCULATE-Japan) や国際共同研究を通じて得られた患者由来試料のトランスレーショナルリサーチによるマルチオミクスデータと高精度な臨床データからなる大規模データベースをもとに、分子病態に基づいたがんプレジジョンメディシンの開発を行っています。具体的には、がん病態の解明や創薬標的・バイオマーカー探索、早期発見・早期再発診断・治療標的検出などの検査系の開発から新規治療薬の臨床開発に至るまで、がんプレジジョンメディシンの研究開発を包括的に実施しています。これにより、臨床現場の変革を目指した研究を推進しています。

Our group develops cancer precision medicine based on molecular pathophysiology, leveraging a large-scale database comprising multi-omics data generated from translational research using patient-derived samples obtained through national multi-institutional collaborative studies (SCRUM-MONSTAR, CIRCULATE-Japan) and international collaborations, as well as high-quality clinical data. Specifically, we comprehensively conduct research and development in cancer precision medicine, ranging from elucidating cancer pathophysiology, discovering therapeutic targets and biomarkers, and developing diagnostic assays for early detection, early recurrence detection, and therapeutic target identification, to the clinical development of novel therapeutics. Through these efforts, we are advancing research aimed at transforming clinical practice.

橋渡し・臨床研究学 (橋本 幸一)

Clinical and Translational Research Methodology (HASHIMOTO Koichi)

koichi.hashimoto@md.tsukuba.ac.jp

<http://www.md.tsukuba.ac.jp/clinical-med/k.h-res/index.html>



◆橋渡し研究、臨床研究に取り組むことにより、より質の高い医療や健康支援活動を実現し、地域住民の健康な生活に貢献します。また、地域発の機能性食品、AIなどの先端技術を活用した医療機器などのシーズ開発を推進し、地域産業の活性化を目指しています。

◆近年、倫理的・科学的に妥当な方法で実施する、高品質の臨床研究の社会的ニーズはますます高まっていますが、人材が不足しています。そのため本研究室では、臨床研究に関わる人材をOJT教育にて養成し、社会に供給する教育活動にも積極的に貢献しています。

Major activities of our group are, 1. Development of effective prevention treatments such as functional foods for lifestyle-related diseases, 2. Construction of a seamless platform for clinical translational research in Tsukuba Clinical Research and Development Organization (T-CReDO), 3. Education of experts of integrative celerity research process for clinical translational research.

Our major scientific interests are, 1. Effective and practical management of technology in clinical trials field, 2. Effective prevention treatments for lifestyle-related diseases.

The following are examples of projects for students in doctoral or master's programs. 1. Study on amelioration of process for reliable clinical translational research 2. Extraction of problematic points in specific clinical trials and proposition of solution

【連携大学院】糖鎖工学 (館野 浩章)

Glycan engineering (TATENEO Hiroaki)

h-tateno@aist.go.jp

<https://staff.aist.go.jp/h-tateno/index.html>



細胞表面は多様な糖鎖によって覆われており、これらの糖鎖は細胞間相互作用を媒介することで、生命活動に不可欠な機能を担っています。さらに糖鎖は、癌化や老化に伴ってその構造が変化することから、有望なバイオマーカーや創薬標的として注目されています。

私たちは、新たなグライコム解析技術の開発とその医療応用の実現を目指しています。独自に開発した解析技術を用いて、癌、幹細胞、微生物叢、エクソソーム、ウイルスなど多様な生体試料を解析し、病態メカニズムの解明や新たな診断薬・医薬品候補の創出に取り組みます。

The cell surface is covered with diverse glycans that mediate intercellular interactions and play essential roles in fundamental biological processes. Because glycan structures change during cancer development and aging, they are considered promising biomarkers and therapeutic targets. We aim to develop innovative glycome analysis technologies and translate them into medical applications. Using our unique analytical methods, we investigate a wide range of biological samples—including cancers, stem cells, the microbiome, exosomes, and viruses—to clarify disease mechanisms and advance the development of novel diagnostic tools and drug candidates.

【連携大学院】ワクチン創薬科学 (高橋 宜聖)

Vaccine Science (TAKAHASHI Yoshimasa)

takahashi.yos@jihs.go.jp

https://www.niid.jihs.go.jp/content2/research_department/imm/from-imm.html



私たちのセンターでは、免疫学・ウイルス学・細菌学を専門とする研究者に加え、情報科学、構造生物学、ナノ粒子工学の研究者が緊密に連携し、多分野の最先端技術を融合した次世代ワクチン研究を推進しています。病原体と宿主免疫の攻防をマイクロからマクロに至る多階層で高解像度に解析し、AIや機械学習等を駆使して現象を正確に理解することで、病原体の弱点をピンポイントで攻撃できる新規ワクチンや抗体医薬の開発に挑戦しています。最先端のサイエンスを楽しみながら、社会に貢献する新しい形のワクチン研究を進めています。

Our center performs next-generation vaccine research by integrating expertise in immunology, virology, and bacteriology with strengths in computational science, structural biology, and nanoparticle engineering. Through a multidisciplinary approach, we aim to decode the arms race between pathogens and host immunity across molecular, cellular, and organismal scales. High-dimensional data generated through these efforts are deeply analyzed to uncover fundamental mechanisms. The information enables the rational design of next-generation vaccines and antibody therapeutics that precisely target pathogens' Achilles' heels. We pursue cutting-edge basic science that drives game-changing discoveries in the field of vaccinology.

【連携大学院】感染症制御研究部 細菌感染研究室 (濱端 崇)

Division of Bacterial Infection, Department of Infectious Diseases (HAMABATA Takashi)

hamabata.t@jihs.go.jp

<https://www.ri.jihs.go.jp/department/lab/03/abstract.html>



我々は下痢原性細菌を研究対象としております。1) 熱帯・亜熱帯の途上国に蔓延する細菌性下痢症は、雨季に流行し乾季に収まるというサイクルを繰り返します。乾季には細菌は環境中で増殖せず休眠しています。それがどのように目覚めまた増殖可能になるのか、我々はこれを実験的に再現し、細菌が目覚める際の遺伝子機構の解析を通して、感染症の季節的・散発的流行メカニズムの解明を目指しています。2) 病原細菌は組織に定着や侵入する際、付着因子というタンパク質装置を使います。付着因子は菌種・菌株により様々です。我々は途上国の流行菌に特徴的な付着因子に着目し、その付着機構の解析を行っております。

Our research focuses on diarrheagenic bacteria. 1) Bacterial diarrhea, which is prevalent in tropical and subtropical developing countries, repeats a cycle of epidemics during the rainy season and subsides during the dry season. During the dry season, bacteria remain dormant in the environment. We experimentally reproduce how they awaken and become able to multiply again, and by analyzing the genetic mechanisms involved in bacterial awakening, we aim to elucidate the mechanisms of seasonal and sporadic epidemics of infectious diseases. 2) Pathogenic bacteria also use protein devices called adhesins to colonize and invade tissues. Adhesins vary depending on the bacterial species and strain. We focus on adhesins that are characteristic of epidemic bacteria in developing countries and analyze their adhesion mechanisms.

【連携大学院】創薬感染制御学 (渡士 幸一)

Anti-infective biology (WATASHI Koichi)

watashi.k@jihs.go.jp



ウイルス感染症の制御を目指して、以下を主な課題とした研究をおこなっています。

① ウイルス感染複製のメカニズム解明

② 創薬標的となる分子・メカニズムの探索とシーズ開発への適用

③ 感染症創薬モダリティの開発

対象としては、慢性感染を引き起こすヒト腫瘍ウイルスを中心に、今後世界的流行が危惧される節足動物媒介性ウイルス、人獣共通感染症ウイルス、高病原性出血熱ウイルスを含めた病原体の基盤的研究です。国内感染症創薬中核機関として、さまざまな研究所、大学および企業等との共同研究を進めており、病原体学および創薬科学の基礎研究の専門性から、社会課題を解決する感染症制御法の創出も目指します。

We aim to control viral diseases through the research including those shown below.

1) Clarification of mechanism underlying optimized virus infection and replication in hosts

2) Discovery of drug targets and their application to seed identification

3) Development and optimization of antiviral drug modality

We focus on basic research for chronically-infected human tumor viruses and also pathogenic viruses with pandemic potential, including arthropod-borne viruses, zoonotic viruses, and hemorrhagic fever viruses. We also aim to translate scientific evidences to the productivity for anti-infectives through collaboration with counterparts including research institutes, universities, and pharmaceutical industries.

医科学特別演習(修士論文研究)

Dissertation in Medical Sciences

医科学の基礎科目の履修とともに、修士論文を作成するための研究活動も教育の一環としてきわめて重視されます。学生は本プログラムに属する教員が主宰する約80の研究指導グループのうちのいずれかに属して高度の研究を行うため2年間修士論文研究を行います。学生には、在学中の2年間籍を置く研究指導グループを入学の時点で選択し、明確な研究目標をもつことが要求されます。

In the graduate education a special emphasis is placed on research training to achieve the educational purpose. Students are required to do their thesis research during the two years (standard) of educational term under the supervision of a faculty member. Therefore, at the time of admission, students are required to chase their supervisor, and to have a definite goal of the work.

■ 学会発表、原著論文発表

研究活動で成果が得られると、その成果を研究分野の専門家が集まる学会・研究会で、また原著論文（多くの場合は英語）として発表します。例年多くの学生が国内外の学会で研究成果の発表を行っています。なかには筆頭著者として原著論文を出す学生もいます。授業科目の履修だけでなく、修士論文教育の過程を通じて、プレゼンテーション能力、英語力を高める必要があります。

■ 修士論文審査

- ・修士論文の提出は「2年次、12月」です。
- ・修士論文研究については、下記①～⑤の課程を経て完結します。各課程では、指導教員だけでなく、研究室以外の教員からも評価や指導を受けます。
- ① 研究計画発表会(1年次、7月)：研究指導教員との相談のうえ決定した研究テーマおよび研究計画について発表し、計画内容の充実度や妥当性を中心にディスカッションを行います。
- ② 中間審査(1年次、3月)：主査1名および副査2名以上による審査を受けます。残りの修業期間内に修士論文を提出し、最終審査に合格できる見込みがあるかについて評価されます。
- ③ 研究成果発表会(2年次、9月)：これまでの研究成果について発表します。ディスカッションを通じて、自身の研究における課題(不足している点や強調すべき点など)を整理し、修士論文執筆の参考とします。
- ④ 最終審査(2年次、1月)：主査1名および副査2名以上による審査です。提出した修士論文の内容を説明し、質疑応答および口頭試問を経て、合否が決定されます。
- ⑤ 公開発表会(2年次、2月)：修士論文をベースに、自身の研究成果を分かりやすく発表します。研究成果を広く共有するとともに、研究室外の教員・学生との活発な議論を通じて、発表力およびコミュニケーション力の向上を図ります。

(上記は春学期入学学生スケジュールです)

- The Master's thesis must be submitted in December of the second year. The Master's thesis research is completed through the following five stages (①-⑤).
- At each stage, students receive evaluation and guidance not only from their academic supervisor but also from faculty members outside their laboratory.
- ① Research Proposal Presentation (July, First Year): Students present their research theme and research plan, which have been determined in consultation with their academic supervisor. The discussion focuses primarily on the comprehensiveness and appropriateness of the research plan.
- ② Midterm Review (March, First Year): Students undergo an evaluation conducted by one chief examiner and at least two sub-examiners. They are assessed on whether they are likely to submit their Master's thesis and successfully pass the final examination within the remaining period of enrollment.
- ③ Research Progress Presentation: (September, Second Year) Students present the research results obtained to date. Through discussion, they identify important points in their research—such as areas that require further development or aspects that should be emphasized—and use these insights to guide the writing of their Master's thesis.
- ④ Final Examination (January, Second Year): This examination is conducted by one chief examiner and at least two sub-examiners. Students explain the content of their submitted Master's thesis, and the final decision is made based on the question-and-answer session and oral examination.
- ⑤ Public Presentation (February, Second Year): Based on the Master's thesis, students present their research findings in a clear and accessible manner. In addition to broadly sharing their research outcomes, this session aims to enhance students' presentation and communication skills through active discussions with faculty members and students outside their laboratory.

(The above is the schedule for students admitted in the spring semester.)

公衆衛生学学位プログラムについて

About the Program



公衆衛生学学位プログラムリーダー 近藤 正英

WHOなどの国連機関に保健医療の専門家として就職するには、修士（公衆衛生学）が必須だといわれています。公衆衛生学学位プログラムでは、公衆衛生学研究者・教育者、公衆衛生行政官、産業医、企業の安全管理者などを育成します。科目としては、疫学、生物統計学、保健政策学、社会行動科学、環境科学などを学びます。筑波大学の公衆衛生学学位プログラムは、公衆衛生学の専門家とともに、広く保健医療の実務経験者、研究教育者を含めた包括的な教授陣による教育を受けながら公衆衛生学の専門家を育成するところに大きな特徴があります。

To work as a health care specialist for WHO or other United Nations institutions, a person must have a master's degree in public health. The Master's Program in Public Health prepares students for careers in public health research and education, public health policy and management, and safety control. Courses offered include epidemiology, biostatistics, health policy and management, social and behavioral sciences and environmental health. Given the medical sciences department's wide-ranging faculty, a distinctive feature of the University of Tsukuba's public health program is that students study with wide-ranging experts related to public health and thus develop a comprehensive view.

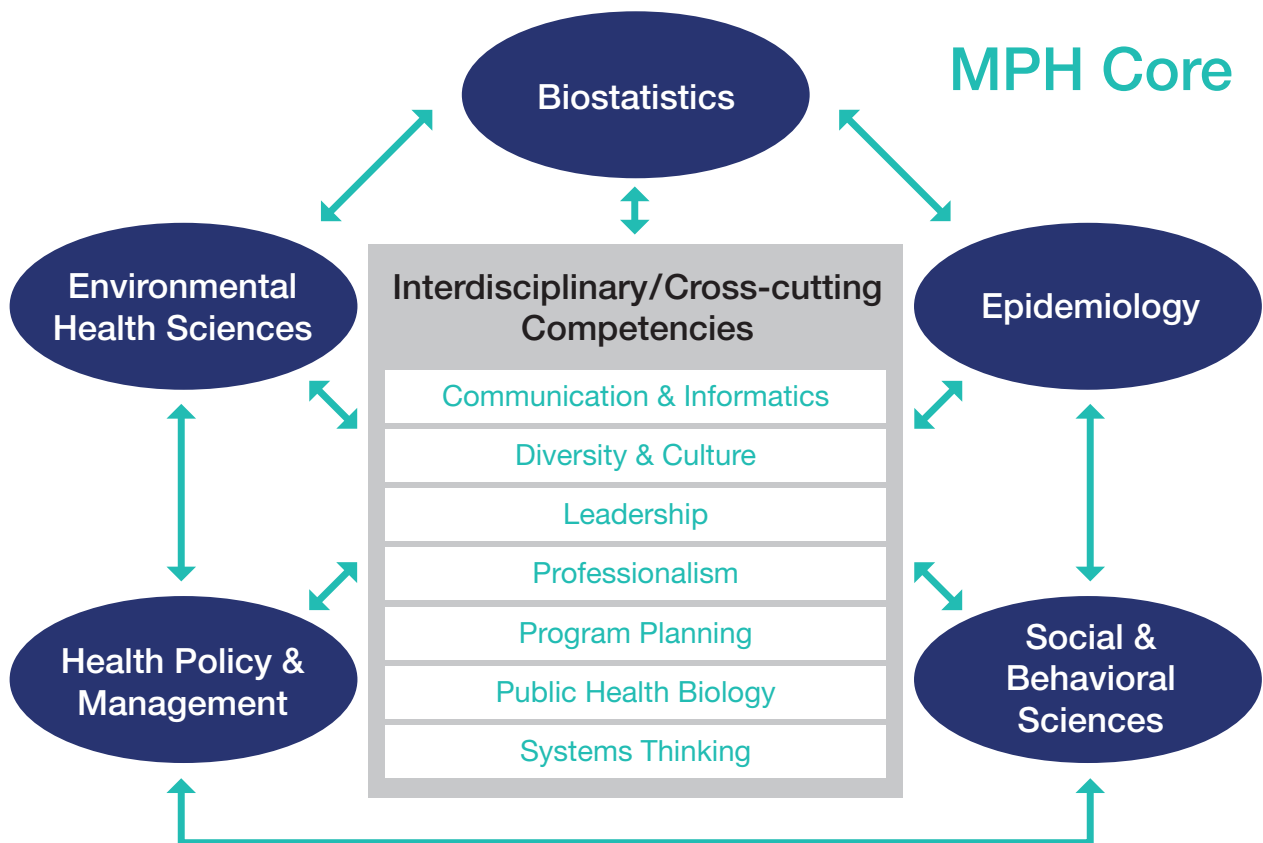
公衆衛生学学位プログラムの概要

Outline

修士(公衆衛生学)、英訳ではMaster of Public Health(MPH)ですが、その修得に求められる国際的基準のカリキュラムにのっとり、コア学問領域を中心として必修科目が指定されています。プログラムの全ての必修科目、また選択必修科目のほとんどが英語で開講されており、留学生とともに日本人学生も英語カリキュラムで学位を取得する環境が整えられています。筑波大学のTAやTFの制度を利用して、大学など教育研究機関にて将来的に教育担当となる教育能力を身につけることができます。

Given the Medical Sciences Department's wide-ranging faculty, a distinctive feature of the University of Tsukuba's public health program is that students study with experts not only of public health but also of basic and clinical medicine and thus develop a comprehensive view.

- Provides **Master of Public Health Degree**
- Focuses on **Public health professional training**
- Education covers divers knowledge and skills including **5 core areas of public health**



修了生より

Voice from Graduated Students



大丸 香 (2022年修了)

製薬会社で治験薬や医薬品の安全性評価をやっていく中で、医薬品とその有害事象の因果性を導く疫学に面白さを感じ、また、医療に対して広い視野を持ちたいと考え、2020年4月に公衆衛生学学位プログラムに入学しました。まさに新型コロナウイルス感染症のパンデミックが勃発した時で、入学式はなく1年目の前半はオンデマンド授業でした。しかし、社会人の私には講義を受けることが本当に新鮮で、どの内容も興味深いものでした。指導教授の丁寧なご指導のもと、1年目に国内での学会発表、2年目には国際学会での発表や、修士論文の国際誌への投稿もできました。学ぶことに集中した2年間は何にも代え難い有意義な時間でした。現在は高齢者の疾病・介護予防を専門とした研究所で、高齢者のフレイルと薬剤の影響などの研究に取り組み、国際学会での発表や論文投稿を行っています。先生方からご指導いただいたことや本プログラムでの経験が私の基礎になっていることを日々実感しています。

幅野 由樹子 (2012年修了)

私は筑波大学看護・医療科学類を卒業し、そのまま筑波大学大学院フロンティア医科学専攻公衆衛生学コースに進学しました。大学院の時に同じ研究室にラオスからの留学生がいたことをきっかけに、ラオスの首都にある国立病院と医科大学にてインターンしながら、修士論文のデータ収集を行うことができました。修士論文では、ラオスの首都において親しいパートナーからの暴力が妊婦のメンタルヘルスと健康行動にどのような影響を及ぼすかというテーマにしました。ラオスでの経験は、とても学びが多くまた刺激的であり、その後の人生に影響を与えてくれました。

現在は、国際協力の中でも緊急援助分野で仕事をしています。大学院の専攻の内容と現在の仕事の内容は必ずしも重なっているわけではないですが、困っている人たち（特に女性や子ども）に手を差し伸べられることをしたいという根本的な思いは変わっていないと感じています。大学院で先生方にご指導いただいたこと、学んだことや経験が大学院卒業後の保健師としての業務や現在の仕事にも繋がっていると思います。これからも学ぶ姿勢を忘れず、自己研鑽に励み続けたいと思っています。





中山 慶一 (2023年修了)

製薬企業でワクチンの臨床開発の仕事をしなが、長期履修制度を利用して3年間でMPHを取得しました。感染症の疾病負荷(社会に対してどの程度の負担になっているか)を調べるために疫学研究的の計画をしようとした際に、疫学・統計・医療データベースに関する自分の知識・スキルが欠けていることを痛感し、公衆衛生学学位プログラムに進学しました。奇しくも、入学した2020年からCOVID-19が流行し、連日のように感染者数、ワクチン、公衆衛生、疫学という言葉が世間でも聞かれるようになりました。公衆衛生を学んでいるからにはコロナ禍で社会にインパクトのある研究成果を出してみたいという気持ちで、ヘルスサーピスリサーチ研究室の指導教官に研究テーマの相談をしたところ、「大風呂敷を広げ過ぎていて実施可能性が考慮されていない。本当に知りたいことは何なのかを再検討してみよう。一つ一つの研究で明らかにできることは小さくても良い」との助言が一番心に残っています。公衆衛生上

の課題である薬剤耐性菌の問題と、研究室が保有する医療・介護データベースの利点を活かしたシンプルな分析に絞った結果、公衆衛生学会の最優秀演題賞を頂くことができました。本学の公衆衛生学学位プログラムでは、大学、官庁、病院、高齢者施設、自治体、保健所などで働く専門家から学び、医療や介護の現場、国や自治体の意思決定にも還元できるような研究に携われる環境が整っています。ぜひ一緒に公衆衛生学を学びましょう。

Deni Iskandar (March 2014, completed)

After completing my studies in Indonesia and gaining professional experience, I joined the University of Tsukuba. The transition from a work environment to an academic setting was challenging, but I was drawn to the university's unique programs, particularly the Master of Public Health (MPH) Program. Eventually, I conducted my research within the Department of Healthcare Policy and Management. The program's delivery in English was especially beneficial, allowing me to gain valuable knowledge and hands-on research experience.

Living and studying in Tsukuba is a look at the future where at the same time immersing in the strength and roots of traditional Japanese culture. A supportive environment in Tsukuba, particularly at the University of Tsukuba was another added value to studying here. It has broadened my views with various experiences through the MPH Program. I had a chance to learn from respectable lecturers and researchers not only from our campus but also from other campuses or institutions in Japan.

As a private international student, I am grateful to be supported by the G30 Scholarship from MEXT, which allowed me to complete my studies and graduate on time. Experience in Tsukuba has opened doors of possibilities for me, one of which is a relatively diverse career choice. As I have now decided to pursue my endeavor as a lecturer and researcher, having the University of Tsukuba in my education background is firming my expertise, leading me to finish my PhD also.

Living in Japan and studying at the University of Tsukuba has shaped part of me, personally and professionally. Thank you to all the professors, staff, laboratory members, friends, colleagues, and those who cannot be mentioned individually. You have all been truly part of my personal and professional journey.



カリキュラム一覧

Curriculum

公衆衛生学学位プログラムの教育課程は、基礎科目、専門科目と大学院共通科目で構成されています。開設科目の中から選択して関連科目を幅広く学びながら公衆衛生学の専門的知識を習得するカリキュラム編成となっています。必修科目は英語で開講されています。

The courses consist of the foundation subjects for major and major subjects. To promote multidisciplinary approach, students are encouraged to take courses offered in other majors and schools of the university. Compulsory subjects were taught in English.

大学院共通科目

◎：必修科目 ○：選択必修科目 無印：選択科目

ナンバリングコード	科目名	英語開講	単位	履修年次	モジュール	公衆衛生学学位プログラム
OA00104	生命倫理学		1	1・2	春C	○

学術院共通専門基礎科目

◎：必修科目 ○：選択必修科目 無印：選択科目

ナンバリングコード	科目名	英語開講	単位	履修年次	モジュール	公衆衛生学学位プログラム
OAS0507	社会医学概論	○	2	1	春AB	◎

基礎科目

◎：必修科目 ○：選択必修科目 無印：選択科目

ナンバリングコード	科目名	英語開講	単位	履修年次	モジュール	公衆衛生学学位プログラム
OATHA11	疫学概論	○	1	1・2	春AB	◎
OATHA12	医生物統計学概論	○	1	1	春AB	◎
OATHA13	医生物統計学実習	○	1	1	春AB	○
OATHA14	公衆衛生学特別演習	○	8	2	通年	◎
OATHA15	疫学・生物統計学セミナー	○	2	1・2	通年	○
OATHA16	量的研究の批判的評価法	○	1	1	春C	○
OATHA17	システマティックレビュー・メタアナリシス入門	○	2	1	秋AB	○

専門科目

◎：必修科目 ○：選択必修科目 無印：選択科目

ナンバリングコード	科目名	英語開講	単位	履修年次	モジュール	公衆衛生学学位プログラム
OATHE21	健康行動科学論	○	1	1・2	秋AB	◎
OATHE22	保健医療政策学	○	1	1・2	秋AB	◎
OATHE23	医療管理学	○	1	1・2	秋AB	◎
OATHE24	医療経済学	○	1	1・2	秋C	◎
OATHE25	ヘルスサービスリサーチ概論	○	1	1・2	春AB	◎
OATHF31	疫学特論	○	2	1・2	秋AB	◎
OATHF32	臨床試験論	○	1	1・2	秋AB	○
OATHF33	ヘルスプロモーション	○	1	1・2	秋AB	○
OATHF34	環境保健学	○	1	1・2	春AB	○
OATHF35	医生物統計学特論	○	2	1・2	秋AB	◎
OATHF36	精神保健学	○	1	1	春AB	○
OATHF37	高齢者ケアリング学特論	○	1	1・2	春AB	○
OATHF38	産業保健学	○	1	1・2	春AB	◎
OATHF39	グローバルヘルス	○	1	1・2	秋C	◎

Graduate General Education

◎：Compulsory Subject ○：Elective Compulsory SubjectUnmarked：Elective Subject

Numbering Code	Course Name	Conducted in English	Credit	Student Year	Modules	Master's Program in Public Health
OA00104	Bioethics in medical research and practice		1	1・2	Spring C	○

Common Subjects

◎：Compulsory Subject ○：Elective Compulsory SubjectUnmarked：Elective Subject

Numbering Code	Course Name	Conducted in English	Credit	Student Year	Modules	Master's Program in Public Health
OAS0507	Introduction to Social Medicine	○	2	1	Spring AB	◎

General Foundation Subjects

◎：Compulsory Subject ○：Elective Compulsory SubjectUnmarked：Elective Subject

Numbering Code	Course Name	Conducted in English	Credit	Student Year	Modules	Master's Program in Public Health
OATHA11	Introduction to Epidemiology	○	1	1・2	Spring AB	◎
OATHA12	Biostatistics, Basic	○	1	1	Spring AB	◎
OATHA13	Biostatistics in Practice	○	1	1	Spring AB	○
OATHA14	Dissertation in Public Health Sciences	○	8	2	All year	◎
OATHA15	Seminar : Epidemiology and Biostatistics	○	2	1・2	All year	○
OATHA16	Critical Appraisal in Quantitative Health and Social Sciences Research	○	1	1	SpringC	○
OATHA17	Systematic reviews and Introduction to Meta-analysis	○	2	1	FallAB	○

Major Subjects

◎：Compulsory Subject ○：Elective Compulsory SubjectUnmarked：Elective Subject

Numbering Code	Course Name	Conducted in English	Credit	Student Year	Modules	Master's Program in Public Health
OATHE21	Lecture on Health Behavioral Science	○	1	1・2	Fall AB	◎
OATHE22	Health Care Policy and Management	○	1	1・2	Fall AB	◎
OATHE23	Health Service Administration	○	1	1・2	Fall AB	◎
OATHE24	Health Economics	○	1	1・2	Fall C	◎
OATHE25	Introduction of health services research	○	1	1・2	Spring AB	◎
OATHF31	Epidemiology	○	2	1・2	Fall AB	◎
OATHF32	Methods in Clinical Trials	○	1	1・2	Fall AB	○
OATHF33	Health Promotion	○	1	1・2	Fall AB	○
OATHF34	Topics in Environmental Health	○	1	1・2	Spring AB	○
OATHF35	Biostatistics, Advanced	○	2	1・2	Fall AB	◎
OATHF36	Mental Health	○	1	1	Spring AB	○
OATHF37	Gerontological Nursing and Caring	○	1	1・2	Spring AB	○
OATHF38	Occupational and Environmental Health	○	1	1・2	Spring AB	◎
OATHF39	Global Health	○	1	1・2	Fall C	◎

研究グループ紹介

Research Groups

公衆衛生学学位プログラムには、基礎医学、臨床医学、公衆衛生学、ヒューマンケア学の幅広い領域にわたる研究グループがあり、活発な研究活動が行われています。

In the master's Program in Public Health, there are research group in broad range of fields-basic and clinical medicine, public health and human care science, where a lively research activities are conducted.

疫学 (我妻 ゆき子)

Clinical Epidemiology (WAGATSUMA Yukiko)

ywagats@md.tsukuba.ac.jp

<http://www.md.tsukuba.ac.jp/epidemiology/index.html>



臨床疫学とは、疫学と臨床科学の基本理論をもとに発達してきたモダン医学の一領域である。臨床疫学の手法は、基礎医学の理論体系に基づいた経験と、患者の治療やケアをする際に提起された複雑なオープンエンド的課題との間にある概念的ギャップを理解するのに有用である。臨床試験と臨床疫学に関する理論と方法の開発、およびその応用に関する研究を行う。各種疾患領域における臨床研究を通じて、疾病制御に関するエビデンスを提示し、患者の治療やケアを改善することを目指す。

Clinical epidemiology has been evolved in modern medicine, based on two disciplines of clinical sciences and epidemiology. That helps to understand the conceptual gaps between structured experience of basic science and the more complex, open-ended problems arising for the care of patients. Based on the principals of clinical trials and the use of clinical epidemiology, we tried to provide the evidence towards improving the care of the patients.

産業精神医学・宇宙医学 (笹原 信一郎)

Occupational Psychiatry / Space Medicine (SASAHARA Shinichiro)

s-sshara@md.tsukuba.ac.jp

<http://occup-aerospace-psy.org/index.php>



産業精神医学・宇宙医学グループは、職業に関連する精神疾患、特に職場のうつ病予防について、うつ病を予防し健康を維持するストレス対処力向上を目指した職場環境改善研究、職場復帰支援の新たな方策に関する研究、筑波研究学園都市における大規模横断調査研究など、精神科産業医としての経験とフィールドを生かした研究を行っています。大学院生は、これらの研究に携わったり、資格に応じて産業医先の企業で産業精神医学の実践的トレーニングを受けたりすることが可能です。各人の状況に応じて社会人も受け入れ可能です。原則、毎週水曜日午前中にミーティングがありますので、こちらへの参加が必須となります。

We are specialized in the prevention of work-related mental diseases. We has conducted various empirical and epidemiological studies on the risk factors for work-related diseases.

Projects for regular students in doctoral or master's programs are the following:

- 1) Various mental disorder patients' treatment in occupational health.
- 2) Training on the technique for management worker's mental and physical health issues as an industrial doctor.
- 3) Researches by the epidemiologic techniques.

Study Programs for Short Stay Students (one week - one trimester) are the following:

- 1) The health care for workers mainly on their mental health.
- 2) Clinical psychiatry (Major depressive disorder, Adjustment disorder etc.)
- 3) The issues on return-to-work support.

保健医療政策学・医療経済学 (近藤 正英)

Health Care Policy and Health Economics (KONDO Masahide)

mkondo@md.tsukuba.ac.jp

http://www.hcs.tsukuba.ac.jp/~health_policy/



保健医療政策学・医療経済学研究グループは、保健医療の社会的な課題に関して、経済学や政策科学を中心とした社会科学のアプローチから取り組んでいます。得られた成果を、社会的な意思決定として政策の立案への根拠として提供し、人々の健康水準の向上や、効率的で公正な保健システムの確立に資することを目指しています。具体的な事例としては、予防医療に関する医療経済学研究を行ってきています。保健医療サービスの費用効果分析や市場分析の手法を用いています。また、グローバルヘルス、特にユニバーサルヘルスカバレッジに関する研究も行ってきました。

Our department, Health Care Policy and Health Economics, works on social issues related to health and health care through a social science approach such as economics and policy sciences. We aim to present our findings as evidences for social policy making in order to contribute to improving population's health and establishing efficient and equitable health systems. Recent major research projects include health economics of preventive health care using cost-effectiveness analysis and market analysis and global health research on universal health coverage.

ヘルスサービスリサーチ (渡邊 多永子)

Health Services Research (WATANABE Taeko)

watanabe.taeko@md.tsukuba.ac.jp

<http://tsukuba-hsr.org/>



ヘルスサービスリサーチとは、医療（保健・看護・福祉を含む）のサービスの質を、Structure (Policy, Staffing, Facility, Budget, Insurance, Health systemなど)、Process (Utilization, Accessibility and Referral under Health systemなど)、Outcome (QOL, Cost, Satisfaction, ADL, Well-being, Survivalなど)を基本とした視点から、個々の医療技術だけでなく、それがサービスとしてどう配分されているか、どのような効果をもたらしているのかを、包括的・科学的に実証分析する学際研究です。われわれの研究グループは、医療分野だけでなく、政策学、法学、経済学、社会学、人類学等の学際的視点からの成果を有効に取り入れ、すべての人がよりよい医療サービスを受けられるための仕組みを研究し、その成果を国内外に発信することで、サービスの質向上を図り、『生活と調和した医療実現』の一助となることを目指しています。

Health services research is a multidisciplinary science that analyzes through empirical analysis, from a comprehensive and scientific perspective, the quality of the medical care (including health care, nursing and welfare) from several points of view, including the structure (Policy, staffing, facility, budget, insurance, health system, etc.), process (Utilization, accessibility, referral under health system, etc.) and outcome (QOL, cost, satisfaction, ADL, well-being, survival, etc.).

Our research group, not only study the arrangement of the medical care field alone, but also the multidisciplinary points of view of policy, law, economics, sociology, anthropology and so on, incorporating effectively their fruits, in order to achieve better medical services for all people, and aiming to help transmitting their success inside and outside the country, and with this, improving the quality of service "achieving medical care in harmony with life".

高齢者ケアリング学分野 (橋爪 祐美)

Gerontological Nursing & Caring (HASHIZUME Yumi)

hashizume.yumi.gu@u.tsukuba.ac.jp

<https://sites.google.com/view/koureicare/>



超高齢少子社会を生きる人と家族に有用な研究や教育に努めています。老親を介護する働く女性のメンタルヘルス、勤労者夫婦の支援、結婚移住外国人女性と家族のケア、富山型デイサービス、モンゴル国の研究に取り組み、質的研究法を手掛けています。公衆衛生・医療福祉分野で実務経験があり、独自の研究テーマをもつ方を歓迎します。

Sustaining fruitful caregiving life for all generation people and their families. I am interested in the following theme and am using qualitative research method. I welcome those who have practical experience in the field of public health and solid, original research theme.

- Mental health of employed female caregivers
- Middle-aged couples, foreign bride, taking care of aging family members
- Family caregiving in Mongolia
- Toyama style day service

国際社会医学 (市川 政雄)

Global Public Health (ICHIKAWA Masao)

masao@md.tsukuba.ac.jp

<https://tsukuba-gph.amebaownd.com/>



「人びとの健康格差は、国内はもとより先進国と途上国の間にもみられ、それは政治的、社会的、経済的に容認できないものであり、すべての国に共通する関心事である」(アルマ・アタ宣言、1978年)。本研究グループでは、そのような問題意識をもち、単に知的欲求を満たすのではなく、社会を変えていくための研究を目指し、社会的弱者の健康問題や、世界的に取り組むべき優先順位の高い健康問題に取り組んでいます。現在、国内では高齢者のモビリティと健康について、国外ではアジア諸国を中心に外傷予防・健康増進に向けた問題解決・行動指向型研究を立案・実施しています。

"The existing gross inequality in the health status of the people, particularly between developed and developing countries as well as within countries, is politically, socially, and economically unacceptable and is, therefore, of common concern to all countries." (The Declaration of Alma-Ata, September 1978) With this statement in mind, we have conducted action-oriented researches into global public health problems among socially disadvantaged and vulnerable population. Making change happen is difficult but we believe it is possible through scientifically sound research. Current topics of our research include injury prevention, safety and health promotion and communication in Japan and other Asian countries.

国際発達ケア：エンパワメント科学 (安梅 勅江)

International Community Care and Life-span Development :

Empowerment Sciences (ANME Tokie)

anmet@md.tsukuba.ac.jp <http://square.umin.ac.jp/anme/>



当研究室では、エンパワメントを科学する研究を行っています。エンパワメントとは、「生き活きとした生きる力(活生力)」「きずな育む力(絆育力)」「共に創る力(共創力)」を紡ぐことです。誰もが持っている限りない可能性を前提に、その力を最大限に発揮できるような環境を整える方法を科学します。ともに認め支えあい、知のエネルギーを共有しながら、世界中すべての人々のウェルビーイングに通じる研究を目指します。共生のための基盤づくりに向けた科学的な根拠を生み出す研究室です。最先端のケア科学を「極める」研究技術と、それを社会に「活かす」還元技術を融合した「ケア科学リーダーシップ」育成を目標にしています。

The notion of empowerment is a useful concept and method, which can cross national and cultural boundaries to be utilized in many different situations. Our lab designed such a framework of community empowerment for life span development, and applied to programs in other countries, with special attention to local cultural values. Participation by and empowerment of the people in areas of health promotion, family caregiving, housing, and community development will be examined. This is offered in the hope that we may be able to create communities that can meet their own needs, in an interdependent manner that draws on many levels of contribution to make lives worth living across the lifespan, regardless of where we live.

生物統計学 (五所 正彦)

Biostatistics (GOSHO Masahiko)

mgosho@md.tsukuba.ac.jp

<https://sites.google.com/view/tsukuba-biostatistics/home>



生物統計学とは、医学・生物学領域のための応用統計学の一分野で、これらの領域で生じる科学的問題に回答を与えるための学問です。研究仮説を検証するためのデザインや評価変数、測定時点などを適切に設定できているか、サンプルサイズは必要十分となっているか、妥当な統計手法が選択されているかなど、医学系研究の計画から報告までの過程で生じる統計学的問題を解決するための研究を行っています。大学院生の研究課題は「医学系研究で生じる統計学的問題に対する新しい統計手法の開発、統計手法の使い分けや性能評価」です。生物統計学を通じて、医生物学・健康科学の発展に貢献することを目指しています。

Biostatistics is an applied statistics for medical and biological researches. We aim to develop statistical methodologies for study design, data collection, and data analysis in these researches. We are also trying to solve any statistical issues arising in the process of the design, conduct, analysis, and evaluation of clinical studies. The research project of the graduate students in our group is "development of novel statistical methods for issues arising in medical researches, and evaluation of the performance of the statistical methods". Our group contributes to solve problems in human health using statistical approaches.

産業保健学 (堀 愛)

Occupational Health (HORI Ai)

horiai@md.tsukuba.ac.jp

<https://trios.tsukuba.ac.jp/researcher/0000003931>



世界の人口の6割が働いています。仕事の人々の安全と健康を脅かすことがあってはなりません。しかし職業病や労働災害、作業関連疾患は常に発生しています。現在も、物理的因子、感染症、技術革新、社会経済構造の変化など、さまざまな要因が働く人々の健康を脅かしています。仕事による健康障害を予防するためには、本質的な原因を探求して元から断つ、地道な努力が不可欠です。産業保健学は、医学・公衆衛生学・疫学を基礎とする学際的な実践科学であり、働く人々の健康を守るための学問です。

Sixty per cent of the world's population works. Work should never pose a threat to people's safety and health. However, occupational diseases and work-related injuries and illnesses have always been caused. Even today, various factors threaten workers' health, including physical hazards, infectious diseases, technological innovations, and socioeconomic structure changes. Steady efforts to determine and eliminate the root causes are essential to preventing work-related health problems. Occupational health is the multidisciplinary practical science based on medicine, public health, and epidemiology to protect workers' health.

母子保健学 (Ganchimeg TOGOBAATAR)

Maternal and Child Health (Ganchimeg TOGOBAATAR)

ganchimeg-t@md.tsukuba.ac.jp

<http://www.md.tsukuba.ac.jp/nursing-sci/ghn>



私の主な研究分野は、発展途上国、特にモンゴルにおける母子の健康です。これまでに、思春期妊婦の周産期アウトカム、出産経験と周産期メンタルヘルスに関する地域および病院ベースの実態調査、WHO出産ケアガイドライン「ポジティブな出産体験のための分娩期ケア」と国際出産イニシアティブによる「安全で母子&家族を尊重したケアを実現するための12のステップ」の普及、尺度の翻訳と文化的改変、心不全患者のセルフケア、小児のメンタルヘルスクリーニング、学童の手洗い教育などの研究プロジェクトに携わってきました。

My primary area of research is maternal and child health in developing countries, particularly Mongolia. I have been involved in research projects that include secondary analysis on adverse maternal and perinatal outcomes among adolescent pregnancy, community-based surveys on women's childbirth experience and mental health, implementation of the WHO intrapartum guidelines and International Childbirth Initiative's 12 steps to Safe and Respectful Mother Baby Family Maternity care, cross-cultural adaptation of questionnaires, heart failure patients' selfcare, and screening for child mental health as well as schoolchildren's handwashing practices.

デジタルヘルス (岩上 将夫)

Digital Health (IWAGAMI Masao)
iwagami@md.tsukuba.ac.jp
<https://digitalhealth.md.tsukuba.ac.jp/>



デジタルヘルス (デジタルメディスン) は、医学の中でも比較的新しい分野であり、電子カルテやレセプト情報、モバイルアプリや生体センサー情報、画像や音声情報、ゲノムやオミックス情報、などデジタル化された様々な医療情報に、従来の疫学・統計手法だけでなく、機械学習などの AI 解析技術を活用し、人体から社会に渡る様々な医学・医療の課題を解決することを目標としています。疫学および生物統計の基本をしっかり習得した上で、新しいタイプの医療ビッグデータを解析し、患者、医療者、社会の役に立つメッセージを見つけ発信する、あるいは新しいツールやモダリティを開発・実装することにチャレンジする意欲のある方を歓迎します。

Digital health or digital medicine is a relatively new field in medicine. It aims to solve various medical and healthcare issues in the society, by applying not only conventional epidemiological and statistical methods but also AI technologies, such as machine learning, to a variety of digitized information, including electronic medical records and claims data, data obtained from mobile apps and biosensors, images and voice data, genomic and omics information, etc. We would like to welcome students and researchers who are willing to take on the challenge of analyzing new types of medical big data and finding and disseminating useful messages to patients, healthcare professionals, and society, as well as developing and implementing new tools and modalities, after acquiring a solid understanding of the basics of epidemiology and biostatistics.

地域医療教育学 (前野 哲博)

primary care and medical education (MAENO Tetsuhiro)
maenote@md.tsukuba.ac.jp
<https://research.pcmcd-tsukuba.jp/>



地域医療、総合診療をテーマとした研究を行っています。地域医療については、地域の豊富なフィールドを活用し、総合診療医学に関する研究、プライマリ・ケア領域における臨床研究を行うとともに、地域医療の充実に関する研究 (地域医療再生、地域における医療職支援、多職種連携、地域住民を対象としたヘルスプロモーション等を含む) を行っています。医学教育については、臨床医学教育の充実に関する研究や、地域医療を実践できる人材を養成するシステムの開発、eラーニングなどの ICT (情報通信技術) を活用した医学教育などをテーマとする研究活動を行っています。

1. Clinical research in primary care
2. Development of community-based medical system
3. Health promotion in the community
4. Clinical medical education

社会健康医学 (村木 功)

Public Health Medicine (MURAKI Isao)
isao.muraki.ph@md.tsukuba.ac.jp
<https://www.md.tsukuba.ac.jp/community-med/publiccmd/>



地域行政と連携した公衆衛生活動を通して、研究データを収集し、疫学的手法を用いて、健康に関連する生活習慣やハイリスク要因などを明らかにする研究に取り組んでいます。また、明らかにした要因をもとに、地域・社会に還元していく方法を検討し、その実装から効果評価までにも取り組み、研究と社会還元の良い循環を目指しています。さらに、コホート研究、インターネット調査などの独自調査、公的統計などの既存資料を組み合わせ、保健医療政策や社会イベントが社会や国民に与える効果・影響の検討にも取り組んでいます。これらを通して、「人々がより健康に過ごすために必要なことは何か」に答えることを目指しています。

We conduct public health research in collaboration with local governments to identify lifestyle and high-risk factors related to health, applying epidemiological methods. We also explore ways to return these findings to practice and evaluate their effectiveness after implementation. Furthermore, we examine the impact assessment of health policies and social events on society and people's well-being by collecting and analyzing primary data such as cohort studies and internet surveys as well as by analyzing secondary data from public statistics. Through these efforts, we aim to answer a key question: What is needed for people to live healthier lives?

社会精神保健学 (森田 展彰)

Social Psychiatry & Mental Health (MORITA Nobuaki)
nobumori@md.tsukuba.ac.jp
http://www.md.tsukuba.ac.jp/community-med/mental_health/index.html



当研究室では、犯罪、アルコール・薬物乱用、児童虐待、不適応などの社会病理現象を含む幅広い精神保健上の問題について、フィールドワークや実証研究を通じて、実態把握・原因の解明・対策の提案に取り組んでいます。主な最近の成果としては以下のものがあります。◆問題行動・精神症状の要因やその評価：児童虐待事例のリスク要因の評価、依存物質の再使用リスクの評価、精神障害や依存症と暴力の関係、行動嗜癖の要因に関する研究、◆支援の制度や手法：オープン・ダイアログの手法の日本への導入、薬物依存症の社会復帰支援体制の研究、アディクションや暴力事例に対するトラウマインフォームドケアの研究、アディクションのある養育者とその子どもに対する支援ツール、DV加害者更正プログラム

Department of Social Psychiatry & Mental Health looking into the causes and solutions of sociopathological phenomena such as alcoholism, drug abuse, hikikomori (social withdrawal), non attendance at school, child abuse, domestic violence and community care, through fieldwork and empirical research. Main recent achievements are as follows. ◆Factors contributing to problematic behaviors and mental symptoms and their assessment: assessment of risk factors in child abuse cases, assessment of risk of addictive substance reuse, relationship between mental disorders/addiction and violence, study of factors contributing to behavioral addictions. ◆Support systems and methods: introduction of open dialogue method to Japan, ◆Study of social rehabilitation support system for drug addicts, trauma informed care for addiction, violence cases. Research on trauma informed care for addiction, abuse and violence cases, support tools for caregivers with addiction and their children, rehabilitation programs for domestic violence perpetrators

ライフコース疫学 (吉田 都美)

Life Course Epidemiology (YOSHIDA Satomi)
styoshida@md.tsukuba.ac.jp
<https://styoshida-lab.web.ac.jp/>



当教室では、広く公衆衛生的に重要な課題に対して、疫学的方法論により記述・分析し、課題解決や政策立案へ貢献することを理念としています。近年、いわゆる医療系ビッグデータの整備が急速に進んでいることから、これらの医療データを用いた薬剤疫学・臨床疫学研究のほか、予防医学やライフコース疫学の観点から、自治体の所管する乳幼児健診・学校健診などの、子どもの健診データの活用や情報還元を進めるとともに、環境省エコチル調査研究にも参画しています。バックグラウンドを問わず疫学や統計解析を実践的に学びたい方を広く募集していますので、ご興味があればぜひご連絡ください。

Our philosophy is to use epidemiologic methods to describe and analyze issues of broad public health importance and to contribute to problem solving and policy making. In recent years, the development of so-called "medical big data" has progressed rapidly, and in addition to pharmacoepidemiologic and clinical epidemiologic research using such medical data, we also promote the use and return of information from child health examination data, including infant and school health examinations under the jurisdiction of local governments, from the perspective of preventive medicine and life course epidemiology. We are looking for a wide range of people, regardless of background, who want to learn epidemiology and statistical analysis in a practical way.

公共健康政策 (宮脇 敦士)

Public Health and Health Policy (MIYAWAKI Atsushi)
amiyawaki_at_md.tsukuba.ac.jp
<https://www.a-miyawaki.com>



本研究室は、公平で質の高い持続可能な医療・健康政策をテーマに研究を行っています。医学と社会科学理論を基盤に、疫学や計量経済学などの手法を用いて政策課題を定量的に分析し、根拠に基づく政策立案 (Evidence-Based Policy Making) に貢献することを目指します。大規模な行政データや人口ベース調査を活用し、医療の適正化、医療の質や費用の構造的要因、健康やその格差に影響を与える政策、健康の社会的要因の評価に取り組みながら、医療・健康政策に資する社会的イノベーションの創出を目指しています。

Ensuring equitable, high-quality healthcare while maintaining sustainability under limited financial resources is a complex challenge—one that we are committed to addressing through science. Grounded in medicine and social sciences theories, our research employs rigorous epidemiological and econometric methods to quantitatively analyze policy issues and contribute to evidence-based policymaking. By leveraging large-scale administrative data and population-based surveys, we examine the structural factors that shape healthcare quality and costs, investigate the overuse of healthcare services, and evaluate the effects of various policies on health outcomes and disparities. Our goal is to drive innovation that improves healthcare systems and public health. We welcome those who are passionate about building a better society through the power of science.

医療経済学 (大久保 麗子)

Health Economics (OKUBO Reiko)

reiko-okubo@md.tsukuba.ac.jp

http://www.hcs.tsukuba.ac.jp/~health_policy/

<https://trios.tsukuba.ac.jp/researcher/0000004137>

近藤正英先生とともに費用効果分析と QOL 評価に関する研究を行っています。

費用効果分析については、慢性腎臓病、糖尿病、歯科口腔疾患、がんなど様々な領域における費用効果分析を行っています。文献レビュー、アウトカムの評価、費用の測定、経済モデルの構築、感度分析など、必要な作業を段階的に学ぶことができます。

QOL 評価については、EQ-5D-5L、EQ-5D-Y、KDQOL-36 などの質問紙を用いた研究を行っています。基本的な生物統計を用いて探索的な研究を行います。

I have conducted research on cost-effectiveness analysis and quality of life (QOL) evaluation with Prof. Masahide Kondo.

Regarding cost-effectiveness analysis, we have conducted analyses in various fields such as chronic kidney disease, diabetes, dental and oral diseases, and cancer.

You can learn the required tasks step by step, including literature reviews, outcome evaluation, cost measurement, economic model construction, and sensitivity analysis.

Regarding QOL evaluation, we have conducted studies using questionnaires such as EQ-5D-5L, EQ-5D-Y, and KDQOL-36. You can conduct exploratory research using basic biostatistics.

6 公衆衛生学特別演習（修士論文研究）

Dissertation in Public Health

公衆衛生学の基礎科目、専門科目の履修とともに、修士論文を作成するための研究活動も教育の一環として重視されます。研究指導グループのいずれかに属して研究を行うため、2年間修士論文研究を行います。在学中の2年間籍を置く研究指導グループを入学の時点で選択し、明確な研究目標を持つことが要求されます。

In the graduate education a special emphasis is placed on research training to achieve the educational purpose. Students are required to do their thesis research during the two years (standard) of educational term under the supervision of a faculty member. Therefore, at the time of admission, students are required to choose their supervisor, and to have a definite goal of the work.

■ 学会発表、原著論文発表

研究活動で成果が得られると、その成果を研究分野の専門家が集まる学会・研究会で、また原著論文（多くの場合は英語）として発表します。例年多くの学生が国内外の学会で研究成果の発表を行っています。なかには筆頭著者として原著論文を出す学生もいます。授業科目の履修だけでなく、修士論文教育の過程を通じて、プレゼンテーション能力、英語力を高める必要があります。

■ 修士論文審査

- 中間審査（2年次前半）：学生一人あたり、一名の主査、二名の副査が選任されます。学生は個別に審査を受け、研究結果について議論し、研究方針についてアドバイスを受けます。
- 修士論文提出（2年次 12月）：修士論文をまとめて、提出します。
- 最終審査（2年次 1月～2月）：多くの学生、研究員、教員の前で研究成果を発表します。
主査、副査による最終審査会が開催され、修士論文の合否が決定されます。

■ 優秀論文賞

修了者の中から、科目成績、研究論文評価、発表業績などを基に、優秀論文賞が選定され、修了式の際に表彰されます。

国際交流

International Exchange

筑波大学は、国際的な学術交流によって学術研究水準の向上を図り、国際的視野を持つ人材の養成を目指しています。この目的達成のため、海外の大学・研究機関・団体との交流協定を結び、学生や教員の海外派遣、単位互換、外国人教師の受け入れなどを行っています。また、外国人留学生の受け入れも積極的に進めています。ポルドー大学（フランス）、国立台湾大学（台湾）、サンパウロ大学（ブラジル）、カルフォルニア大学アーバイン校（米国）、ベトナム国家大学ホーチミン校、インドネシア生命医科学コンソーシアムなどと教育研究交流をすすめています。

The University of Tsukuba aims to cultivate human resources with a global view by promoting international exchange to improve academic standards. In order to accomplish this goal, we have established agreements with overseas universities and research institutes and offer a variety of activities such as delegating students and faculties abroad, a credit transfer system and accepting faculties from abroad.

We also further provide a support to the study for overseas students. In the Medical Branch including the Master's Program in Medical Sciences, education and research exchanges are enhanced ties with University of Bordeaux in France, National Taiwan University in Taiwan, University of Sao Paulo in Brazil, University of California, Irvine, in United States of America, Vietnam National University, Ho Chi Minh City, in Vietnam and Indonesian Consortium of Biomedical Sciences "KIBI" in Indonesia.

1. NTU-Tsukuba Long Distance Course

平成22年度より、インターネット回線を使った筑波大学と国立台湾大学の相互交信型の講義を行っています。この講義の目的は、国際的な研究交流の活性化、サイエンス分野でのコミュニケーション能力の育成、生命科学の有効利用法の探索で、コースは、国立台湾大学および筑波大学教員による講義、大学院生による論文発表と討論、応用に向けての討論からなっています。

Since 2010, National Taiwan University and University of Tsukuba have organized an online lecture with the mutual communication. The aims of these lectures are to promote the international academic and research exchanges, to improve students' scientific communication skills and explore the effective utilization of life science. This course is constructed of lectures by the faculty members of both National Taiwan University and University of Tsukuba, presentation and discussion by the graduate students and discussions about possible applications.

2. Summer Research Program in Tsukuba (@筑波大学)

東南アジア、南米などの協定校を中心とした海外の教育・研究機関より多数の学生がオンラインでの講義や教員とのディスカッションに参加し（Summer Research Program Online）、さらに、そこで選抜された学生が筑波大学へ招聘され、研究室での実習や講義（Summer Research Program Plus）に参加しました。また、プログラム期間中は、筑波大学大学院生がティーチングアシスタント（TA）として彼らの滞在を支援し、様々に交流しました。

Many students from overseas educational and research institutions, mainly partner universities in Southeast Asia and South America, participated in online lectures and discussions with our faculty members (Summer Research Program Online). In addition, we invited students selected from these students to Tsukuba to participate in practical training and lectures in our laboratories (Summer Research Program Plus). Additionally, graduate students from the University of Tsukuba supported their stay as teaching assistants (TAs), engaging in various exchanges during the program.

3. サマースクール (@国立台湾大学)

フロンティア医科学学位プログラムの大学院生が国立台湾大学に2週間派遣され、研究室での実習とCBTサマーコースの講義に参加しました。

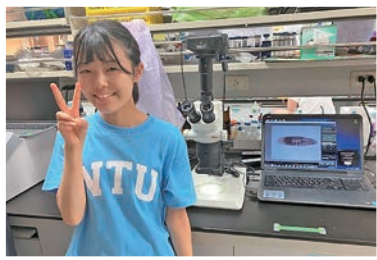
Students of Master's Program in Medical Sciences went to National Taiwan University for a short-term (2 weeks) visiting program and participated in the practices in the laboratories and CBT Summer Course lectures.



台湾での学びと再会

金丸 晴香

私は、自分の語学力を磨き、他の大学の最先端の研究に触れることで視野を広げたいという思いから、国立台湾大学のN+ サマープログラムに参加しました。2週間の台湾滞在中、英語を使って研究や実験のことをスムーズに思考できるようになったほか、普段の実験とは異なる技術も身につけることができました。滞在が終わる頃には、台湾のラボメンバーとすっかり仲良くなり、さらに中国語を勉強してまた台湾に行きたいという思いが芽生えました。翌年には同じ研究室で6週間の留学を果たし、サマープログラムで得た経験を基に、研究を発展させてまとめた成果を出すことができました。この貴重な経験が、今の研究生生活においても大きな支えとなっています。



国立台湾大学のサマープログラムに参加して

江角 結

私は一度海外で研究に挑戦してみたいという思いから、国立台湾大学 (NTU) の +N1 サマープログラムに参加しました。NTU の研究室に配属していただき、普段とは異なる環境で研究に取り組む貴重な経験をすることができました。英語で研究内容を理解するところから始まり、実験手技・原理の習得、さらに結果を英語でディスカッションすることは想像以上に大変でしたが、TA の方をはじめ多くの人に助けられ、最後までやり遂げることができました。



英語力が足りず、理解が追いつかなかったり、自分の考えを十分に伝えられなかったりと悔しい場面も多かったです。しかし、ポイントを押さえて質問することで理解が深まったり、ディスカッションを通してこれまでにない視点や考え方に触れられたりする瞬間があり、そのたびにとても楽しく、挑戦してよかったと強く感じました。

また、本プログラムには NTU や京都大学など複数の大学から学生が参加しており、初めて出会う学生たちと交流できたことも大きな刺激となりました。今回得た学びや出会いを大切に、今後も挑戦を続けながら成長していきたいと考えています。

台湾サマープログラム参加を通して得たこと

大澤 昂歩

私はこれまで海外の大学で学んだり研究する経験がなかったため、同年代の学生がどのように研究に取り組んでいるのかわからない、また英語を使って新しい環境に挑戦したいと考え、国立台湾大学 (NTU) の +N1 Biotechnology Program に参加しました。私が配属された研究室では培養細胞を用いた研究が行われており、普段マウスを使って実験している私にとって、台湾での実験は全てが初めての経験でした。しかし、自身の専門とは異なる研究分野に触れたことで、新しい知識を得られただけでなく、研究に対する視野も大きく広がったと感じています。また、現地の学生が熱意を持って研究に取り組む姿勢に大きな刺激を受けました。将来の進路や研究について語り合う中で、自分自身のキャリアについても深く考えるきっかけとなり、たった2週間とは思えないほど充実した時間を過ごすことができました。滞在中は現地の研究室のメンバーが美味しいお店やナイトマーケットなど、様々な場所に連れて行ってくれたおかげで、現地の生活も楽しむことができました。台湾で出会った研究室のメンバーはもちろん、一緒にプログラムに参加した京都大学の学生とも仲良くなり、とても思い出に残る経験になりました。



「やってよかった、SRP TA」

小針 悠斗

私は、TAをやってみようという思いと、自分のラボ以外の人と英語を使ったコミュニケーションをとりたいという思いから、Summer Research ProgramのTAを引き受けました。普段英語を使う機会といえば、ラボ内で実験内容について話すときや、プレゼンテーションをするときが多く、いわゆる雑談のようなものはあまりありませんでした。しかし本プログラムでは参加者の留学生と、実験や研究内容のほかにも交流する時間があり、そこでは日本のことを聞かれたり、逆に相手の国のことについて聞いてみたり、ということがありました。その難しさ、異文化について知ることの楽しさを感じられたことは、非常に良い経験だったと思います。SRP TAは普段の自分の研究生生活の中で行うもので、自分のラボ、または日本を離れて行うものではありません。短期留学でも2週間は日本を離れますし、それはそれで良い経験になることは間違いのないと思いますが、修士では研究に加え講義や就職活動など、様々なことが重なってなかなか時間を取るのは難しいのではないのでしょうか。SRP TAは、よりカジュアルに異文化交流を体験したい、そんな人におすすめです。



台湾で見つけた自身の課題

原 彩美

海外の研究室を経験し、英語を使わなければならない環境に身を置くことで英語力も向上させられるのではと感じ、このプログラムに参加しました。最終日のプレゼンでは、英語でなかなか自分の想いを伝えられない歯痒さもあり、自分の英語力の未熟さに身染みて感じたりもしました。今の自分が海外に出たときどの位思いを伝えられるのか、それを知るよい機会にもなりました。その一方で、大切なことは躊躇せずに自分の意思を伝えようとする思いなのだと感じました。今の自分にはできないと決め付けず、まずは一歩踏み出してみる…その挑戦が自分を成長させるのだと思います。

NTUの学生の皆様の優しさに触れ、毎日のように食事に連れて行っていただいたりなど、プログラム以上の経験もありました。英語を通して多く人と出会い、台湾の文化を知り、視野も広がりました。このプログラムで得た経験は、今の研究生生活でも大きな支えとなっています。



NTU Summer Programを通して学んだこと

佐藤 悠樹

私は、英語能力の向上と異分野研究への挑戦を目的に本プログラムに参加しました。大学四年間、多くの留学生がいる環境にも関わらず、交流することを拒んだ私にとって、英語のみの環境に飛び込み、さらに研究を行うことは大きな挑戦でした。

案の定開始当初は、言語の壁を感じて受動的にしか行動できませんでした。生活面のTAや研究室のメンバーが積極的にコミュニケーションをとってくれ、実験の合間に飲食店や観光地に連れ出してくれたおかげで徐々に関係が築け、自ら進んで交流し議論もできるようになりました。この結果、研究も日常生活もとても充実したものとなり、台湾の人の温かさを感じると共に能動的な姿勢の重要性も痛感しました。

当初の目的を達成できただけでなく、異文化交流によって違う価値観に触れたこと、そして何より、共に高め合える友人を得た本プログラムへの参加は、私に新たな視点を与え、成長させてくれる良い機会となりました。



Summer Research Programに参加して

川島 美楓

英語を活用して新しいことに挑戦したいと思い、本プログラムのTAに応募しました。初めての顔合わせでは、他のTAたちの流暢な英語を前に「私が役に立てるのか」と不安を感じたこと覚えています。話し合いが始まると、当初は議論についていけず、ただ参加しているだけの状況が続きました。しかし、周りが分けて隔てなく話を振ってくれ、自分でも「できることからやってみよう」と気持ちを切り替えられたことで、段々と自分の役割を見つけられるようになりました。

プログラム後半の留学生との交流では、水族館での経験が特に印象的でした。留学生の一人から「一緒に回ろう」と誘われた際、最初は不安がりましたが、展示を見ながら会話を重ねることで緊張が和らいでいきました。カフェで語り合った時間はかけがえのないものです。最後に「今日の観光が一番楽しかった」と言ってもらえたことで、このプログラムに参加した意味を見つけられたように思います。

英語力そのものの向上以上に、語を楽しく姿勢や言語の壁を越えたい先に広がる世界の魅力を実感できたことが、自分にとって大きな財産となりました。今後もこの経験を糧に、多くの人々との努力を続けていきたいです。



Long Distanceで海外留学を疑似体験しよう!

赤羽 勇唱

英会話スキルを磨きたいけれど、海外留学に踏み切る自信はない…。そんな方にお薦めの「English Discussion and Presentation on Medical Sciences (通称 Long Distance course)」についてご紹介いたします。本講義の前半は、国立台湾大学 (NTU) および京都大学と共同開催され、テレビ会議システムを利用した論文発表やディスカッションが行われます。他大学の学生と交流できる機会是非常に貴重であり、そのレベルの高さから多くの刺激を受けました。講義の後半では、選んだ論文ごとに学内でグループを作り、英語でプレゼンテーションを行います。

本講義は多くの留学生が履修しており、論文の精読やディスカッション、スライド作成に係るコミュニケーションは全て英語で行われました。テクニカルタームも多く難解な論文でしたが、お互いの理解を補填し合い、時には雑談も交えながら楽しく進めることができました。短い時間ではあったものの、ディスカッションを通じて英会話スキルが鍛えられただけでなく学内に留学生の友人もできたことで、海外留学の疑似体験ができたように感じています。



インターンシップ

Internship

病院、一般企業、医学研究機関、社会・福祉施設などに出向き、就業体験学習を行います。体験学習を行う施設は学生が自ら選択し、交渉して申し込みます。本科目の実施施設として認められるかどうかは、インターンシップの内容と実施期間からインターンシップ委員会が総合的に判断します。社会での体験をもとに、医科学に求められている役割について考察します。

Students will get out of campus and study in hospitals, medical research institutes, welfare facilities, local governments and so on. After the working experiences, missions and responsibility of medical sciences and public health in the society will be discussed.

■インターンシップ実施先例

研究所・公的機関	一般企業
理化学研究所 食品総合研究所 国立研究開発法人産業技術総合研究所 国立研究開発法人物質・材料研究機構（NIMS） 国立環境研究所 国立精神・神経医療研究センター 国立成育医療研究センター 茨城県警察本部 科学捜査研究所 国立研究開発法人日本原子力研究開発機構 生理学研究所 化学及血清療法研究所 NTT研究所 岩手県生物工学研究センター 国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構（農研機構） 国立スポーツ科学センター 公益財団法人実験動物中央研究所 公益財団法人茨城県理学療法士会 荒川区健康部健康推進課 茨城県保健医療部健康推進課 国立がん研究センター	参天製薬株式会社 久光製薬株式会社 大正製薬株式会社 エーザイ株式会社 住友重機械工業株式会社 日本調剤株式会社 富士知能株式会社 株式会社明光ネットワーク ジャパン 株式会社ビードットメディカル 第一三共株式会社 テルモ株式会社 株式会社東芝 ノバルティスファーマ株式会社 マンユライフ生命保険株式会社 竹田理化工業株式会社 株式会社シノテスト 株式会社新日本科学PPD 株式会社リニカル 株式会社リブ・コンサルティング 総合メディカル株式会社 パナソニックヘルスケア株式会社 富士通株式会社 株式会社カネカ 日本電工株式会社 MSD株式会社 小野薬品工業株式会社 株式会社近畿大阪銀行 株式会社シャンソ化粧品 株式会社東洋環境分析センター
大学・医療機関	海外の大学・研究所
筑波大学附属病院 筑波大学附属病院：つくばヒト組織バイオバンクセンター 筑波大学附属病院：放射線治療品質管理室 筑波大学附属病院：腫瘍内科 筑波大学つくば臨床医学研究開発機構（T-CReDO） 筑波メディカルセンター病院 筑波記念病院 茨城県立こども病院 群馬大学重粒子線医学研究センター 京都大学医学部附属病院 京都府立医科大学 北海道江差保健所 土浦訪問看護ステーション 聖路加国際大学 牛久愛和総合病院	国立台湾大学 天津医科大学 バンコク国立Mahidol大学 デンマーク工科大学 NFLグリーンベイパッカーズ アレルギ―臨床免疫研究所（バングラディシュ） WHO 東南アジア事務所 Africa Population Health Research Center (Kenya) Cho Ray Hospital (Vietnam) Tianjin Medical University Cancer Institute and Hospital University of Bordeaux

■報告会

インターンシップ終了後は、報告会を行い、各インターンシップ先での体験を報告します。インターンシップ先での体験を通して学んだことなどを発表し、各自のキャリアを考える機会にするとともに、学生同士でさまざまな情報を交換する場にもなっています。

仲野 日向子 (行先：東洋環境分析センター)

私は地元の福岡で就職したいという想いと今まで学んできた臨床検査のスキルが医療系以外の業界における検査・分析を行う企業においてどの程度活かせるのかを知りたいという想いから自ら受け入れ先を探し、東洋環境分析センターにて行われたインターンシップに参加しました。この会社では、水質や土壌、食品など様々な環境に関連したものの検査をしており、その検査の一部を実際に体験したり、検体採取のためのフィールドワークを行ったりしました。本インターンシップを通して私が大学で学んできたのは臨床検査ではあったものの、その検査に関する知識を他の分析の職種にも活かすことができそうだということがわかりました。この経験で自身の就活における選択肢が広がったと思います。



Yaowaluk Buanill (行先：JAEA)

During my summer internship at JAEA, I went with the purpose of studying the Particle and Heavy Ion Transport code System (PHITS), focusing on RTPHITS for radiation treatment planning, the weight window method for simulation efficiency, and ICRP phantom models for dose calculation. However, by the end of the internship, I gained much more than just knowledge in the medical physics field. I also learned about computer software, which is incredibly valuable in today's world.

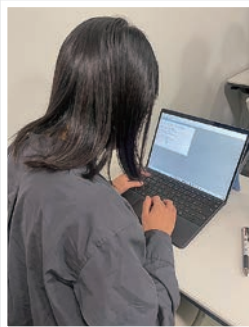
Beyond technical skills, I experienced life in Tokai's countryside and observed the daily routines of researchers in a professional institute. These are experiences I would never have had if I had stayed in Tsukuba and avoided the challenge of going on an internship as an international student. This unique opportunity not only deepened my knowledge but also broadened my cultural perspective and strengthened my aspiration to become a researcher and professor.

I am deeply grateful to my research advisor, my internship class sensei, and the researchers at JAEA for arranging this experience and making it possible for a non-Japanese speaker like me.



河村 結花 (行先：第一三株式会社)

私は医薬品開発に対してデータの側面から携わることに興味があり、また、実際の業務内容に近づけた課題解決型のグループワークを行うことに魅力を感じ、第一三株式会社のインターンシップに参加しました。2日間のインターンシップを通して、データの扱い方や根拠を立てて考えることの難しさを体験することができました。社員の方からグループワーク全体を通してフィードバックをいただいたことで、職種に求められる能力が分かり、また、自身の強みが明確になりました。今後の学校生活や就職活動に役立てていくことができる、貴重な経験を得ることができました。



張 沁悦 (行先：日清食品株式会社)

私は、日清食品株式会社のインターンシップに参加しました。インターンシップは、自分が興味を持つ社会の仕組みについて、企業の方々から直接学べる最後の機会です。そこで、私は製菓業界を志していましたが、普段口にする食品のフレーバーを決めるのはどんな人たちだろうと興味湧き、食品会社のマーケティング職のインターンに応募しました。

横浜のカップヌードルミュージアムにて開催され、まず、仕事内容の講義を受け、座談会に参加しました。その後新規プロジェクトを検討するグループワークを行い、最後にミュージアム内を見学しました。

強く印象に残ったのは、マーケターが「担当ブランドの社長」として、企画はもちろん、宣伝監修や社長交渉まで行うこと、そして「やりたい」と思ったことを実現しチームで磨き上げる社風です。グループワークや座談会を通じ、一人一人の情熱と推進力を強く感じました。このような姿勢は食品会社のマーケターに限らず、きっと他業界でも必要とされるものだと思います。この経験を大切に、どんな仕事でも楽しむ姿勢を持ちながら、やりたいことを実現するべく果敢に挑戦したいと思います。



小野瀬 綾 (行先：株式会社ビードットメディカル)

研究開発に興味があったこと、私自身ががんセンターで陽子線治療に関する研究を行っており、以前がんセンターと共同研究を行っていた株式会社ビードットメディカルに縁があったためインターンシップに参加しました。

実施内容としては、小型陽子線照射装置開発に関する研究を行いました。小型化する上で問題となる点を検討し検証を重ねる作業を社員の方々と密にコミュニケーションをとりながら取り組みました。インターンシップを通じ、研究開発職に関する理解を深めると共に現場で必要な課題解決能力や専門知識を身に付けることができました。今回体験した貴重な経験を今後の研究活動や就職活動に活かしたいと思います。



小谷 千香子 (行先：テルモ株式会社)

私は医療ビジネスに関心があり、テルモ株式会社で企画・営業系のインターンシップに参加しました。

テルモ株式会社は、心臓血管治療をはじめとする、多様な医療機器を製造・販売するメーカーです。インターンシップは、テルモメディカルブラスレッツという、医療現場が忠実に再現された施設で行われました。医療従事者を対象としたトレーニングを目的とする施設で、実際のカテーテルと人体模型を使った治療体験や、医療機器の営業体験をしました。

医療機器メーカーのビジネスは、商品の販売のみでなく、導入後の適正使用の指導やメンテナンスといったアフターフォローにも及びます。中でも営業は、先端医療機器と医療従事者、および患者をつなぐ存在であると感じました。筑波大学で学んだ医学の知識や医療現場への理解を活かし、企業で病院の外から医療に貢献する、という私にとって新たな選択肢を得ることができ、進路選択に役立つ大変貴重な機会となりました。



桂 美貴 (行先：農研機構中央農業センター)

私は最先端の食に関する研究開発技術を学びたいと思い自ら受け入れ先を探し、農研機構中央農業センター飼料調整グループにて行われたインターンシップに参加しました。この研究グループでは、畜産の餌である発酵飼料の研究をしており「微生物の取り扱いと発酵飼料の調整」をテーマに、実際の業務を所内の方とともに行いました。また所内の会議に参加し、交渉力や周りを巻き込む力を磨いていく必要性を実感しました。

本インターンシップを通して新たな実験手法や基礎知識を習得し、視野を広げることができただけでなく、働く上での意識やスキルも学ぶことができました。この経験を今後の研究生活や将来に活かしたいと思います。



中家 亜美 (行先：国立がん研究センター)

私は国立がん研究センターにて1週間のインターンシップ活動を行いました。インターンシップ先に国立がん研究センターを選択した理由は、将来なりたい職業である医学物理士が多く在籍している施設に行くことで業務内容を理解し、自分の将来像を明確にするためです。

5日間で放射線治療現場における放射線技師と医学物理士の業務の見学を行いました。また、中央病院と東病院に行くことによって施設間の雰囲気の違いを実感することができました。

国立がん研究センターで働かれている方々の専門性の高さや人柄の良さを体感することができました。

今回のインターンシップを通して医学物理士の業務への理解が深まり、医学物理士になりたいという想いがより一層強くなりました。また、チーム医療を近くで見ることができて、肌で感じる事ができ、とても有意義な時間となりました。



齋藤 真衣子 (実施先：荒川区健康部健康推進課、茨城県保健医療部健康推進課)

私は行政保健師として地域住民の健康増進に携わりたいと考えており、異なる自治体における保健師の業務の特徴を学ぶために自ら受け入れ先を探し、インターンシップに参加しました。荒川区健康部健康推進課では保健所の保健師が個別ケースワークも行っており、地域住民の声を健康増進計画に活かす取り組みがされていました。茨城県保健医療部健康推進課では、関係機関と連携しながら県全体の健康課題を捉えていました。

インターンシップに参加し、同じ保健師であっても健康増進への関わり方が異なることや、様々な場面でコミュニケーション力が必要であることを学びました。学んだことを、今後の学校生活や就職活動に活かしていきたいです。



金井 瑞季 (行先：筑波大学附属病院 放射線治療品質管理室)

私は放射線を用いたがん治療に興味があり、将来的に医学物理士として臨床現場で働くことを考えています。そのため、「医学物理士」と「臨床」をキーワードに、筑波大学附属病院放射線治療品質管理室をインターンシップ先に選びました。当施設では、X線による治療だけでなく、陽子線治療も見学可能な点が選定の決め手でした。

インターンシップを通して、臨床の医学物理士は治療計画から品質管理まで、その業務は多岐に渡ることを知りました。医学物理士に要求される医学と物理学の幅広い知識を実感できたことは、今後の大学院生活において大きな収穫だと考えます。明確となった課題解決に取り組むべく、今後の学習・研究活動に励んでいきたいです。



就職支援活動(キャリアパス)

Career Path Program

大学本部が実施する就職支援活動を補完するために、「より院生に密着した支援活動」を実施しています。平成20年度からはキャリアパス教育としてカリキュラム化し、年数回の就職支援・キャリアパスセミナーを開催しています。

Since 2008 we have provided career path guidance as part of our curriculum, as well as job assistance and biannual career path seminars.

■キャリアパスセミナー

1. 目的

- (1) 自身の修士論文研究の目的や学術的社会的意義を領域外の人に説明できる。
- (2) 自身の将来計画の説明ができ、その実現のための具体的方策を提言できる。
- (3) 自身のキャリアについて、社会人と意見交換することができる。

2. 内容

各方面で活躍されている卒業生による講義およびグループディスカッションなどの実習を実施します。どのような医療人を目指すべきか、そのために修士課程で何をどのように研究・学習すべきかを考える機会とし、さらに他人に口頭でも記述でも伝えられるように伝達技術を磨く機会とします。

- (1) 卒業生による体験談（キャリアパス形成）講義
- (2) 卒業生・先輩・教員・同級生とのグループディスカッション
- (3) GLidDシステムを用いたライティング演習

3. 概要

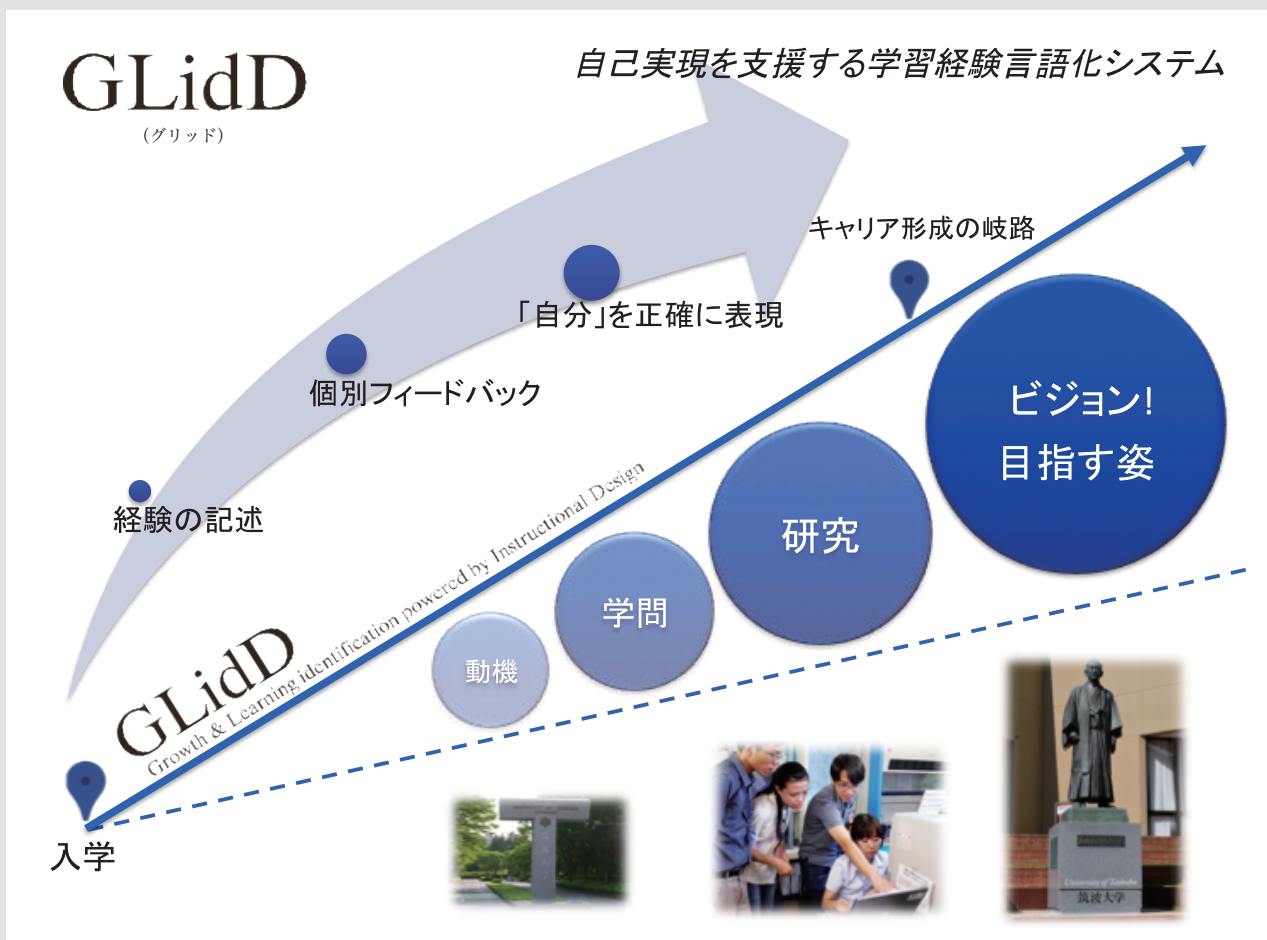
上記内容のキャリアパスセミナーを年数回の講義【医科学セミナーⅤ（キャリアパス）】として実施します。多種多様なキャリア構築に対応できるように、さまざまな分野の卒業生にご協力いただきます。本学位プログラムは、前身の医科学研究科・フロンティア医科学専攻も含めると40年を超える歴史を誇り、若手からベテランまで、他医学系大学院にはない、多くの卒業生をもちます。本セミナーではその特色を最大限に活用します。セミナー担当教員は卒業生を中心に構成されており、希望キャリアの講師が招聘されなかった場合にも、気軽に相談し、同期生などを紹介してもらえる体制となっています。



■キャリアの実現を支援する言語化促進システム GLidD

大学院課程で学ぶ経験はこれからの長い人生の先行投資です。だからこそ、学生が学問や研究を通じて行ってきた経験を自らの認識と言語で正確に表現し、「自分のものにしていくこと」が必要になります。

本プログラムではオンラインシステムであるGLidDを通じて、学生が修得した学び・経験、また普段言語化して認識する機会が限られている自らのビジョンや将来のキャリアイメージを言語化することができるよう支援します。



■卒業生ネットワークプロジェクト

幹事：本多健太郎さん（2013年卒）

「大学と学生にとって身近で、社会に貢献できる同窓会を」という卒業生の思いから、2011年に同窓会／卒業生ネットワークを再結成しました。このプロジェクトの活動の一つに、卒業生によるキャリア・サポート制度があります。本制度では、卒業生という身近なメンターを紹介し、大学院生活や就職活動などの相談ができるようにするべく、卒業生ネットワークと教員が一体となって現役学生をサポートしています。



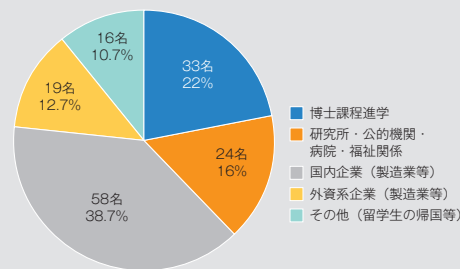
卒業生の進路

Career Options

毎年約60名の学生が修士の学位を取得し、博士課程への進学や企業への就職などさまざまな進路に進んでいます。

Every year, about 60 students from Master's Program in Medical Sciences earn master's degree and their career options vary from continuing their studies in the doctoral program to working in the industries.

R4~R6年度修了者（150名）進路先内訳



R4~R6年度修了者の進路先一覧

博士課程進学

筑波大学大学院(28)
大阪大学大学院
京都大学大学院(2)
慶應義塾大学大学院
東京科学大学大学院

国内企業（製造業等）

BIPROGY	新日本科学PPD(3)
H.U.グループホールディングス	シンプレクスホールディングス
KMバイオロジクス	全国共済農業協同組合連合会
MIRDIS	(JA共済連)
アークレイ	田辺ファーマ
旭化成ファーマ	(旧：田辺三菱製薬)
アサヒグループ食品	中外製薬
アステラス製薬	中外臨床研究センター
イーピーエス	テルモ
医学生物学研究所(2)	東京エレクトロン
伊藤園	日東紡績
岩井化学薬品	日本電気
ウエルシア薬局	ハウス食品
エイツーヘルスケア(2)	久光製薬
エーザイ	富士通
エムスリー	富士フイルム富山化学
小野薬品工業	富士フイルム和光純薬
花王	ポッカサッポロフード&ビバレッジ
シャンソン化粧品	マルホ(2)
テクノプロ テクノプロR&D社	メディサイエンスプランニング(2)
日立ハイテック	メビックス
キーエンスソフトウェア	
キャノンメディカルシステムズ	
興和	
サザンウィッシュ	
沢井製薬	
三和化学研究所	
シミツホールディングス(6)	

研究所・公的機関・病院・福祉関係

筑波大学附属病院(8)
足立区役所
茨城県庁
医療法人社団筑波記念会 筑波記念病院
公益財団法人がん研究会有明病院
国立研究開発法人 新エネルギー・産業技術総合開発機構
国立研究開発法人 農業・食品産業技術総合研究機構
総合病院国保旭中央病院
蘇州森茂診療所
千葉大学医学部附属病院
地方独立行政法人大阪健康安全基盤研究所
東京医科大学茨城医療センター
東京慈恵会医科大学附属病院
東京大学医学部附属病院
東邦大学医療センター大森病院
東北国際病院（中国）
横浜市立大学医学部附属病院

外資系企業（製造業等）

GEヘルスケアアジア
IQVIAサービスシーズジャパン
IQVIAソリューションズジャパン(2)
PwCコンサルティング合同会社
アクセンチュア
アストラゼネカ株式会社
アドバンテック
アバナード
アフラック生命保険
サイネオス・ヘルスクリニカル(2)
ジョンソン・エンド・ジョンソン
日本イーライリリー
日本メトロニック
バイオテックグローバルジャパン
ヤンセンファーマ
ラボコープディベロップメントジャパン
ロシュ・ダイアグノスティクス

※（）は複数人いる場合の人数を示す。



最新の情報はフロンティア医科学学位プログラムホームページをご覧ください。

入学試験まで

Before Admission Examination

各研究グループのホームページより情報入手し、オープンキャンパス、研究室訪問を通じて、志望研究分野を決定します。

Use websites from individual research groups, laboratory visits and open campus day visits to select a field of major.

■フロンティア医科学学位プログラムのトップページ / Front Page of Master's Program in Medical Sciences

<http://www.md.tsukuba.ac.jp/FrontierSite/>

■公衆衛生学学位プログラムのトップページ / Front Page of Master's Program in Public Health

<http://www.md.tsukuba.ac.jp/mp/>

各プログラムの最新情報、各研究グループの情報が入手できます。

You may obtain the latest information about the programs and news from each research group.

■オープンキャンパス / Open Campus for Prospective Graduate Students

例年、オープンキャンパスが春夏2回開催されます。入試説明会ではフロンティア医科学学位プログラム・公衆衛生学学位プログラムについての詳細な情報や、在学生・修了生の体験談を聞くことができます。さらにはポスター発表形式での各研究室の説明、及び研究室訪問が行われます。各研究グループのポスターはホームページよりダウンロードすることができます。

Open Campus days for prospective graduate students are held annually in April and June. You will get more information about these Master's Programs and have a chance to hear stories from both current and graduated students at a briefing session. Poster presentations explain the work of each laboratory and the laboratories are open for visits. Posters of research groups are available and can be downloaded at home page.

2026年度 オープンキャンパス 日程 2026 Open Campus Days

●フロンティア医科学

第一回 2026年4月25日(土) Saturday, April 25, 2026

第二回 2026年6月20日(土) Saturday, June 20, 2026

●公衆衛生学

開催日は決定次第ホームページに掲載します。

https://www.md.tsukuba.ac.jp/mp/examination/open_campus.php



■研究室訪問 / Laboratory Tour

各研究グループでは個別での研究室訪問を随時受け入れています。各研究室の研究内容、及び雰囲気を知ることができま
す。なお訪問前には、必ず研究グループ長（5. グループ紹介参照）に連絡をとってから訪問しましょう。

Each laboratory welcomes you for individual visits. You will be able to learn about the research being conducted in the laboratories and
you can talk with members of the research group there. Please contact to a head of the research group that you are interested in prior to the
visit.

■志望研究分野が決定したら / When deciding on a Major

志望研究分野の研究グループ長に連絡をとり、その旨を伝えましょう。
一方で、入学後に所属研究室を決めることも可能です。但しこの場合、入学試験時点で志望者が集中した研究分野では受け入
れが困難になる場合があります。

Please get in touch with the head of the research group you are interested in joining about when to decide on a major. You may decide
your major after you are enrolled, however, some fields may become very competitive after the entrance examination.



筑波大学 大学院 人間総合科学学際院
筑波大学 University of Tsukuba
フロンティア医科学 学位プログラム
Master's Program in Medical Sciences

2020年度筑波大学フロンティア医科学学位プログラム

WEB OPEN CAMPUS

フロンティア医科学 WEBオープンキャンパス

研究室見学会開催 進学相談会開催

12 入学試験

Admission Examination

フロンティア医科学学位プログラム・公衆衛生学学位プログラムへの出願資格は、(1) 大学を卒業した者、およびその年度に大学卒業見込みの者、(2) 外国においてその学校教育における16年の課程を修了した者、およびその年度に修了見込みの者、(3) 上記と同等の学力があると認められる者、ならびに文部科学大臣の指定を受けた者です。出願者の中から、成績証明書、筆記試験および口述試験の結果を総合的に判断して、入学候補者を決定します。筆記試験は、フロンティア医科学学位プログラムは一般学生については英語・専門科目によって、社会人特別選抜学生については英語・医科学に関連する小論文課題によって行います。公衆衛生学学位プログラムは、英語・専門科目によって行います。口述試験は、出身領域に関連した専門的な知識と、本人の志望等につき試問します。詳細については、その年度の募集要項を参考にしてください。

The following groups of applicants will be considered for these programs. (1) Graduates of university (4 year course) and soon-to-be graduates (bachelor) in April of that year. (2) Individuals who have finished a total of 16 years of school education in foreign countries and meet the requirement of a bachelor degree. (3) Individuals who are approved and deemed to have the same level of knowledge and learning ability with a bachelor degree by the Ministry of Education, Science and Culture. Applicants have to pass paper and oral examinations given by a faculty member in the master course. Submission of school score records to the university is required. Applicants must also satisfy an adequate knowledge of English or Japanese capabilities, by which they can pursue academic and/or professional backgrounds appropriate for specialization in that field.

8月実施入試

- 出願受付 2026年7月上旬～中旬
- 試験日程 2026年8月25日(火) 筆記試験・口述試験
- 合格発表 2026年9月中旬

1-2月実施入試

- 出願受付 2026年12月上旬～中旬
- 試験日程 2027年1月27日(水) 筆記試験・口述試験
- 合格発表 2027年2月中旬

■試験科目

一 般		社 会 人	
筆 記 試 験	英語・専門科目	筆 記 試 験	英語・専門科目
口 述 試 験	個別面接	口 述 試 験	個別面接

※筆記試験の英語は、TOEFL、TOEICまたはIELTSの点数を評価する。

■募集要項、過去問の入手方法

- ・募集要項・出願書類はすべてweb版になっています。
- ・筑波大学ホームページ (https://www.ap-graduate.tsukuba.ac.jp/course/chs/igaku_master) から出願してください。
- ・過去問は下記のページよりダウンロードしてください。
(日本語版) <https://www.tsukuba.ac.jp/admission/graduate-overview/past-exam/index.html>
(英語版) <https://www.tsukuba.ac.jp/en/admissions/grad-exam/past-exam/>

■試験対策

オープンキャンパスにて、在校生から勉強方法や体験談を聞くことができます。

奨学金・TA制度

Scholarship

大学院生の経済的支援として、つくばスカラシップや日本学生支援機構などの奨学金制度、授業料の免除制度、ティーチングアシスタント制度などがあります。いずれも、学業・人物ともに優秀で、かつ健康であって経済的理由により学資の支弁が困難であると認められた者が対象となっています。

We provide various kinds of financial support for students such as Tsukuba Scholarship, Japan Student Services Organization Scholarships, tuition exemption and employment as teaching assistants. In addition to outstanding academic performances, the criteria are based on financial need.

■つくばスカラシップ／Tsukuba Scholarship

筑波大学では安心して勉学に専念できる環境を確保することを目的に、筑波大学独自の奨学金制度「つくばスカラシップ」を創設し、緊急時の学資支援、留学生に対する経済支援および学生への海外留学支援を行っています。詳しくは筑波大学ホームページ (<https://www.tsukuba.ac.jp/campuslife/support-scholarship/scholarship-tsukuba/>) を参照して下さい。

We have established our own financial award, 'Tsukuba Scholarship' to provide financial support for international students, overseas study assistance and emergency support aid and so students can devote themselves to their studies without any anxiety. For more details, please access to University of Tsukuba at <https://www.tsukuba.ac.jp/campuslife/support-scholarship/scholarship-tsukuba/>



■日本学生支援機構奨学金

フロンティア医科学学位プログラムまたは公衆衛生学学位プログラムの入学試験に合格し、奨学金を希望する方は予約採用の手続きをすることができます。在学中に申請することもできます（募集は原則として年1回）。詳しくはフロンティア医科学学位プログラムホームページ (<https://www.md.tsukuba.ac.jp/FrontierSite/support/scholarship.html>) の「予約採用手続きについて」および日本学生支援機構のウェブサイト (<https://www.jasso.go.jp/>) を参照して下さい。また第一種奨学金には、修了時の成績による返還免除制度があります。



■地方公共団体及び民間奨学団体奨学金／Scholarship by Local Governments and Private Foundations

奨学生の申請は、大学を通して申請するもの、直接学生個人が申請するものがあります。募集内容は毎年変わりますので、最新の情報は筑波大学ホームページ (<https://www.tsukuba.ac.jp/campuslife/support-scholarship/scholarship-links/>) を参照して下さい。

Scholarships provided by local governments and private foundations are divided into two categories; scholarships applied for through the university, and scholarships applied for individually. Individuals who wish to apply for these scholarships are requested to contact the academic service office. The application changes every year and check with the updated information through <https://www.tsukuba.ac.jp/campuslife/support-scholarship/scholarship-links/>. Please access to scholarships for privacy-financed international students at <https://www.tsukuba.ac.jp/en/admissions/financial-scholarships/>



■入学料および授業料の免除／Entrance Fee Exemption and Tuition Waiver

経済的理由によって納付が困難であると認められる者、その他やむを得ない事情があると認められる者に対し、入学料又は授業料の全部若しくは一部の免除又は徴収の猶予をする制度があります。詳細は筑波大学ホームページ (<https://www.tsukuba.ac.jp/campuslife/support-scholarship/>) を参照して下さい。

Entrance fee exemptions and tuition waivers that exempt the entire or half of the tuition fee may be granted to individuals who have difficulty making payments due to financial problems or some other unavoidable circumstances. Please access to <https://www.tsukuba.ac.jp/en/admissions/financial-exemption/details>.



■ティーチングアシスタント制度／Teaching Assistant

大学院生はティーチングアシスタントとして、授業の補助業務を行うことができます。従事した時間数に応じて大学から給与が支給されます。

University of Tsukuba employs graduate students as Teaching Assistants and pays them salaries to have them assist faculty members in classes and research.

14 学生生活

Students' Life

■学生宿舎 / Student Residence Halls

本学の学生宿舎は学内の南北に位置し、平砂・追越・一の矢・春日の4つのエリアに居住棟が68棟〔平砂6棟、追越17棟、一の矢31棟（うち5棟が世帯用）、春日3棟（うち4室が世帯用）、グローバルヴィレッジ11棟〕があり、総定員は3,821名です。なお、グローバルヴィレッジは、平成29年4月から運用が開始された国際交流を重視した日本人と留学生の混住シェアハウスタイプの学生宿舎です。

各居室タイプの設備や宿舎費等については、筑波大学ホームページ (<https://www.tsukuba.ac.jp/campuslife/support-healthlife/>) をご覧ください。

The residence hall is located at the North / South parts in the campus with 68 residences spread across 4 areas; Hirasuna (6), Oikoshi (17), Ichinoya (31 including 5 family dorms) and Kasuga (3). *The total capacity: 3,821 residents

In addition, Global Village, shared accommodations for both Japanese and international students studying at the University of Tsukuba, commenced its operations on April 1, 2017. It has been established as a part of the Global Residence Development Project that aims to promote internationalization on campus.

For the further information regarding rooms and residence fee, please refer the web page below. (<http://www.tsukuba.ac.jp/en/students/campus-life/accommodation>)



■アパート等 / Off-Campus Housing

大学の周辺には多くのアパート、マンション等があり、種類も豊富です。

平均的なアパート(6畳・台所・バス・トイレ付き)の家賃は、月額約35,000円～50,000円位です。なお、入居時に家賃の1～2か月分相当の敷金・礼金・仲介手数料などが別途必要になります。

There are many apartments around campus.

The room for single person (approx.10m²) in Tsukuba: ¥35,000 to ¥50,000

*rooms with bath, toilet and kitchen.

Prior to moving in, it is customary to pay a rental deposit (shikikin), gratuity fee (reikin) and commission fee, equal to about one to two months' rent, in addition to the rent.



15 情報発信

Official X and Facebook



フロンティア医科学学位プログラムでは、X (<https://x.com/FrontierMedSci>) や facebook (<https://www.facebook.com/Tsukuba.FrontierMedSci>) などインターネット上のソーシャルネットワークサービス (SNS) を利用して、プログラムの活動や大学院生の研究成果を広く発信しています。

フロンティア医科学学位プログラムホームページ

<http://www.md.tsukuba.ac.jp/FrontierSite/>

公衆衛生学学位プログラムホームページ

<http://www.md.tsukuba.ac.jp/mph/>

医学医療系ホームページ

<http://www.md.tsukuba.ac.jp/>

医学学位プログラムホームページ

<http://www.md.tsukuba.ac.jp/gradmed/>

 <p>OVERVIEW 概要</p> <p>ようこそフロンティア医科学へ！フロンティア医科学は、最先端の医科学教育・研究を行う大学院「修士課程」です。</p> <p>プログラムリーダーからのメッセージ ></p> <p>人材養成目的、及びディプロマ・ポリシー ></p> <p>教育の特色 - 医科学 ></p> <p>教育の特色 - 医学物理学 ></p> <p>教育の特色 - 橋渡し研究 ></p>	 <p>CURRICULUM カリキュラム</p> <p>医科学（医学・生命科学）、医学物理、橋渡し・レギュラトリーサイエンスを学べるさまざまな科目があります。</p> <p>修士論文研究 ></p> <p>シラバス ></p> <p>時間割 ></p> <p>優秀論文・表彰 ></p>	 <p>SUPPORT 学生支援</p> <p>学生寮、奨学金、インターンシップ、進学・就職支援、修士生の進路情報を掲載しています。</p> <p>学生生活 ></p> <p>奨学金 ></p> <p>インターンシップ ></p> <p>進学・就職支援 ></p> <p>進路情報 ></p>	 <p>EXAMINATION 入学試験・説明会</p> <p>8月期入試と2月期入試があります。WEBオープンキャンパスのページもあります。</p> <p>入学試験 ></p> <p>説明会 ></p> <p>オープンキャンパス ></p>
--	--	--	--




RESEARCH
研究室案内

基礎医学、臨床医学、医学物理、橋渡し研究など、医学・生命科学領域のさまざまな研究室があり、最先端の研究が行われています。

研究室案内 >



INTERNATIONAL
国際交流

国際的な学術交流によって、学術研究水準の向上を図り、国際的視野を持つ人材の養成を目指しています。

国際交流 >



ALUMNI
修了生

フロンティア医科学の修了生は、博士課程への進学や企業への就職など幅広い分野、年代で活躍しています。

修了生 >

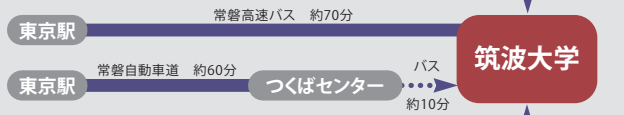
1 アクセス

Access

■電車



■高速バス



■自動車



つくばエクスプレス利用

秋葉原駅から快速で約45分、つくば駅で下車、つくばセンターで「筑波大学循環(右回り)」バスに乗り換え、約10分(筑波大学病院東で下車)

JR常磐線利用

上野から約1時間、ひたち野うしく、荒川沖または土浦で下車、各駅から「つくばセンター」行きバスで約30分、つくばセンターで「筑波大学循環(右回り)」バスに乗り換え、約10分(筑波大学病院東で下車)

常磐高速バス利用

- 東京駅八重洲南口から「筑波大学」行きの高速バスで約1時間(筑波大学病院で下車)
- 東京駅八重洲南口から「つくばセンター」行きの高速バスで約1時間、つくばセンターで「筑波大学循環(右回り)」バスに乗り換え、約10分(筑波大学病院東で下車)

航空機利用

- 成田空港
空港→「つくばセンター」行きバス(約100分)
つくばセンターから「筑波大学循環(右回り)」バス(約10分)
- 羽田空港
空港→「つくばセンター」行きバス(約120分)
つくばセンターから「筑波大学循環(右回り)」バス(約10分)
- 茨城空港
空港→「石岡駅」行きバス(約40分)
石岡駅から常磐線で「土浦駅」(約20分)
土浦駅から「つくばセンター」行きバス(約30分)
つくばセンターから「筑波大学循環(右回り)」バス(約10分)



M MASTER'S PROGRAM in MEDICAL SCIENCES

P MASTER'S PROGRAM in PUBLIC HEALTH



問い合わせ先

〒305-8575 茨城県つくば市天王台1-1-1

筑波大学大学院人間総合科学学術院人間総合科学研究群

フロンティア医科学学位プログラム・公衆衛生学学位プログラム事務室

For Further Information

Tsukuba, Ibaraki 305-8575 JAPAN

Administration office for Master's Program in Medical Sciences and Public Health, University of Tsukuba